平成12年度

愛知県埋蔵文化財センター



年報

2001

(財)愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

平成12年度

愛知県埋蔵文化財センター

年報

2001

(財)愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

目　　次

I. 平成 12 年度事業概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　調査の理由と工程 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
　平成 12 年度　調査遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

II. 遺跡調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　志賀公園遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
　牛牧遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
　猫島遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
　島崎遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
　上品野蟹川遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
　八王子遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
　長谷口遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
　惣作・鐘場遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
　吉野遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
　大坪西遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
　凧山屋敷遺跡範囲確認調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
　上中・西屋敷遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
　岩崎６号窯遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
　清洲城下町遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
　烏帽子遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
　木戸城跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
　下懸遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
　鹿乗川流域遺跡群範囲確認調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
　古新田遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
　寄元３号墳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
　今町遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
　矢並下本城跡試掘調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
　城山城跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
　石堂野Ｂ遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73

III. 埋蔵文化財講演会の記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77

IV. 埋蔵文化財センターの活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
　埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
　発掘調査技術等研修会（ I)･(II)・現地説明会等 ・・・・・・・・・・・・・・ 97
　資料の貸出・提供 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
　検討会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
　ホームページ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101
　平成 12 年度　愛知県埋蔵文化財センター職員・・・・・・・・・・・・・・・ 102

I. 平成 12 年度事業概要

調査の理由と工程

1. 発掘調査

調査委託者		調査の理由	遺跡名	面積(㎡)	調査の期間	調査担当者
国土交通省	(愛知国道工事事務所)	東海環状自動車道	八王子遺跡	2,400	00.5-00.8	北村・小澤・魚住
			長谷口遺跡	1,200	00.9-00.11	北村・小澤・魚住
	(名四国道工事事務所)		矢並下本城跡	200	00.5-00.6	花井・小嶋・成瀬
		国道153号線足助BP	城山城跡	1,300	00.11-01.3	花井・成瀬・永井邦
	(豊橋工事事務所)	矢作川改修	木戸城跡	1,400	00.10-00.12	川井・池本・鈴木裕
			古新田遺跡	4,100	00.11-01.3	花井・小嶋・武井
道路公団	名古屋管理局羽島管理	名神一宮下り線PA	猫島遺跡	10,500	00.4-00.8	赤塚・洲嵜・蔭山
	名古屋建設局豊田工事	第二東海自動車道	今町遺跡	4,000	00.6-00.11	花井・小嶋・武井・成瀬・永井邦
名古屋高速道路公社		名岐道路	島崎遺跡	2,000	01.1-01.3	服部・宮腰・織部
愛知県道路公社		猿投グリーンロード	寄元３号墳	600	00.4-00.6	花井・武井・永井邦
県建設部	道路建設課一宮土木	須成七宝稲沢線	上中･西屋敷遺跡	4,600	00.4-00.12	服部・宮腰・織部
	道路建設課半田土木	国道155線	烏帽子遺跡	2,500	00.4-00.9	石黒・中野・木川
	道路建設課豊橋土木	大塚国府線	石堂野Ｂ遺跡	6,400	00.5-00.9	川井・松田･竹内・鈴木裕・ 皆見
	道路建設課名古屋土木	国道363号線	上品野蟹川遺跡	2,000	00.10-00.12	北村・宇佐見・鈴木達・早野
	道路建設課東部丘陵	瀬戸環状線	吉野遺跡	540	00.12-01.1	北村・小澤・魚住
			大坪西遺跡	260	01.1-01.2	北村・小澤・魚住
		瀬戸設楽線	惣作・鐘場遺跡	4,400	00.12-01.3	北村・宇佐見・鈴木達・早野
			凧山屋敷遺跡	100	00.4-00.5	北村・小澤・魚住
		日進瀬戸線	岩崎６号窯遺跡	2,500	00.6-00.9	北村・池本・宇佐見・鈴木達
	河川課河川工事	五条川改修	清洲城下町遺跡	1,800	00.10-01.3	赤塚・洲嵜・蔭山
		鹿乗川改修	鹿乗川流域遺跡群	1,300	00.10-01.1	川井・竹内・皆見
			下懸遺跡	3,700	00.12-01.3	川井・池本・竹内・鈴木裕・ 皆見
都市基盤整備公団		アーバニア志賀公園住宅	志賀公園遺跡	2,030	00.10-01.3	石黒・中野・木川
愛知県建設部住宅整備課		県営守山住宅建替	牛牧遺跡	200	00.4	北村・池本・宇佐見・鈴木達

2. 整理報告書

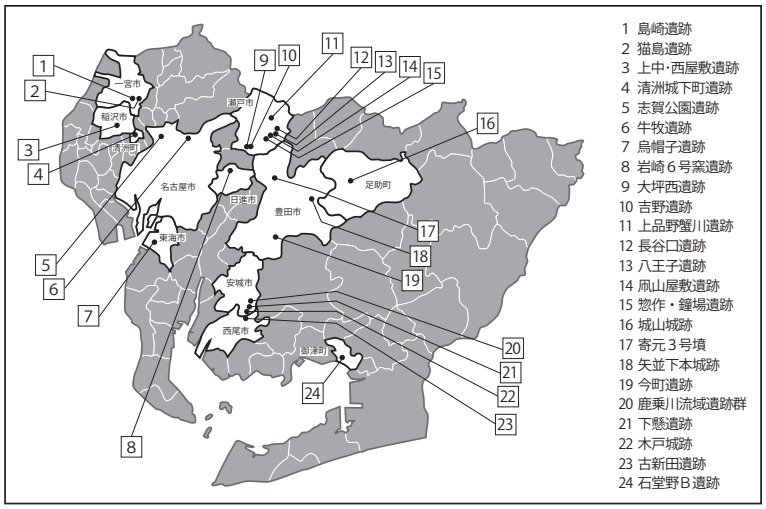
調査委託者	調査の理由	遺跡名	整理・報告書	調査面積(㎡)	調査年度
愛知県建設部河川課	五条川改修	清洲城下町遺跡	整　理	6,800	平成７～９年度
道路公団	第二東海自動車道	郷上遺跡		27,000	平成９～10年度
		本川遺跡		15,500	平成10年度
道路公団 愛知県建設部道路建設課	東海北陸自動車道 県道萩原三条北方線 県道岐阜稲沢線	八王子遺跡		23,740	平成７～９年度
		苅安賀遺跡	報告書	6,721	平成８～９年度
都市基盤整備公団	アーバニア志賀公園住宅	志賀公園遺跡		14,200	平成８～10年度
道路公団	第二東海自動車道	川原遺跡		12,500	平成９～10年度
	第二東海自動車道	大脇城遺跡		750	平成11年度
愛知県建設部道路建設課	県道萩原三条北方線	大毛池田遺跡		550	平成８～９年度
	県道蒲郡碧南線	岡島遺跡		1,000	平成10年度
	国道248号線	天神前遺跡		8,000	平成10年度
愛知県建築部住宅整備課	守山住宅立替	牛牧遺跡		1,200	平成11年度

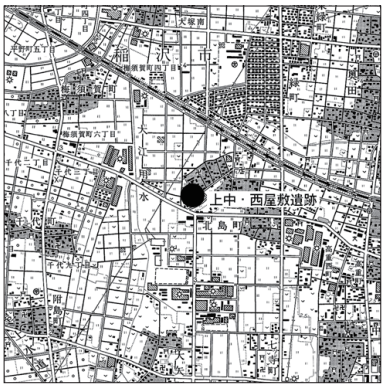




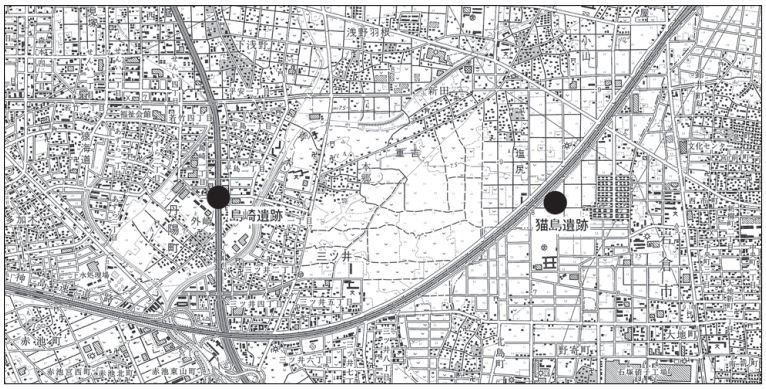


平成 12 年度　調査遺跡位置図

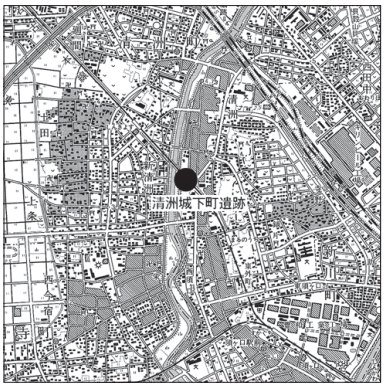




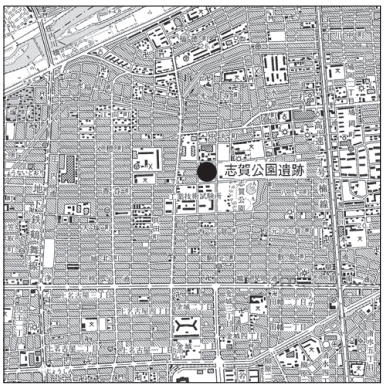
国土地理院 1/2.5 万地図「清洲」



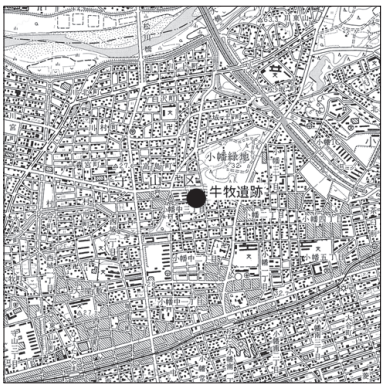
国土地理院 1/2.5 万地図「一宮」



国土地理院 1/2.5 万地図「清洲」



国土地理院 1/2.5 万地図「名古屋北部」



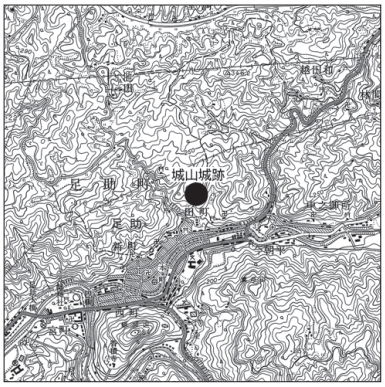
国土地理院 1/2.5 万地図「名古屋北部」



国土地理院 1/2.5 万地図「平針」



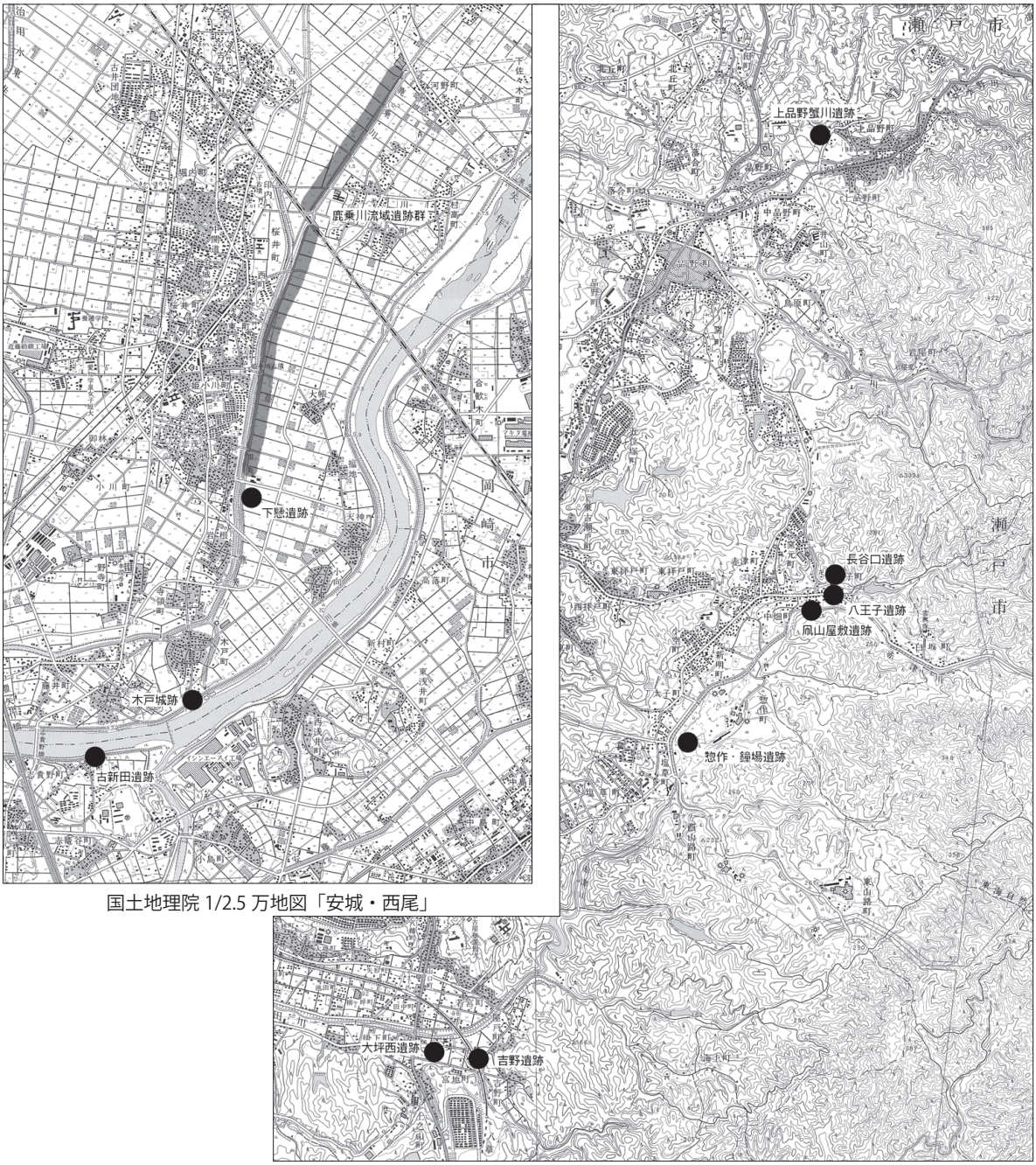
国土地理院 1/2.5 万地図「鳴海」



国土地理院 1/2.5 万地図「足助」



国土地理院 1/2.5 万地図「小坂井」

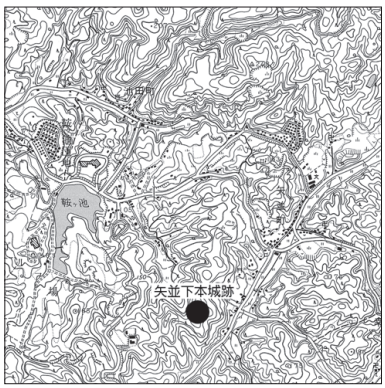


国土地理院 1/2.5 万地図「安城・西尾」

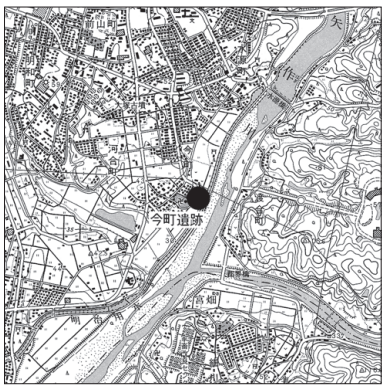
国土地理院 1/2.5 万地図「高蔵寺・多治見・瀬戸・猿投山」



国土地理院 1/2.5 万地図「豊田北部」



国土地理院 1/2.5 万「豊田北部」

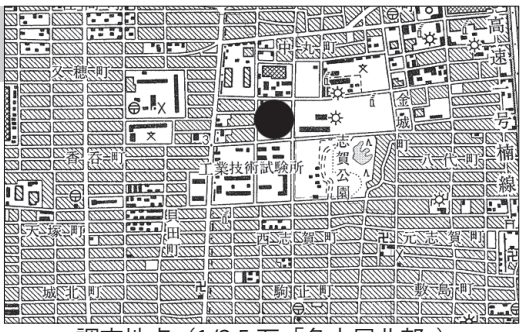


国土地理院 1/2.5 万地図「豊田南部」

II. 遺跡調査の概要

志賀公園（しがこうえん）遺跡

所 在 地　名古屋市北区中丸町二丁目地内
調査理由　アーバニア志賀公園住宅建設
調査期間　平成 12 年 10 月～ 13 年 3 月
調 査 積　2,030 ㎡
担 当 者　石黒立人・中野良法・木川正夫



調査地点（1/2.5 万「名古屋北部」）

調査の経過　今回の調査は、アーバニア志賀公園住宅建設に伴う事前調査として、都市基盤整備公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。期間は平成 12 年 10 月から平成 13 年 3 月までで、総面積 2,030 ㎡である。調査区は、A・B・Cの三区を設定して実施した。志賀公園遺跡では東側に隣接する神戸製鋼跡地で平成 8 ～ 10 年度に当センターが調査をおこなっている。

立地と環境　志賀公園遺跡は名古屋市北区中丸町二丁目に所在し、現地表面の標高は 5.5 m前後である。志賀公園遺跡は弥生時代から中世（室町時代）へと続く複合遺跡である。隣接する遺跡としては、南方に志賀城跡や西志賀遺跡がある。

調査の概要　検出された遺構・遺物は、弥生時代中期（A期）、古墳時代中期（B期）、飛鳥時代～古代（C期）、中世以降（D期）の 4 時期に大きく区分できる。また遺構検出は、弥生時代中期は標高 2.2 m前後、古墳時代中期は標高 2.5 m前後、飛鳥時代～古代と中世以降は標高 4.3 m前後でおこなった。

A 期　A区で小畦畔とともに水田が 26 枚検出された（調査区中央部から南東部にかけては畦畔は不明瞭で検出不能）。1 枚の平均面積は古墳水田（B期）より若干狭く約 20 ㎡である。畦畔の方向は古墳水田と比較すると全体的に若干西にふれている。また、大畦畔らしきものは検出されなかった。遺物は耕作土から弥生土器小片約 10 点（中期；詳細時期不明）と打製石鏃（下呂石製）3 点が出土した。

B 期　A区で大畦畔（東西 1 条、南北 2 条）、小畦畔とともに水田が 26 枚検出された。時期は松河戸 II 式期（5 世紀頃）と考えられる。直上の植物遺体層からは若干の木製品（木製錘 2 点等）が出土した。

C 期　96 年調査区で見られた 7 世紀頃の自然流路は南東から北西方向へ延びる形でC区全面、B区のほとんどとA区南西部にかけて検出された（幅 35 ～ 40 m）。B区で自然流路埋没後の溝数条。また、流路北側に須恵器・土師器を伴う区画溝（南東から北西にのびるものとそれに直交するもの、そして東西または南北にのびるものあり。前者が比較的新しい。）約 20 条や竪穴住居 4 棟が検出された。

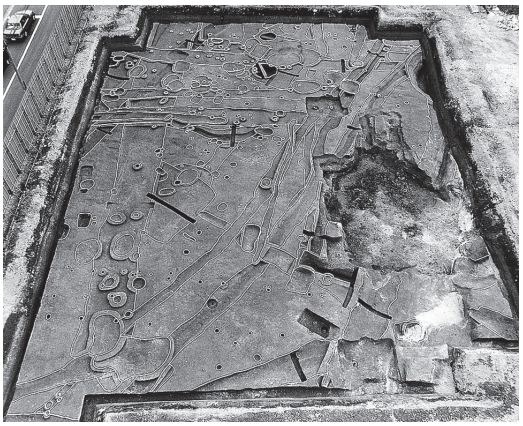
D 期　A区とB区で平行に延びる区画溝 2 列。時期は 14 ～ 15 世紀。土坑群（長軸約 1 ～ 2 m の楕円形または隅丸長方形）数グループ（計数十基、内A区の小土坑より完形の古瀬戸茶入が出土）、A区西部に柵列 2 条（幅約 3.3 m、杭間の距離約 2 m）、円形曲物積上げ井戸 4 基（14 ～ 15 世紀）が検出された。また、B区で検出された焼土ブロック・骨片・炭化物の詰まった長楕円形土坑 3 基はそれぞれ付近に方形（または楕円形）土坑群を伴っているのでそれ



Ａ区　弥生中期水田検出状況（西より）



Ａ区　古墳中期水田検出状況（西より）



Ａ区　古代～中世完掘状況（西より）



Ｂ区　古代～中世完掘状況（西より）



Ａ区　古瀬戸茶入出土状況



Ｂ区　古代自然流路完掘状況（西より）

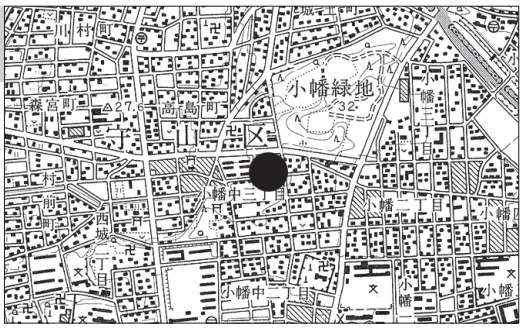
ぞれ火葬施設と埋葬施設の可能性が考えられる。いずれも 14 ～ 15 世紀。

ま と め　志賀公園遺跡は至近距離にある西志賀遺跡・平手町遺跡と違い弥生前期の遺構・遺物は検出されていない。また、今回弥生中期と古墳中期の水田が検出されたが、東側に隣接する以前の調査区では同時期の居住域や墓域が展開する。従って今回の調査区から西方にかけては地形的に低くなっていき、古代になるまでは居住に適さない土地だったようである。

（木川正夫）

牛牧（うしまき）遺跡

所 在 地　名古屋市守山区小幡中三丁目地内
調査理由　県営守山住宅建て替えに伴う事前調査
調査期間　平成 12 年 4 月
調 査 積　200 ㎡
担 当 者　北村和宏・池本正明・宇佐見守・鈴木達也



調査地点（1/2.5 万「名古屋北部」）

調査の経過　牛牧遺跡は名古屋市守山区大字牛牧・高島町・小幡中三丁目に所在する縄文時代から戦国時代にかけての複合遺跡である。本遺跡は名古屋市の北東部、庄内川と矢田川に挟まれた小幡ヶ原と呼ばれる台地の庄内川側縁辺部に位置する。昭和 33・34 年に守山市教育委員会、昭和 36 年に名古屋市教育委員会による発掘調査が実施されている。本調査は昨年度に続き、県営守山住宅建て替えに伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施された。

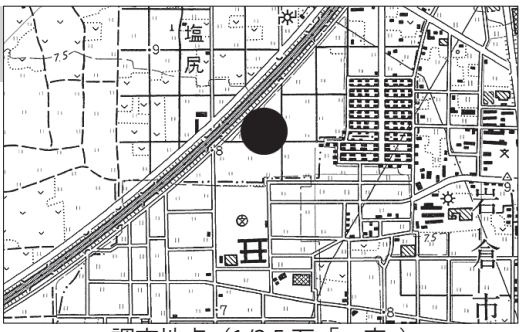
調査の概要　本年度の調査区は、昨年度の調査区の北西約 30 mにあり、標高は約 21 mを測る。昨年度の調査では、縄文時代晩期の土器棺墓 41 基・住居跡 1 棟、弥生時代中期の竪穴住居 1 棟、古墳時代の竪穴状遺構 2 基、中世以降の柵列 1 列等を検出した。本年度の調査では、縄文時代晩期の土器棺墓 2 基と土坑群、弥生時代中期の竪穴状遺構 1 基と集石遺構 1 基等を検出した。遺物としては、縄文土器（後期・晩期）・石器（石鏃・磨製石斧・打製石斧・石匙・石棒）・弥生土器（中期）等が出土した。検出した遺構のうち、時期・性格が判明するものは少なく、遺物の出土も多量とは言えない状況であり、調査区が遺跡の西端部に該当するものと考えられる。（宇佐見　守）


調査区全景（西から）


土器棺出土状況

猫島（ねこじま）遺跡

所 在 地　一宮市千秋町塩尻
調査理由　名神高速一宮パーキングエリア建設
調査期間　平成 12 年 4 月～ 8 月
調 査 積　10,500 ㎡
担 当 者　赤塚次郎・洲嵜和宏・蔭山誠一



調査地点（1/2.5 万「一宮」）

調査の経過　名神高速一宮ＰＡ建設に伴い、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 11 年度より発掘調査を実施している。前年度調査で、猫島遺跡が弥生時代中期前葉から中葉にかけての環濠集落を中心に、縄文時代晩期から中世までの遺構や遺物を包含する複合遺跡であることが明らかになった。今回は前年度調査区の北側、環濠集落中央部にあたる区域を中心にＡ・Ｂの 2 調査区を設定し、約 10,500 ㎡を調査した。ただし、作業の都合上Ａ区を 3 区分し、それぞれＡａ・Ａｂ・Ａｃ区として調査した（第 1 図）。

立地と環境　前年度調査で、遺跡東側に低湿地を検出した。低湿地の中心は自然流路と推定される。遺跡は低湿地西側の標高 7.5 m前後の微高地上に展開する。微高地は氾濫原に埋没した古い自然堤防帯と考えられる。周囲 1 ㎞以内は主に水田・畠地として利用され周知の遺跡は少ないが、北東約 700 mに蕪池遺跡（弥生後期）、西南西約 800 mに三井遺跡（縄文から中世）がある。周囲 2 ㎞以内には弥生時代の集落遺跡が数多く知られている。代表的なものに大地遺跡（弥生中期・南東約 1.1 ㎞）、伝法寺野田遺跡（弥生中期・南南西約 1.4 ㎞）、元屋敷遺跡（弥生前期・南西約 1.5 ㎞）などがある（第 2 図）。

調査の概要　今回の調査で弥生時代中期の竪穴住居が 20 棟以上検出された。その中には松菊里型竪穴住居 5 棟も含まれる。また方形周溝墓や多数の廃棄土坑、前年度調査部分より続く環濠も検出されている。また、弥生時代後期の遺構も初めてＡｂ区でみつかった。2 基の墳丘墓周溝からは山中式初期の土器が出土している。平安時代の遺構検出も目立ち、Ａａ・Ａｃ区で 7 棟以上の掘立柱建物と井戸が調査されている。

弥生時代以前　Ｂ区で前年度Ｆ区ＳＤ 01 の延長である SD29 を検出した（第 3 図）。幅約 7 m、深さ 1.4 mで、上層には砂が厚く堆積し、最下層に腐食質・流木等を多く含む泥土が堆積する。前年度、この溝は縄文晩期頃の自然流路と推定された。今回は時期決定の決め手となる遺物は出土していない。しかし、上部砂層に弥生中期中葉の方形周溝墓がみつかり、流路の埋没がそれ以前の時期であることは確実である。

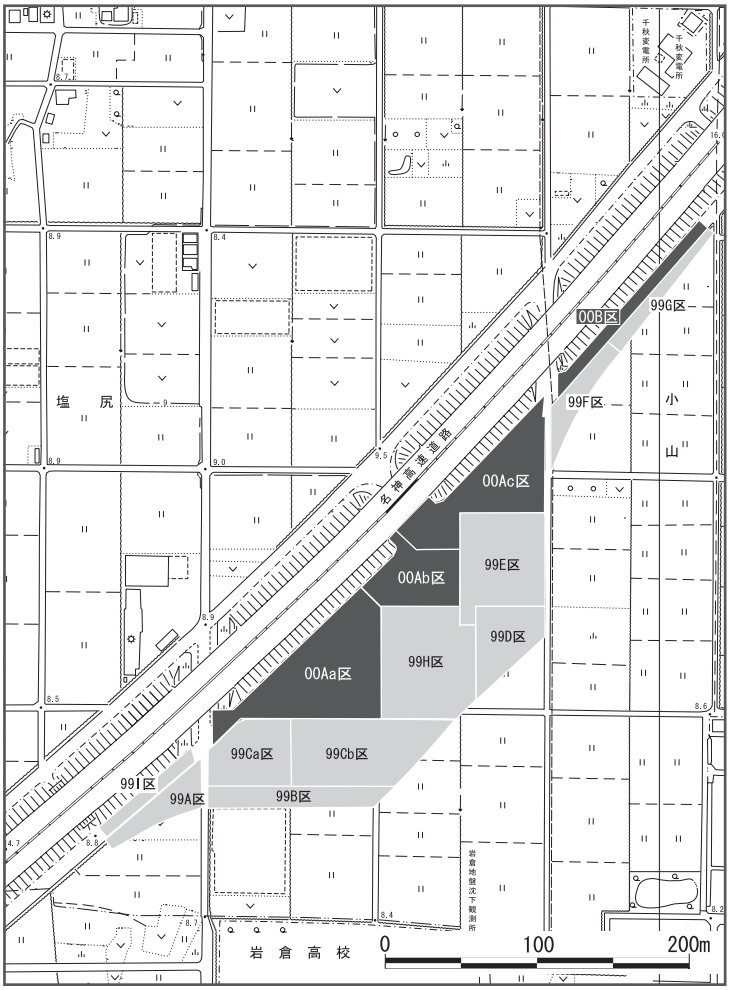
弥生時代中期　調査区のかなりの部分が削平を受け、良好な保存状態とはいえない状況下にあったが、弥生時代中期の竪穴住居を 20 棟余り、痕跡のみをとどめるものを含めれば 30 棟以上検出した（第 5 図）。特に、前年度Ｃ区から 1 棟検出された松菊里型竪穴住居をＡａ区で 4 棟、Ａｃ区で 1 棟調査できたのは注目に値する。平面プランと主柱穴が明確なＡａ区ＳＢ 06 を例示する。ＳＢ 06 は直径 9 m弱の円形で、ほぼ八角形に並ぶ柱穴は一部重複し、周溝の重なりも観察されるので、住居の立て直しが行われたものと推定される。床面までほとんど削平されているが、柱穴は深いもので 60 ㎝以上掘り込まれている。中央土坑は長軸が 2.5

m、短軸 1.3 mの楕円形、底面はU字形で深さは 40 ㎝ある。内部に人頭大の円礫が 2 個置かれていた。また、Ａｃ区では環濠外部で竪穴住居群が検出された。前年度Ｅ区で外環壕から枝分かれしたＳＤ 04 が検出されていたが、これに囲まれるような居住域が形成されていた可能性もある。その他､竪穴住居に隣接して長楕円形の廃棄土坑が数多く検出されている。Ａａ区ＳＫ 126 はこうした廃棄土坑の代表例である。長軸が 4.2 m、短軸が 1.3 mの長楕円形、断面は逆台形で深さは 40 ㎝ある。埋土は黒褐色あるいは黒色で、やや多量の礫や土器類が投棄されている。方形周溝墓はＢ区で､新しく検出された 1 基と前年度Ｆ区でみつかっていた 3 基の未調査部分が調査された。この地区の墓域は環壕集落とやや離れているため、他の墓域との時期差も予想されていたが、周溝ＳＤ 19 に貝田町式古段階の細頸壺が置かれており、時期的な隔たりは全くないことが明らかになった。

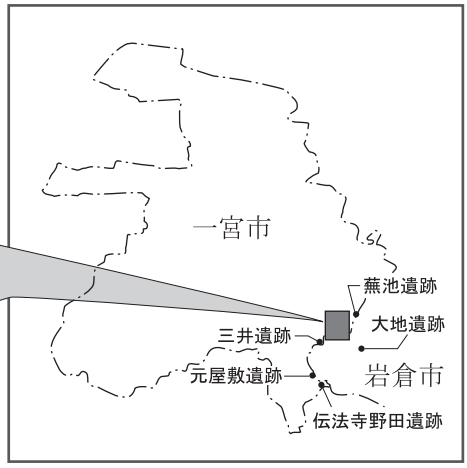
弥生時代後期　Ａｂ区で 2 基の墳丘墓を検出した（第 4 図)。周溝内に置かれていた土器はいずれも山中式初期のもので、墳丘墓も同時期の遺構と考えられる。墓は方形の墳丘をもち、墳丘南端の一角に陸橋部が設けられる。ＳＤ 42 は墳丘の一辺約 11 m、周溝の深さ約 75 ㎝、ＳＤ 38 は墳丘の一辺約 8 m、周溝の深さ約 60 ㎝の規模である。墳丘部には後世の遺構が重複し、主体部は残存していない。墳丘墓以外には小型高杯を出土した溝状遺構ＳＤ 45 がある。削平されてはいるが、墳丘墓周溝である可能性がある。この北側に隣接する竪穴住居ＳＢ 03 からも山中式高杯が出土しており、墓前祭が行われた施設の可能性がある。

古　代　掘立柱建物を中心に古代の遺構の発見が相次いだのも今年度の特徴である（第 6 図)。Ａａ区およびＡｃ区から、方形の柱穴を持つ掘立柱建物を 7 棟以上検出した。中でも保存の良いＡａ区ＳＢ 35 は長軸 10 m、短軸 5.5 m、5 × 1 間、ＳＢ 37 は長軸 7.5 m、短軸 5 m、3 × 2 間でいずれも東西に平行して建てられている。柱穴からは須恵器杯などが出土し、平安時代の建造物と考えられる。井戸もＡａ区から数基検出されている。ＳＫ 557 はＳＢ 35 の北方に隣接する。湧水層まで掘り抜いた上に側板を方形に組み、周囲を粘土で補強している。底部には曲げ物が設置されていた。この井戸には廃絶後多くの須恵器・灰釉陶器が投棄されている。灰釉陶器は主にＫ -90 窯式期の所産であり、井戸の廃絶時期も 9 世紀後半頃と推定される。竪穴住居もＡｂ・Ａｃ区から検出された。Ａｂ区ＳＢ 06 は、ＳＤ 42 墳丘部に重複する長方形の竪穴住居である。住居床面には焼土が広がり、灰釉陶器・土師器片が出土する。Ａｃ区ＳＫ 246 は長楕円形の住居でカマド状の遺構が付帯していた。ＳＫ 274 は約 2 m四方のほぼ正方形の池状遺構である。基盤の礫層まで掘り込まれ、周辺から数本の溝が集まる。廃絶後、灰釉陶器や礫が投棄されている。ＳＤ 61 は北東から南西にのびる溝で、Ａａ・Ａｂ区を縦断し前年度Ｂ・Ｃ・Ｅ区に連なる長大な遺構である。大部分の調査区では削平され、幅 60 ㎝、深さ 25 ㎝程度の溝に過ぎなかったが、削平を免れたＡｂ区では幅 2 m､深さ 80 ㎝におよぶ断面Ｖ字形のしっかりした溝であることが判明した。

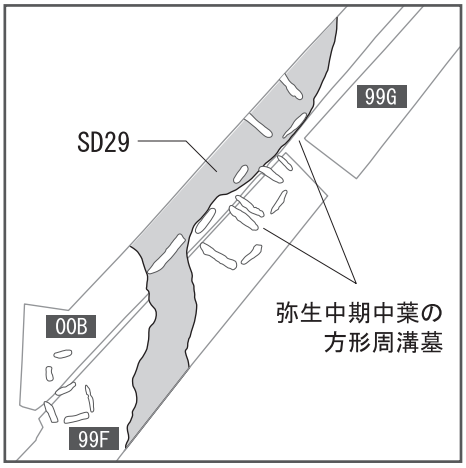
中　世　Ａａ区で灰釉系陶器を副葬した土坑墓が 4 基検出されている（第 6 図)。ＳＫ 145・146 およびＳＫ 450・461 である。またＡｂ区ＳＤ 01 はＡａ区・99 Ｈ区にまたがり、約 16 m四方の方形区画を形成する遺構である。その性格は不明だが、遺物から中世でも古い時期の遺構と推定される。（洲嵜和宏）



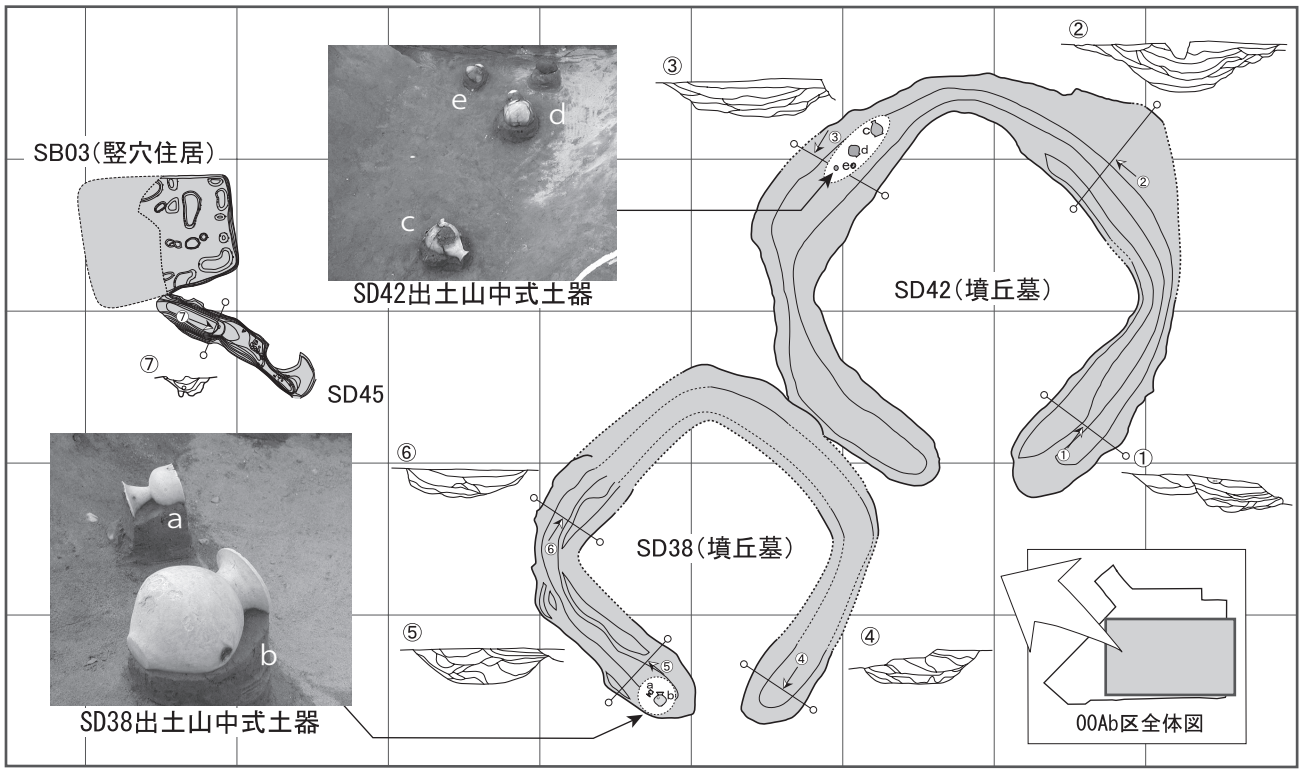
第１図　調査区配置図（1：5,000）



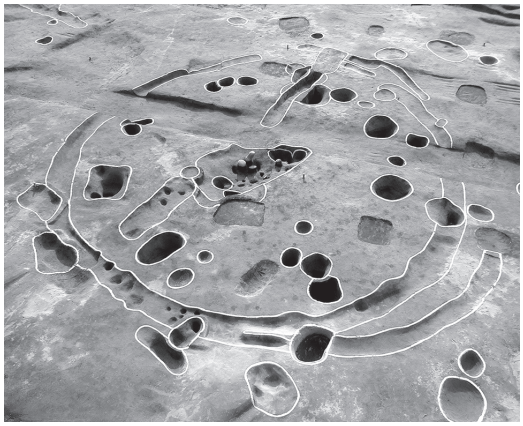
第２図　遺跡の位置と周辺遺跡



第３図　Ｂ区　旧自然流路ＳＤ 29



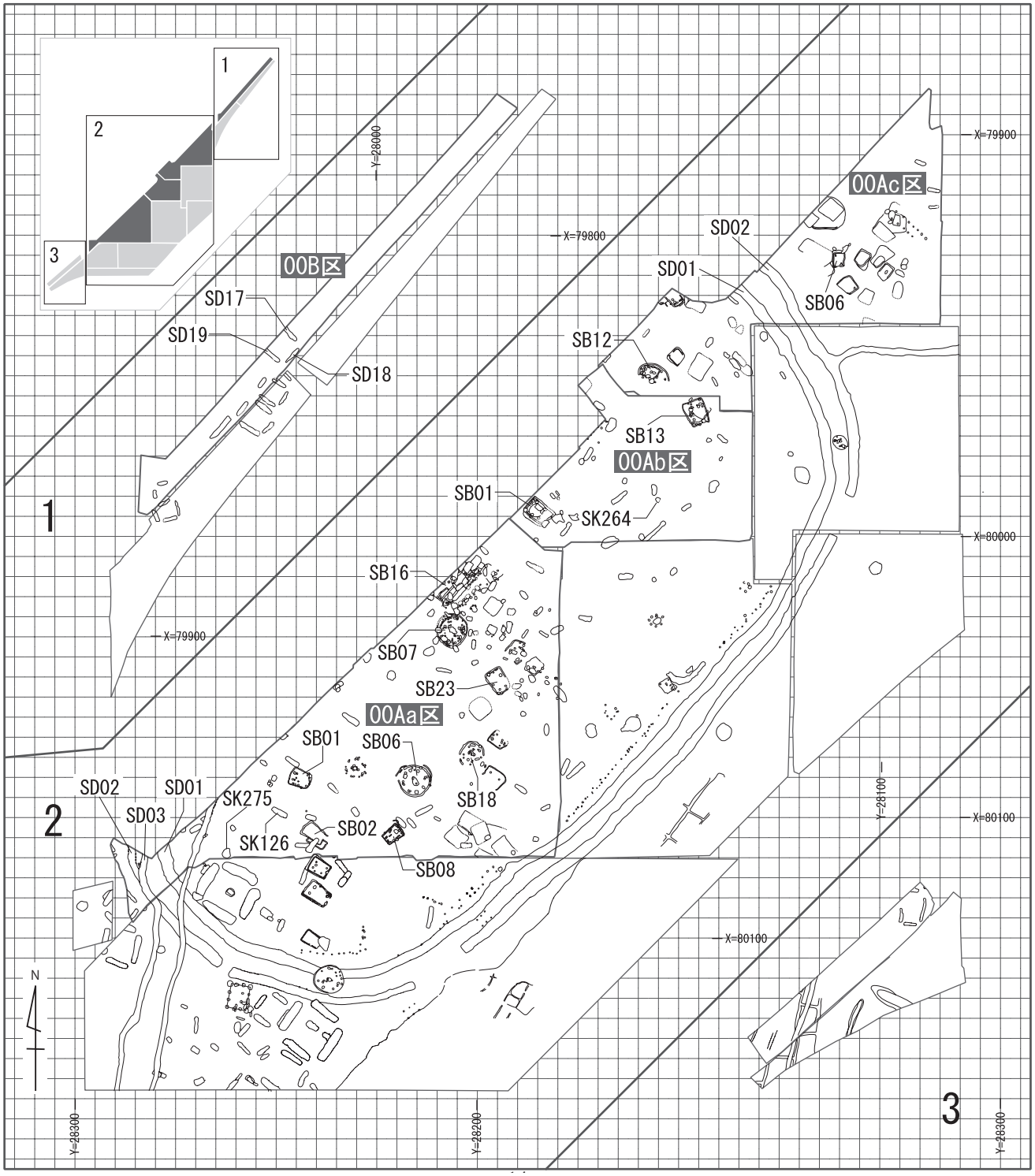
第４図　Ａｂ区　弥生時代後期の遺構（1：250）



Ａａ区　松菊里型竪穴住居ＳＢ 06



Ｂ区　ＳＤ 19（方形周溝墓）出土土器



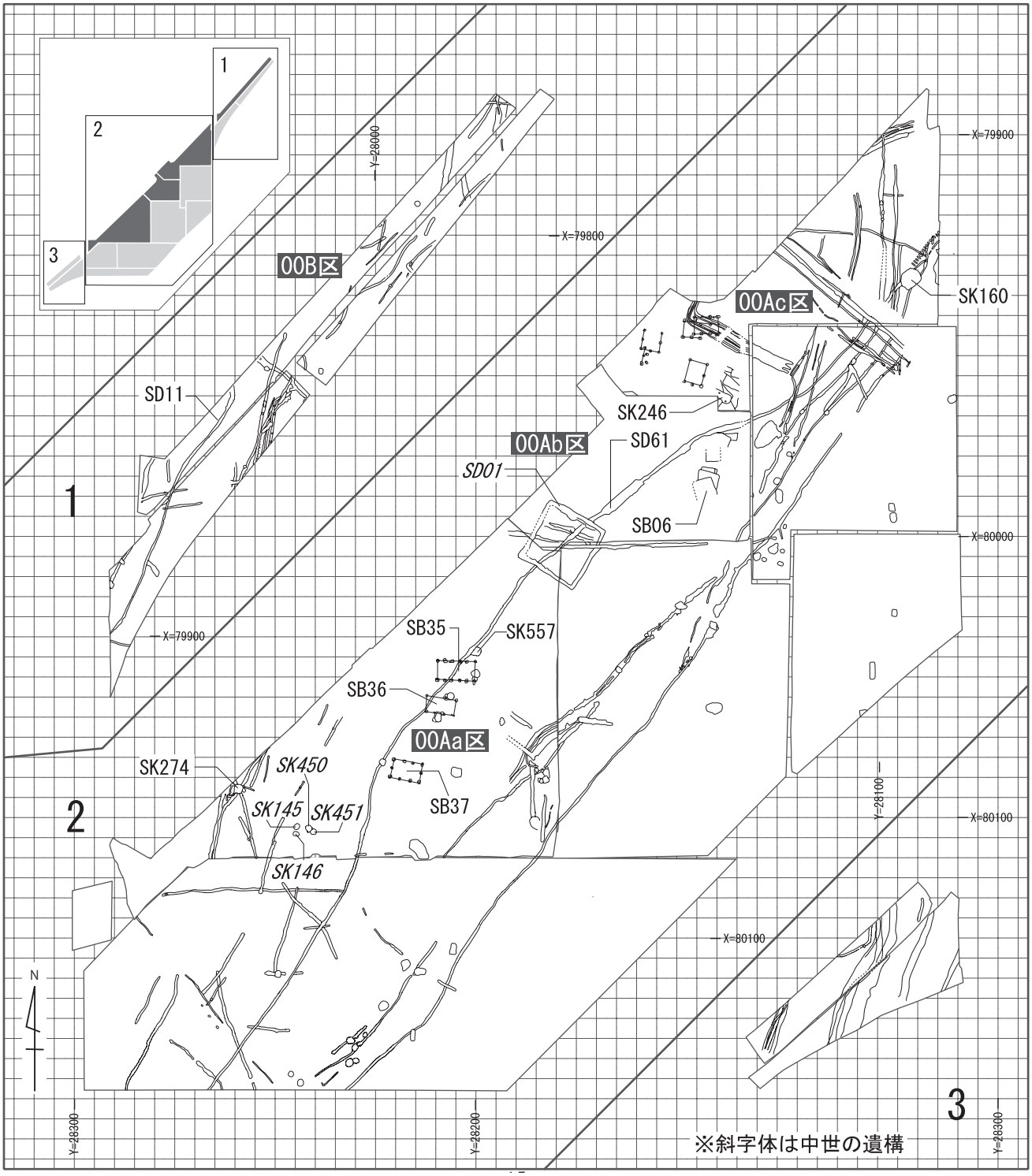
第５図　弥生時代中期の遺構（1：2,000）



Ａａ区　平安時代掘立柱建物ＳＢ 35



Ａａ区　平安時代井戸ＳＫ 557



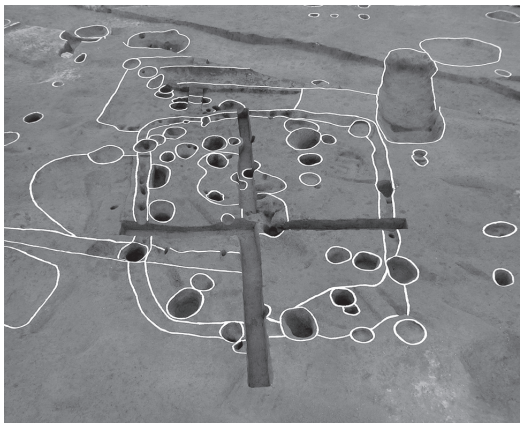
第６図　古代・中世の遺構（1：2,000）



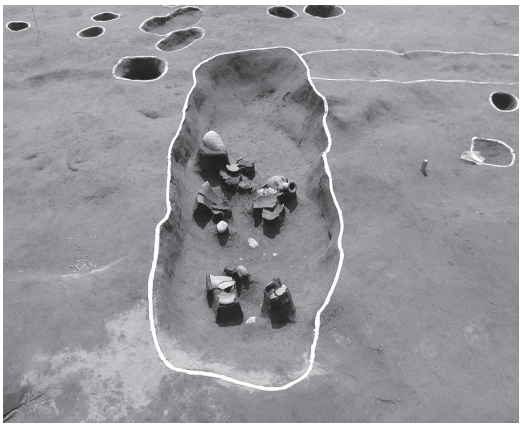
B区　自然流路ＳＤ 29



Ａａ区　ＳＫ 275 焼土塊



Ａａ区　竪穴住居ＳＢ 01



Ａａ区　廃棄土坑ＳＫ 126



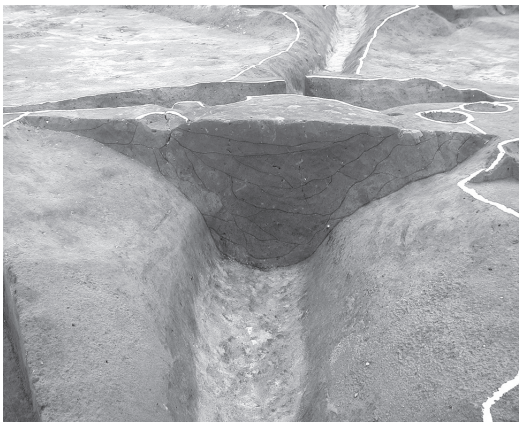
Ａａ区　松菊里型竪穴住居ＳＢ 07



Ａｂ区　ＳＫ 264 出土沈線紋系土器



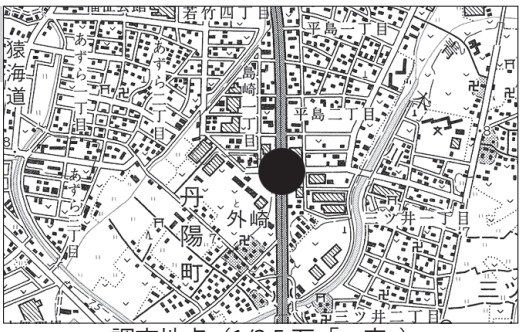
Ａａ区　平安時代掘立柱建物ＳＢ 37



Ａｂ区　古代溝ＳＤ 61

島崎（しまざき）遺跡

所 在 地　一宮市島崎地内
調査理由　名岐道路建設
調査期間　平成 13 年 1 月～ 3 月
調 査 積　2,000 ㎡
担 当 者　服部信博・宮腰健司・織部匡久



調査地点（1/2.5 万「一宮」）

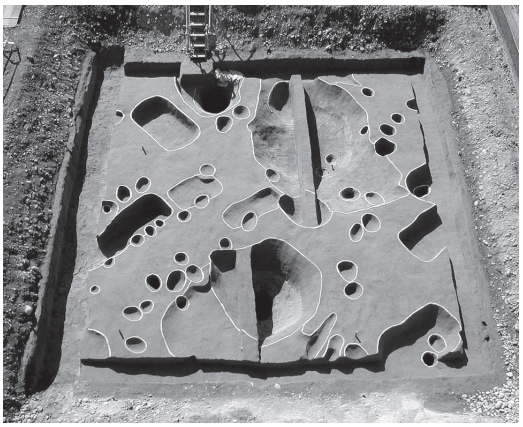
調査の経過　島崎遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなく、名岐道路（県道高速清洲一宮線）建設に伴う範囲確認試掘調査の結果､新たに確認された遺跡である。本遺跡の発掘調査は名岐道路(県道高速一宮清洲線）建設の事前調査として名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。同線は国道 22 号線名岐バイパス上の高架道路であるため、その橋脚部分のみの調査となった。調査面積は橋脚 10 基分、合計 2,000 ㎡で平成 13 年 1 月から 3 月にかけて実施した。

立地と環境　島崎遺跡は一宮市の南東部、名神高速道路一宮 IC の北側、一宮市島崎地内に所在する。調査対象である国道 22 号線は名古屋市と岐阜市を結ぶ主要国道であり、交通量の非常に多い幹線道路である。10 の調査区は全長約 400 mの工区に 30 ～ 40 mごと、一調査区約 200 ㎡で 22 号線の中央分離帯とその両側一車線分を囲む形で調査及び工事ヤードが設定されている。島崎遺跡は標高は 6.0 mから 6.5 m前後で自然堤防と後背湿地からなる自然堤防帯上に立地している。周辺の主な遺跡としては北西約 1.5 ㎞のところに縄文時代から古墳時代の遺跡として著名な馬見塚遺跡が、また南東約 2 ㎞には弥生時代から中世に位置づけられる元屋敷遺跡がある。

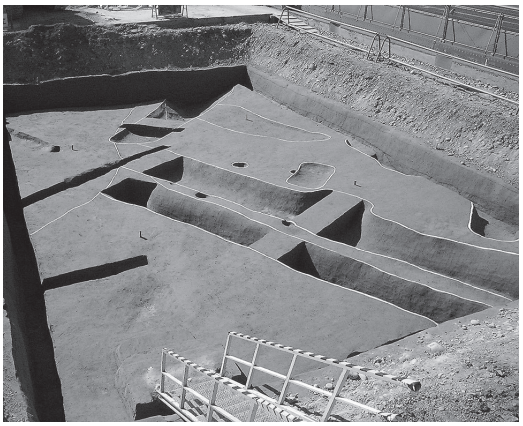
調査の概要　10 基の橋脚部分を、南からＡ～Ｊ区として順次調査を行っていった。

遺跡は、南側を流れる青木川に沿って北東から南西に延びる微高地上に立地しており、調査の結果、Ｃ～Ｅ区にかけてがもっとも高地部分で、北側ではＦ区からＪ区にかけてゆるやかに落ち込み、南側はＢ区からＡ区にかけてやや急に下がっている。

時期は江戸時代後期と中世期に大きく分かれる。江戸時代後期の遺構としては、Ｄ区以南において水田が検出されている。中世期の遺跡の様相は、13 ～ 14 世紀の居住域･水田から、15 世紀の墓域へと変遷する。13 ～ 14 世紀の居住域は、北側（Ｆ･Ｇ区）と南側（Ａ･Ｂ区）に、微高地の縁の沿って北東から南西に走る数条の溝によって区画されている。その内側にあたるＣ～Ｅ区では土坑・井戸・溝が見つかっており、居住域内を走る溝についても微高地の方向によって規制されている。またこの時期、居住域の外で低地部になるＨ～Ｊ区・Ａ～Ｂ区では、河川による砂の堆積が顕著で、部分的に水田が営まれている。15 世紀になると、ほぼ調査区全域にわたり、方形土壙によって構成される墓域になるが、この土壙の軸線も微高地と同方向を示す。　（宮腰健司・織部匡久）



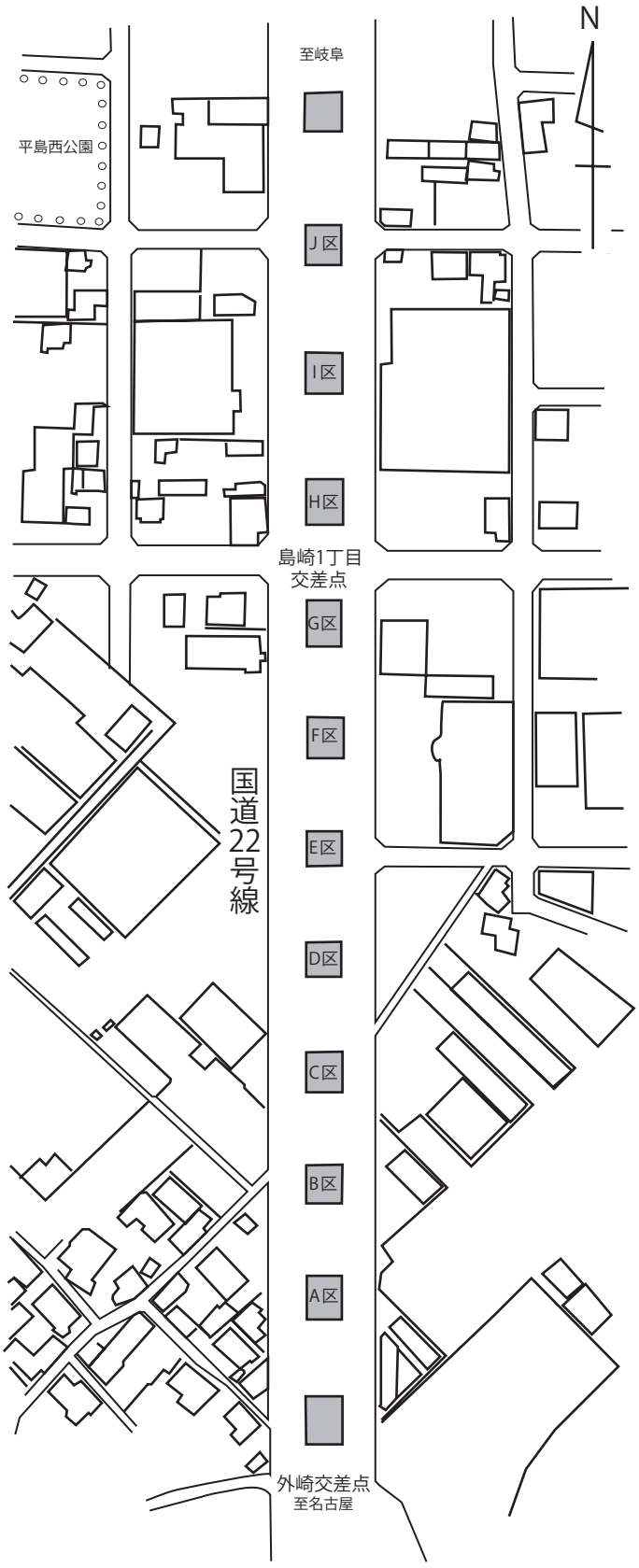
D区　全景　方形土坑墓群（北から）



I区　全景（北東から）



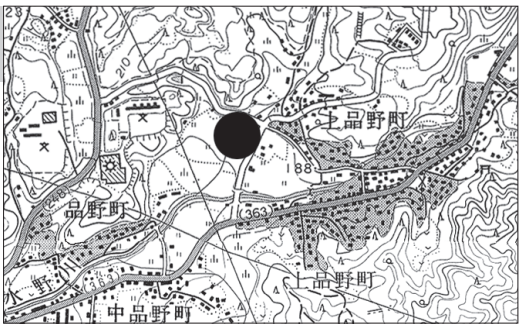
J区　山茶椀出土状態（南から）



調査区配置図（1：2,500）

上品野蟹川遺跡（かみしな の かにかわ）

所 在 地　瀬戸市上品野町地内
調査理由　国道 363 号線改良
調査期間　平成 12 年 10 月～ 12 月
調 査 積　2,000 ㎡
担 当 者　北村和宏・宇佐見 守・鈴木達也・早野浩二



調査地点（1/2.5 万「多治見・猿投山」）

調査の経過　調査は国道 363 号線の改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として昨年度より実施している。本年度は 2,000 ㎡を、Ａ・Ｂ区の２つの調査区に分割して実施した。調査期間は平成 12 年 10 月から 12 月である。

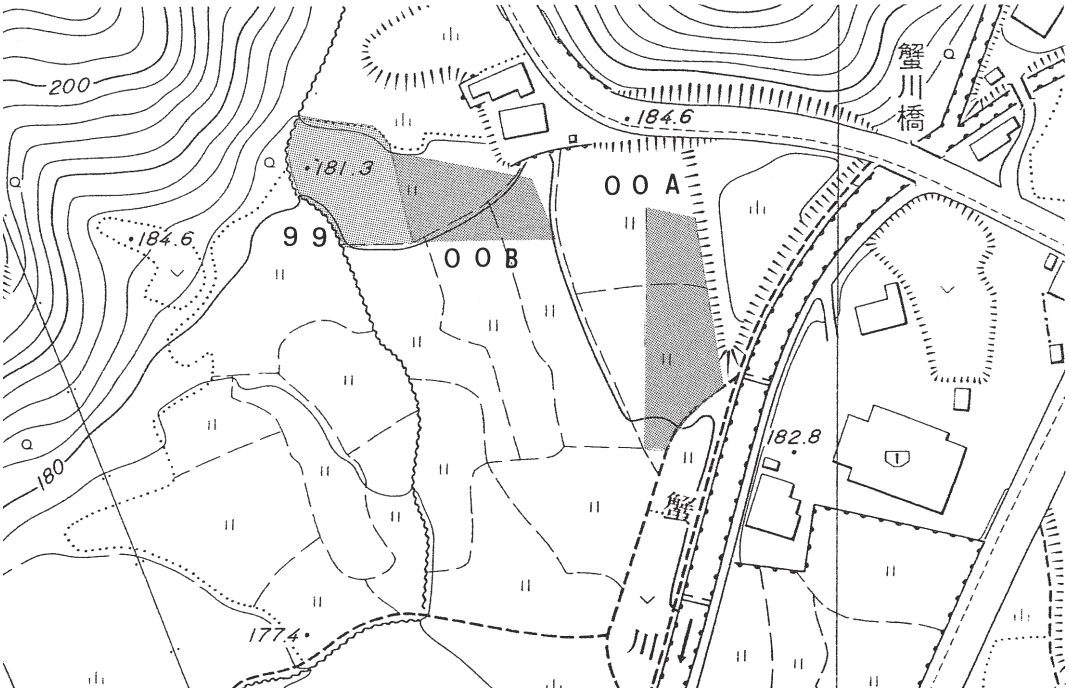
立地と環境　上品野蟹川遺跡は瀬戸市の北東部、水野川と蟹川が合流する地点付近の標高約 180 mの沖積地に立地している。遺跡の南には旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である上品野遺跡がある。

調査の概要　調査は、昨年度の調査区の東約 60 mにＡ区（1,300 ㎡）を、昨年度の東隣にＢ区（700 ㎡）を設定し実施した。

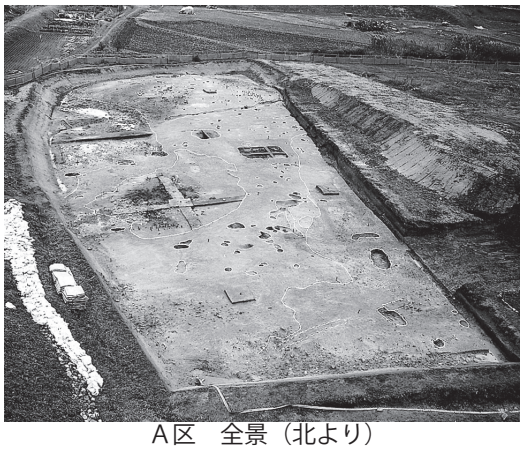
Ａ区では、調査区の北西部と南東部を流れる２条の自然流路に挟まれた微高地で、平安時代の竪穴住居１棟・大形土坑１基・溝２条・ピット群を検出した。竪穴住居は調査区の中央西寄りに位置する。東西約 3.5 m、南北約 2.4 mを測る隅丸方形の竪穴住居で、北壁中央やや東寄りでカマドを検出した。また、建築部材と考えられる炭化物を住居内のほぼ全面から検出した。カマドの残存状態は良好で東西約 90 ㎝、南北約 100 ㎝を測る。カマドの焚口部には東西約 100 ㎝、南北約 50 ㎝の灰・炭化物の広がりを確認した。北壁に沿う位置で支脚と考えられる石と、その周りで土師器の甕（濃尾型甕）が出土した。他の出土遺物としては、東壁中央近くの床面直上で完形の灰釉陶器の椀（黒笹 14 号窯式）が伏せた状態で出土した。大形土坑は竪穴住居の東南約３mにある。径約 2.1 mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さ約 45 ㎝を測る。埋土中から土師器の甑・灰釉陶器の椀の破片が出土した。２条の溝は東西方向に平行に走る。西側はともに調査区外のため全容は明らかではないが、北側の溝（ＳＤ 01）は検出長約２m、検出面からの深さ約３㎝を測る。南側の溝（ＳＤ 02）は検出長約 13 m、検出面からの深さ約 20 ㎝を測り、東南部を流れる自然流路に続いている。また調査区中央部から南部にかけて多数のピットを検出したが、これらの幾つかは掘立柱建物の柱穴になると考えられる。

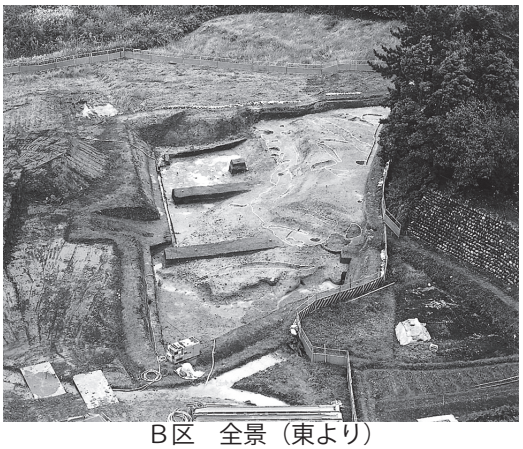
Ｂ区は、北西部の丘陵斜面と北東部から南部に広がる自然流路に分かれる。これらは昨年度の調査区から続くものである。遺構としては戦国時代の施釉陶器の破片が出土した溝・土坑を丘陵斜面で検出した。自然流路の埋土の上層の黒褐色土からは山茶椀・施釉陶器・木製品など鎌倉から室町時代にかけての遺物が、下層の青灰色粘質土の直上から須恵器・灰釉陶器など奈良・平安時代の遺物が出土した。

その他、Ａ・Ｂ区の包含層から出土した遺物として、旧石器時代の石器・剥片、縄文時代の石鏃、「山寺」「山」「阿」などの墨書がみられる灰釉陶器、宋銭（「元豊通宝」「紹聖通宝」）などがある。　（宇佐見　守）



調査区位置図（1：2,500）


A区　全景（北より）


B区　全景（東より）


A区　竪穴住居（東より）


A区　竪穴住居カマド

八王子（はちおうじ）遺跡

所 在 地　瀬戸市八王子町
調査理由　東海環状自動車道建設
調査期間　平成12年5月～8月(A区)・11月～12月(B区)
調 査 積　2,400 ㎡
担 当 者　北村和宏・小澤一弘・魚住英史



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

調査の経過　調査は東海環状自動車道建設に伴う事前調査として、建設省（現国土交通省）から愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。

立地と環境　八王子遺跡は矢田川の支流、赤津川と木下川によって形成された狭小な沖積地に位置する。調査地点は、木下川左岸及び赤津川右岸に形成された河岸段丘上に立地する。本遺跡の東約 500 mには縄文時代と中世の複合遺跡白坂雲興寺遺跡が所在する。

調査の概要　調査は、県道瀬戸設楽線に接する南部を 00 A区、名鉄瀬戸自動車営業所の建物があった木下川に接する北部を 00 B区として、2 調査区で実施した（以下 00 略）。

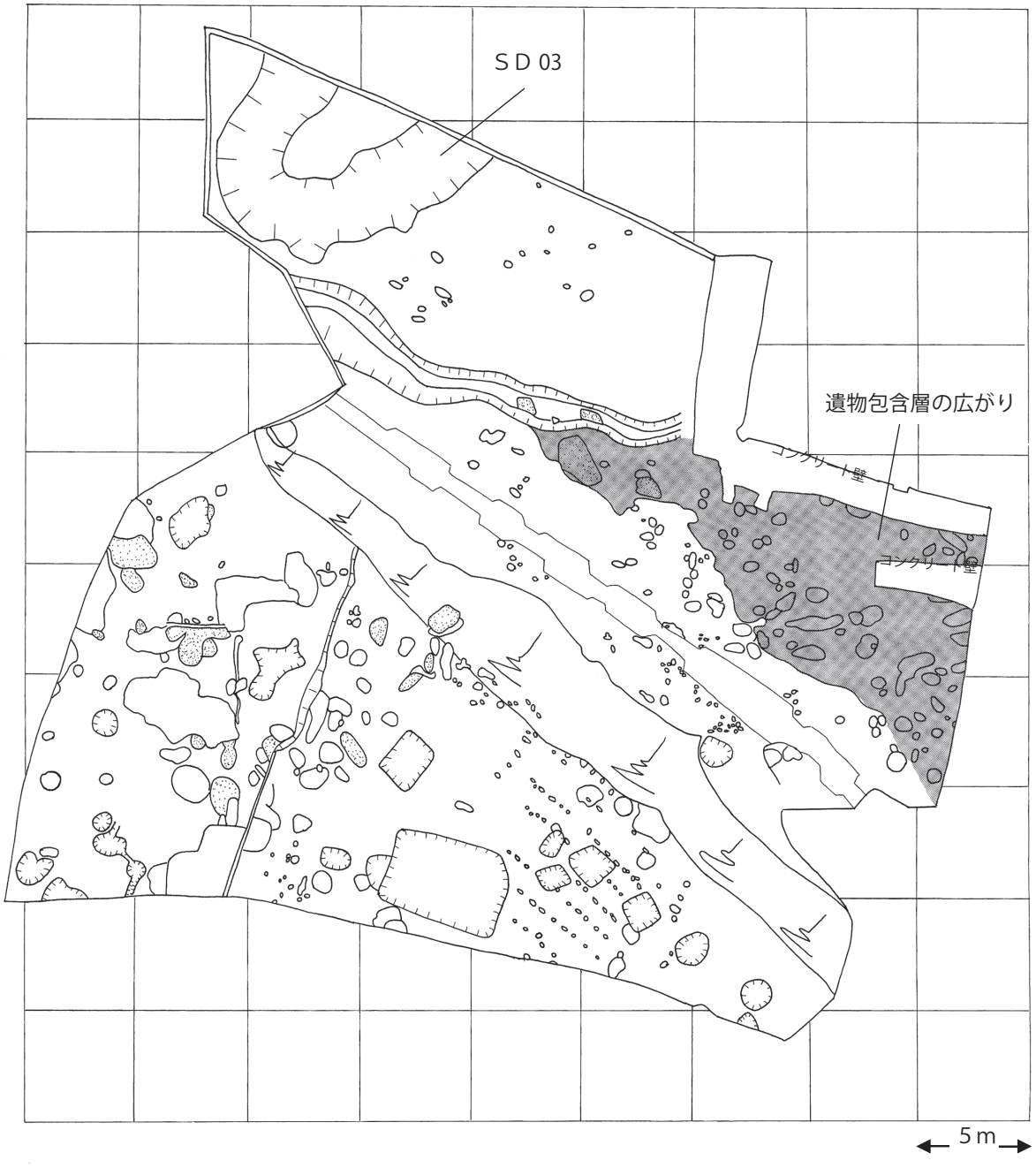
A区は、調査前、調査区を北西から南東に結ぶラインあたりで擁壁が築かれており、それを境に南北が上下 2 段に分かれ比高差約 1 mを測った。南側（県道側）の上段部では、20～ 30 ㎝表土を剥ぐとベースの黄褐色の粗粒砂が露呈し、近現代の家屋建築による削平が大部分を占めた。北側下段部の基本層序は、整地層（客土）、黄灰色土及び黄褐色土（旧耕作土）、黒褐色粘質土（遺物包含層）、暗褐色粘質土の順である。調査区の中ほどから東側では、縄文時代早期を中心とする遺物包含層である黒褐色粘質土層が厚く堆積し、多量の縄文土器片と共に石鏃やスクレイパー、磨製石斧などが出土した。調査区北西側では自然の旧流路と思われる S D 03 を検出した。

A 区と現木下川との間に位置する B 区は、その大半が旧流域（氾濫原）に相当しており、その埋土中から縄文時代をはじめ各時代の遺物の出土がみられた。

（魚住英史）


A区　全景（東より）

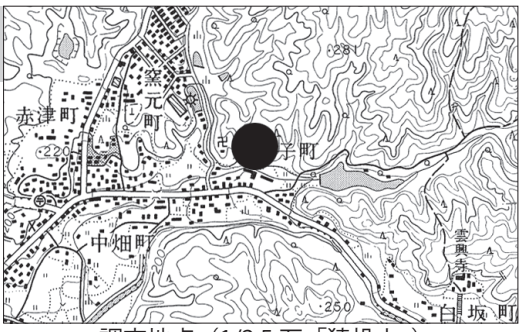

B区　全景（東より）



Ａ区　遺構全体図（1：300）

長谷口（はせぐち）遺跡

所 在 地　瀬戸市長谷口町
調査理由　東海環状自動車道建設
調査期間　平成 12 年 8 月～ 11 月
調 査 積　1,200 ㎡
担 当 者　北村和宏・小澤一弘・魚住英史



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

調査の経過　長谷口遺跡は瀬戸市長谷口町に所在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、東海環状自動車道建設のため国土交通省から愛知県教育委員会を通じ委託を受け、本年度は平成 12 年 8 月から 11 月にかけてＡ・Ｂの 2 調査区 1,200 ㎡の調査を実施した。

立地と環境　瀬戸市の河川沿いには狭い沖積地が盆地状に広がっており、矢田川の上流赤津川には赤津盆地がある。長谷口遺跡は赤津盆地の東側､赤津川に流れ込む木下川右岸の段丘上に立地し、木下川を挟んで左岸には八王子遺跡が所在する。現況は竹林であったが、それ以前は水田と畑である。

調査の概要　木下川沿いの低地部分（標高 195 m）をＡ区、北側山際の部分（標高 200 m）をＢ区として、本年度はこの 2 調査区で実施した。

Ａ区では木下川沿いから水車小屋に関わる施設の一部を、Ｂ区では縄文時代（早期後半から中期後半）の土坑や集石炉、平安時代の竪穴式住居 2 棟を検出した。

Ａ　区　Ａ区の木下川に面した低い部分からは、幅 1 mから 30 ㎝程の大小様々な花崗岩からなる礫群を検出したが、これらの礫群は木下川の河道の一部と考えられる。

木下川より一段高くなったＢ区側（北側）の平らな部分は標高 197 mから 198 mを測る。平らな部分は竹林になる以前は水田であったようで、水田の床土が確認できた。

遺構は水田によって大部分が削平されていたが、調査区東側部分では縄文時代の土坑等を検出した。

調査区南西側では水車小屋に関わる施設（ＳＸ 02）を検出した。施設の南側は河川敷内となり、河川保持のため完掘できなかったが南北 2 m 50 ㎝、東西（幅）1 m 70 ㎝を測る長方形状で、周りを 50 ㎝から 70 ㎝大の花崗岩で囲み、後期古墳の石室を思わせるような状況で、花崗岩の内側には腐食が著しい柱状の木が添うように巡っていた。長方形状施設の柱状の木で区切った南側では礫が敷いてあり、礫の上や間から扁平な 10 ㎝前後の石や腐食した鉄が出土した。長方形施設は水車の基礎部分とみられる。

また施設周辺からは方形状の石と扁平な石が出土した。

方形状を呈した石は珪砂を砕く底石で、一辺が 17 ㎝前後で厚さ 12 ㎝前後を測る。内側のみ凹んだものと両面が凹んだものの 2 種類出土している。この底石の周りを板で囲み桝を作り珪砂がこぼれないようにして杵で搗き、珪砂を砕く底石が凹むと裏返して使用したそうである。珪砂を搗き砕いて、ガラス粉とするには約一昼夜水車にかけたという。

扁平な 10 ㎝前後の石はトロンミルの中に入れた「遮胡の玉石」と呼ばれる北朝鮮遮胡で産する玉石で、昭和 5 年頃から輸入され長年使用されていたようで、戦後は輸入が途絶え



A区　南東部全景



A区　南西部全景



A区　中央部全景



A区　ＳＸ 02 全景



A区　ＳＸ 02（南より）



A区　ＳＸ 02（北より）



A区　ＳＸ 02（東より）



A区　ＳＸ 02（北東より）

たようである。トロンミルの中に入れた玉石（シャコと称していた）が研磨され摩耗し、その結果扁平になったものである。

なお『陶家室伝記』（戸田修二氏所蔵本、『瀬戸ところどころ今昔物語』所収）によれば享和三年（1803）には赤津に水車があったようである。

『瀬戸其外、石粉挽搗水車人別・・・・・

享和三亥年願済

・・・・・・・・

一　水車　一ヶ所　売粉搗　　赤津村　中島新造

一　同　同　　豊蔵

・・・・・・・・

以上三十二ヶ所』

B　区　　B区は北側に山があり、山際の狭い平らな部分が調査区で縄文時代早期後半から中期後半の土坑や集石炉、平安時代の竪穴住居1棟等を検出した。遺構とおぼしきピットや土坑を検出しているが、無遺物のものが目立ち、現況から木の根や筍の跡、耕作にともなったものの可能性が大きい。

縄文時代の遺構は、調査区の東側と西側部分より多く検出した。調査区南西部分では集石炉を1基、検出した。遺跡全体を覆う茶褐色土の遺物包含層からは早期～中期後半頃の土器片や石鏃が出土している。

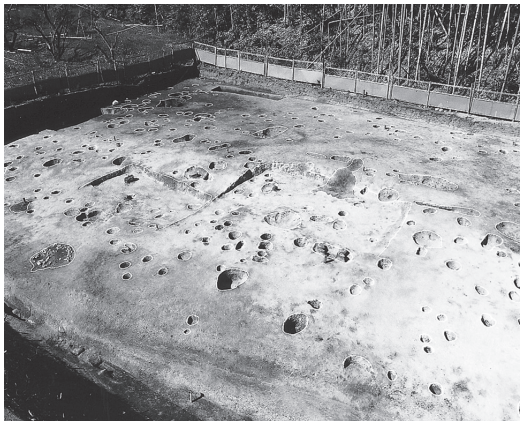
集石炉（ＳＸ01）は径1ｍ25㎝のほぼ円形状を呈した掘り込みを持つ集石炉である。集石の礫は被熱した礫が多い。掘り込み底面上にやや大形の礫が敷かれた状態で検出した。礫の総数は477点、覆土からは焼土や炭化物と縄文土器の小破片が5点出土した。早期の土器片と前期の土器片とが出土しており、縄文時代前期の集石炉と考えられる。

土坑（ＳＫ20）は長径80㎝、短径50㎝の楕円形状をし、土坑内より中期後半の土器の口縁片が出土した。

平安時代の遺構は、竈のある竪穴住居（ＳＢ02）で現存部は西壁320㎝、北壁525㎝、東壁290㎝を測る。住居跡の南半分は削平され滅失している。竈を築いた土の中からＫ-14期頃の灰釉皿や土師器甕（濃尾型）の破片が出土した。

時期不明の竪穴住居（ＳＢ01）はＳＢ02の西側で現存部は西壁230㎝、北壁410㎝東壁230㎝を測る。内面にケズリのある甕が出土している。

ま　と　め　　木下川を挟んで対岸には八王子遺跡が所在するため、八王子遺跡同様に縄文時代早期を中心とする遺跡と考えられていたが、今回の調査により平安時代の集落も展開していたことが確認できた。また､現在ではほとんど見られなくなった水車小屋の施設の一部を検出した。水車部分とみられ調査区内では木下川からの流水引用状況が不明であるが、南側の河川敷地内に水車に引く水路があったものと考えられる。地元での聞き取り調査では、明治初期頃にはすでに調査区内には水車小屋はなかったそうである。　　（小澤一弘）



B区　北西部全景



B区　中央部全景



B区　北東部全景



B区　ＳＸ 01 上面



B区　集石炉・住居跡全景



B区　ＳＸ 01 下面



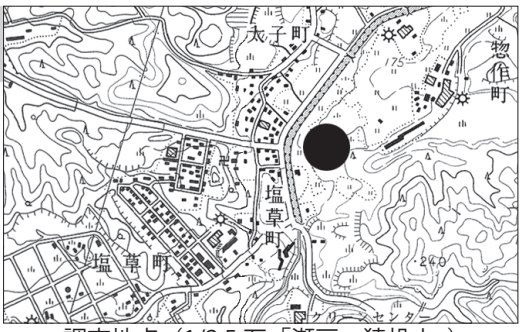
B区　ＳＢ 02 全景



B区　ＳＸ 01 下面

惣作（そうさく）・鐘場（かねば）遺跡

所 在 地　瀬戸市惣作町、鐘場町
調査理由　県道瀬戸設楽線建設
調査期間　平成 12 年 12 月～平成 13 年 3 月
調 査 積　4,400 ㎡
担 当 者　北村和宏・宇佐見 守・鈴木達也・早野浩二

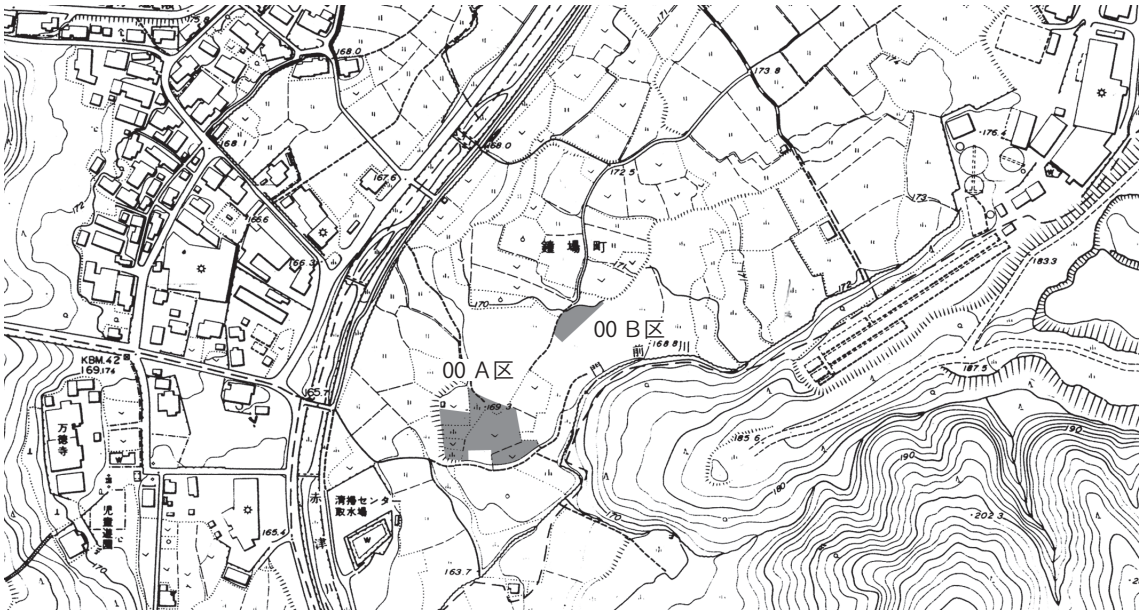


調査地点（1/2.5 万「瀬戸・猿投山」）

調査の経過　調査は県道瀬戸設楽線建設に先立つもので、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、今年度より発掘調査を実施している。平成 12 年度は平成 12 年 12 月から平成 13 年 3 月にかけてＡ区 3,000 ㎡、Ｂ区 1,300 ㎡、範囲確認 100 ㎡、計 4,400 ㎡の発掘調査を実施した。

立地と環境　惣作・鐘場遺跡は瀬戸市惣作町、鐘場町に所在し、矢田川の支流赤津川の左岸に形成された標高 170 m前後の段丘上に立地する。遺跡の周囲には、太子縄文遺跡、太子遺跡が南接するほか、約 1 ㎞北東に瓶子窯跡、巡間Ｅ窯跡、約 1.5 ㎞北東には本センターが発掘調査を実施した八王子、長谷口遺跡がある。

調査の概要　今年度の調査の結果、Ａ区において後期旧石器時代終末～縄文時代草創期、縄文時代中期、弥生時代終末～古墳時代前期、飛鳥時代、平安時代前期、中世、近世と各時期の遺構・遺物が確認され、本遺跡が断絶をともないつつも長期間にかけて継続する複合遺跡であることが明らかとなった。ただし、耕起にともなう削平によって遺構の残存は必ずしも良好でなく、Ａ区西半部では遺構はほとんど確認されていない。一方、Ｂ区は調査条件の制約から全面的な調査が不能で、試掘坑による部分的な調査にとどめざるをえなかった。以下に調査の内容を概ね把握しえたＡ区についてその成果を概述する。



調査区配置図（1：5,000）

旧石器～縄文時代　A区の南端は段丘面が落ち込み、地山となる砂礫層の上面に黄灰色土が堆積する。後期旧石器時代終末～縄文時代草創期に相当する石器類はこの堆積土中、あるいはその直上から出土した。出土した石器類には有舌尖頭器1点、数点の掻器などの製品も含まれ、上層の堆積土中からも木葉形尖頭器の基部片などが出土している。

縄文時代中期　縄文時代中期の遺構としては竪穴住居3棟（ＳＢ07、09、10）と、土坑群を検出した。これらの遺構は段丘面の南端付近に展開する。ＳＢ07は長径5m、短径4mの西側に膨らむ不整の円形を呈し、中央やや東寄りに石囲炉を付設する。石囲炉は長辺1.2m、短辺1.0m、やや胴張りの長方形で、炉の上面は顕著に被熱していた。炉の中央には径25㎝の小ピットをともなう。ＳＢ07の炉内や柱穴内からは中期後半に相当する深鉢が数個体出土している。ＳＢ09、10は円形にめぐる柱穴や壁溝を確認したにすぎないものの、ＳＢ09では浅い掘り込みをともなう地床炉が確認された。土坑群は竪穴住居の周囲に散在し、なかには掘形が明確な袋状を呈するものも認められる。遺物は縄文土器のほか、石鏃、石錘、石斧などの石器が出土しており、とくにA区南東の段丘斜面には剥片が集中していた。石材は黒曜石とチャートが主体となる。

弥生～古墳時代　A区ではガラス小玉が2点出土したことから、調査区周辺が弥生時代終末～古墳時代前期の墓域として利用されていた可能性がある。A区北東で検出した方形にめぐる溝ＳＤ05を方形周溝墓との見方をすれば、一辺が7m、一辺の溝の中央が途切れる平面形として復原することも可能であると思われる。ＳＤ05の周辺ではわずかながら土器も出土している。

飛鳥時代　飛鳥時代の遺構としてはA区北東部で検出された竪穴住居群（ＳＢ01～ＳＢ06）がある。竪穴住居から遺物はほとんど出土しないが、中世の溝に先行すること、多くが竈を付設すること、柱穴の一つからほぼ完形の須恵器蓋と土師器甕が出土したことから、該期の遺構とした。

平安時代　平安時代前期の遺構として竪穴住居1棟（ＳＢ08）を段丘斜面で検出した。ＳＢ08に付設された竈の残存はきわめて良好で、天井の一部、煙道、石製支脚が確認できた。ＳＢ08では、住居の床面付近から数個体の須恵器椀、竈から灰釉陶器皿片、土師器甕が出土した。

中世・近世　中世の遺物は、段丘斜面の整地層を中心に山茶椀や古瀬戸製品など、ややまとまった出土をみるものの、検出される中世の遺構はごくわずかにとどまる。また、近世の遺構として、段丘斜面の整地層を掘り込む排水溝（ＳＤ01）、甕埋設土坑など、耕作に関連する遺構が検出された。ＳＤ01は排水溝と考えられる溝で、瀬戸窯産陶器半胴甕（筒形）を確認しただけで約13個体、横位に埋設していた。

ま　と　め　遺構・遺物が比較的希薄で、断片的な情報に頼らざるをえないものの、今年度の発掘調査によって、遺跡の具体像を一定程度明らかにできたものと思われる。

後期旧石器時代終末～縄文時代草創期の石器群は生活面や遺構などを伴なわないものの、比較的安定した層位で出土することから、その資料的価値は評価されよう。また、縄文時代中期の遺構群は当地域における縄文時代集落の景観復原に貴重かつ有意な情報を提供するものと思われる。断定的ではないものの、弥生時代終末～古墳時代前期の墓域に関連する遺構・遺物は当地域においてはまったくの空白時期に相当するものであるだけに、今後の調査の進展には期待が寄せられよう。（早野浩二）



A区全景



A区中央



有舌尖頭器出土状況



ＳＢ 07



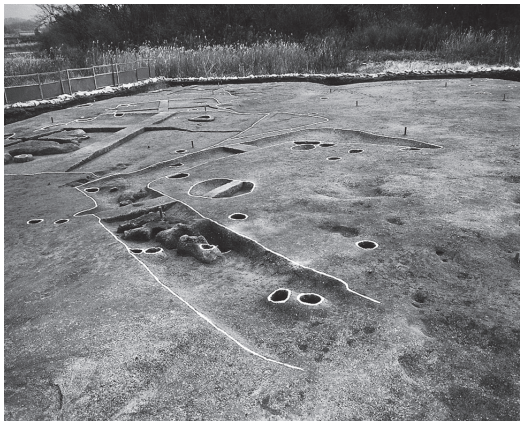
ＳＢ 07 石囲炉



ＳＢ 07 石囲炉出土縄文土器



ＳＢ 09



ＳＤ 05（方形周溝墓？）



飛鳥時代竪穴住居群



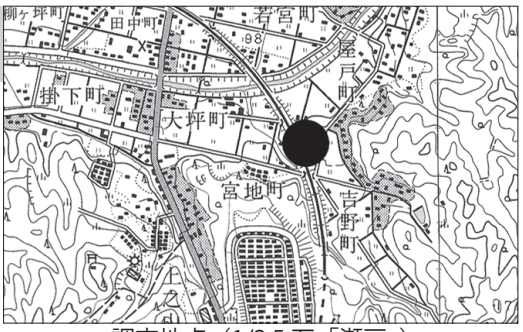
ＳＢ 08 竈



排水溝（ＳＤ 01）

吉野（よしの）遺跡

所 在 地　瀬戸市吉野町
調査理由　瀬戸環状線建設
調査期間　平成 13 年 1 月～ 3 月
調 査 積　260 ㎡
担 当 者　北村和宏・小澤一弘・魚住英史



調査地点（1/2.5 万「瀬戸」）

調査の経過　吉野遺跡は瀬戸市吉野町に所在する古代から近世にかけての複合遺跡で、調査は瀬戸環状線建設のための事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 13 年 1 月から 3 月にかけて調査を実施した。

立地と環境　矢田川左岸の沖積地で、調査区の南西方向には愛知環状鉄道が通り、矢田川にそそぐ吉田川の右岸でもある。丘陵ぎわから沖積面にかけて現在は水田・畑地となっている。南側には古墳時代の集落跡とされる吉田遺跡が所在し愛知環状鉄道の敷地工事の際土器が出土したとされる。

調査の概要　本年度の調査は愛知環状鉄道沿いの三角形状を呈した調査区で上下の 2 面調査となった。

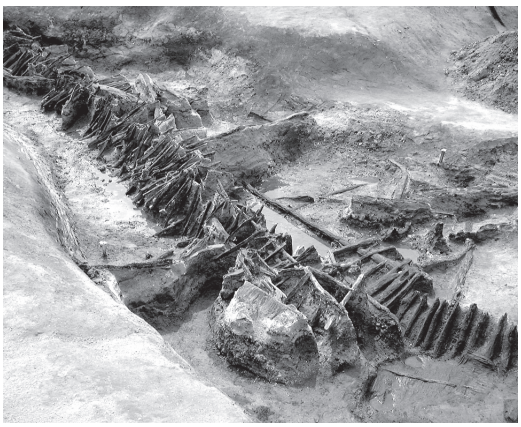
上面では近・現代の水田に伴うと思われる溝 4 条と中世の溝（ＳＤ 03）1 条を検出した。

ＳＤ 03 は調査区中央をほぼ南北に走る幅 50 ㎝、検出面からの深さ 10 ㎝から 40 ㎝を測り南側から北側へ流れていた。黒褐色粘質土と褐灰色粘質土が混じった埋土からは南部系山茶碗片などが出土した。

下面からは調査区東側から西側いっぱいに広がる旧流路（ＮＲ 01）を検出した。

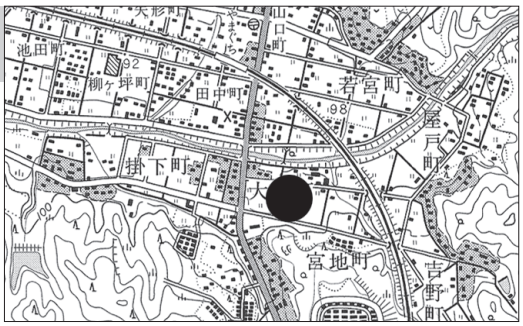
ＮＲ 01 の調査区東側部分から、数本の芯持ちの丸太立杭と横木を組み合わせた柵状の構造をなした柵状遺構を、東西約 2 m巾で南北約 10 mの範囲で検出した。ＮＲ 01 の肩部より廻間㈱式期に考えられる高杯片が出土している。（小澤一弘）


下面全景


柵状遺構全景

大坪西遺跡（おおつぼにし）

所 在 地　瀬戸市大坪町
調査理由　瀬戸環状線建設
調査期間　平成 12 年 12 月～ 13 年 1 月
調 査 積　54 ㎡
担 当 者　北村和宏・小澤一弘・魚住英史



調査地点（1/2.5 万「瀬戸」）

調査の経過　大坪西遺跡は瀬戸市大坪町に所在する古代から近世にかけての複合遺跡で、調査は瀬戸環状線建設のための事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 12 年 12 月から平成 13 年 1 月にかけて調査を実施した。

立地と環境　矢田川南側の沖積地で、矢田川に注ぎ込む吉田川（東側）と薬師川（西側）に挟まれた部分に立地する。国道 155 号線の東側で現在は水田となっている。南側には縄文時代後期の住居跡が 1 棟検出された大坪遺跡が所在する。

調査の概要　大坪西遺跡の南西部に位置する本年度の調査区からは、調査区東側より土坑状の落ち込み 2 ヶ所（ＳＸ 01・ＳＸ 02）を検出したが、本年度の調査区では完掘できなかった。

ＳＸ 01 は調査区南東部分にあり、試掘坑により東側の一部が削平されていたが、黄灰色粘質土粗砂混じりの層位から 7 世紀代の須恵器坏身片や土師器甕片が出土した。

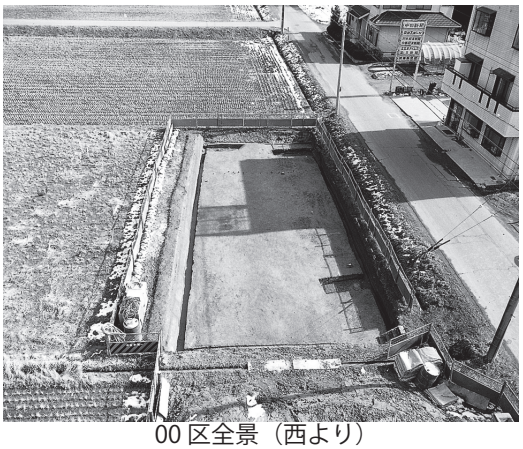
ＳＸ 02 は調査区北東部分にあり、四分の一程調査できたのみであるが、灰黄色粘質土細粒砂混じりの層位より土師器甕片が出土した。

遺物は黄灰色粘質土（第 6 層）の最下部で灰黄色粘質土（第 7 層）との境に土師器甕片などが出土した。また現水田の床土とした第 4 層、第 5 層より山茶椀片が出土している。

（小澤一弘）



調査区位置図（1：5,000）


00 区全景（西より）

凧山屋敷（たこやましき）範囲確認調査

所 在 地　瀬戸市凧山町地内
調査理由　県道瀬戸設楽線建設
調査期間　平成 12 年 4 月～ 5 月
調 査 積　100 ㎡
担 当 者　北村和宏・小澤一弘・魚住英史



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

調査の経過　県道瀬戸設楽線建設に伴う事前調査として範囲確認調査を実施した。調査対象地地域内の地形・遺物の散布状況などを考慮しつつ、試掘坑（トレンチ、以下Tと省略する）を大きく西部と東部に分けて設定し、掘削した。試掘坑は総計 22 箇所（T 01 ～T 23、T 08 は欠番）となった。T 01 からT 07、T 16・T 17 を西部、T 09 からT 15、T 18 からT 23 を東部とした。

立地と環境　凧山屋敷遺跡は矢田川の支流赤津川流域にあり、凧山町北側の丘陵上で赤津川左岸に立地し現況は竹林である。遺跡の南東側斜面上には大窯期の凧山A窯が、南西側の山を越えたところには江戸時代の瓶子窯が所在する。

対象地の西半部は平らな面（畑地）が広がり、山側（南）が一段高く、比高差は約 150 ㎝を測る。対象地の東半部分は川に面した一部と山側の一部に石垣や平らな部分が見られる。平らな面は山側（南）が広く、川側（北）は一段低く狭い。

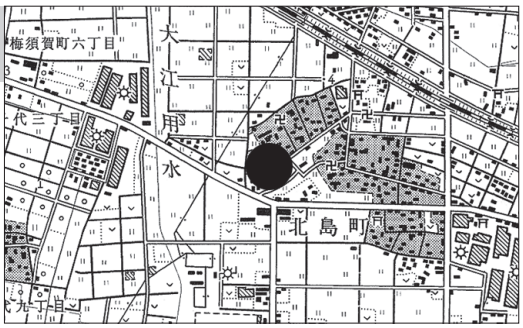
調査の概要　トレンチは西半部に 9 ヶ所、東半部に 13 ヶ所の総計 22 ヶ所を設定した。このうち、遺物が出土したトレンチは 14 ヶ所である。前述したように大窯期の凧山A窯や江戸時代の瓶子窯があり、トレンチから該当する時期の出土遺物が目立つ。

西部　平坦面が上段と下段に分かれ、竹林となる前の畑の様子が窺われる。上段と下段の境の一部には石垣がのこっていた。T 01・T 03・T 17 の暗褐色粘質土層より大窯期の天目茶碗や擂鉢が出土したが、この暗褐色粘質土層はT 04・T 05 より東にはない。T 01 の溝は遺物が出土していないため時期は不明であるが、耕作に伴う溝と考えられる。このトレンチ以外遺構は確認できなかった。

東部　屋敷地と考えられた一画ではT 09 とT 15 の付近の表面に大窯期や江戸から明治期の陶磁器が散乱していた。また、ピット等を検出しているが、現況から耕作に伴ったものや木の根や筍の跡の可能性が大である。また下段のT 15 よりO -10 期の須恵器が出土したが同じ層位より山茶椀や大窯期の製品が出土していること、また人頭大から拳大の円礫が重なった状態で検出したことなどから、斜面より下の平坦部分については旧表土の堆積と考えられる。（小澤一弘）

上中（かみなか）・西屋敷（にしやしき）遺跡

所 在 地　稲沢市北島町地内
調査理由　県道須成七宝稲沢線建設
調査期間　平成 12 年 4 月～ 12 月
調 査 積　4,600 ㎡
担 当 者　服部信博・宮腰健司・織部匡久



調査地点（1/2.5 万「清洲」）

調査の経過　上中・西屋敷遺跡は稲沢市の市街中心部から南寄りの北島町に所在する古墳時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。県遺跡地図には記載されているが、これまで発掘調査がなされたことはなく、表面採取された遺物からその年代と範囲が推定されていた。本遺跡調査は県道須成七宝稲沢線建設の事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。調査面積 4,600 ㎡を 10 の調査区に分け、平成 12 年 4 月から 12 月にかけてそれぞれ実施した。

立地と環境　上中・西屋敷遺跡の所在する北島町は東西に走る東海道新幹線以南から並行して走る主要地方道名古屋祖父江線をはさむ形で広がっている。集落の中心は名古屋祖父江線の北側に沿う状態で広がっている。名古屋祖父江線は近世の村絵図に記載されている八神街道におおよそ合致しており、集落の広がりもこれに沿う形であると思われる。今回の調査区は北島町の西寄り、上中・西屋敷地区に位置し、集落域である微高地の西端を南北に縦断する形で設定されている。遺跡は標高 1.5 mから 2 m前後で自然堤防上に立地している。北部と南部には後背湿地、河道などが存在する。また集落の北から西にかけては旧来、沼沢地であったと考えられ、住居が営まれていた高まりからはずれると湧水が発生しやすい状態である。周辺の主な遺跡としては名古屋祖父江線をはさんだ南側に弥生時代から中世に位置づけられる流遺跡が、また東に 1 ㎞ほどのところには古墳時代の中花の木遺跡がある。

調査の概要　基本的な地形はＤ区とＥ区の北半を最高位とし、南北両方向に向かうに従い低くなる。北側ではＣ・Ｂ区部分がやや低く、Ｂ区北端で急激に落ち込んでいる。南側では、Ｅ区の南半とＦ区北半に落ち込みがあり、Ｆ区南半からＧｂ区にかけてやや低い部分があり、Ｈ区・Ｉ区南半で急激に落ち込んでいく地形が形成されている。調査は、北側では表土を除去した時点で検出できた黄褐色砂上面で江戸期以降の遺構を確認し、さらにそれらを除去した後、明青灰色砂上面において中世の遺構を確認した。中央のＤ区とＥ区の北半では、黄褐色砂と明青灰色砂の間に、20 ～ 30 ㎝程の厚さをもつ褐灰色砂がみられ、古墳時代から中世にかけての堆積層であると考えられた。南側では、南にいくほど黄褐色砂層は薄くなっており、古墳時代から中世の遺構はほとんど見られなくなる。

Ａ　区　調査区の大部分に家屋移転時の撹乱が認められたが、南端において現道に沿った溝を検出した。時期は江戸期以降か。

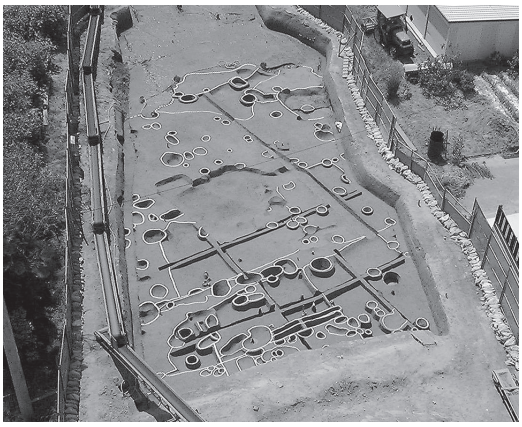
Ｂ　区　中央部より一段下がり、北端からさらに落ち込む地形になる。中世の遺構としては、方形土坑を 13 基検出した。土坑は長径 3 ～ 4 m、短径 1.5 ～ 2 mを測る大型のものと、長径 0.7 ～ 1 m、短径 0.7 ～ 2 mの小型のものがあり、埋土中に撹乱状の堆積が見られる。ただ所



Ｅ区　ＳＢ 04 出土台付甕（北から）



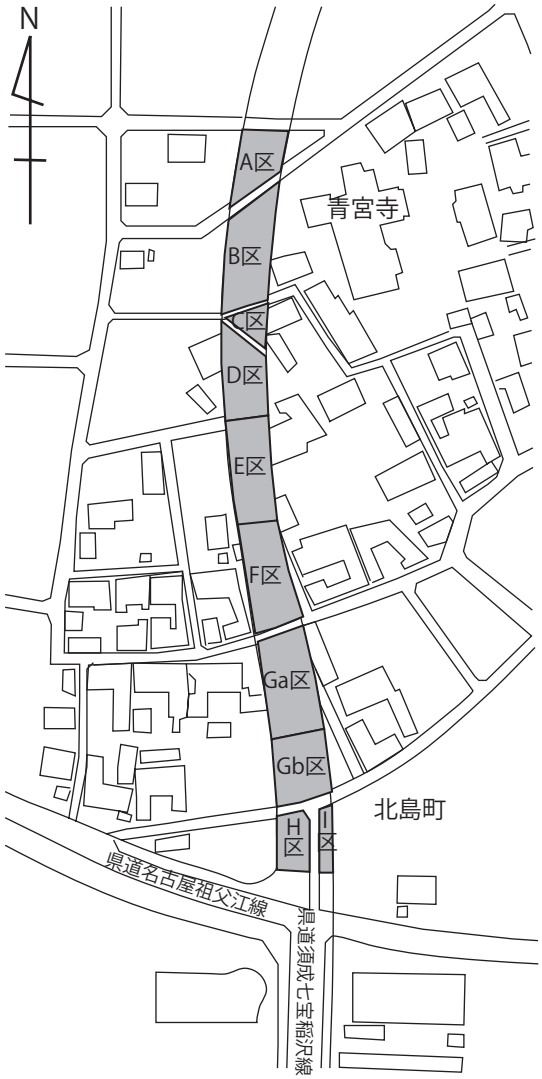
Ｄ区　北半竪穴住居群（南から）



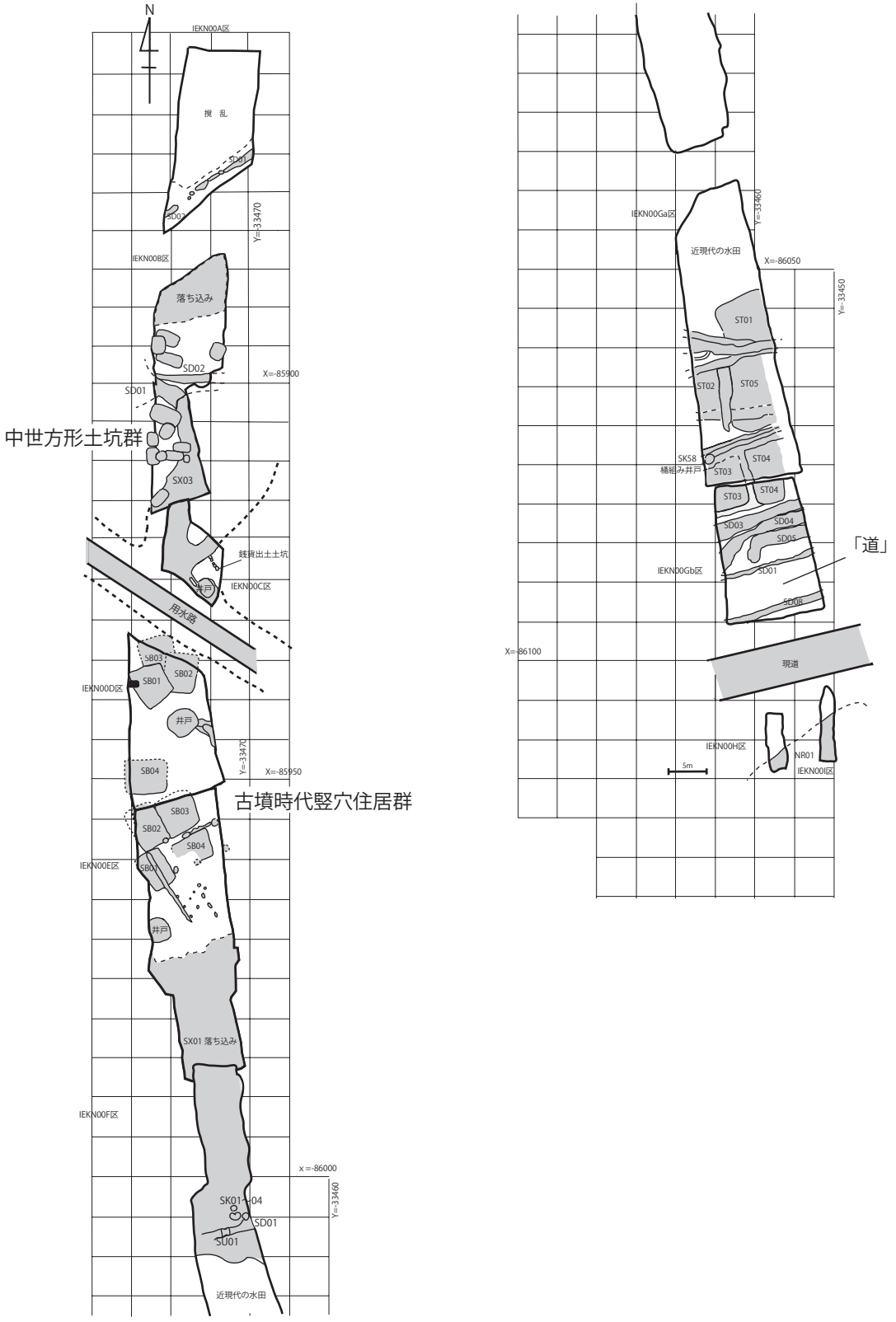
Ｅ区　北半竪穴住居群（北から）



Ｇｂ区　作業風景（東から）



第１図　調査区配置図（1：2,500）



第２図　主要遺構図（1：800）

属時期を中世としたが、確実な遺物の出土はなく、ＳＤ01よりは古いものになる。江戸期の遺構としてはＳＸ03があり､深さ１～1.5ｍを測り､Ｃ区まで続く大きな落ち込みとなる。埋土には流水の痕跡などはみられず、下層では自然の平行堆積をなし、上層になると再掘削や18世紀以降の遺物の廃棄が顕著に行われている。またＳＸ03の北西角に接続するように走るＳＤ01の下層の砂層からは、16世紀後半の天目茶碗がほぼ完形で出土しており、その遺物が示す時期前後がＳＸ03を含めた遺構群の上限となると考えられた。さらにＳＤ02は時期がやや新しくなるが、ＳＸ03と関連するものと思われる。

Ｃ　区　　調査区全体がＳＸ03となるが、東側に北東から南西に延びる高まりが二ヶ所あり、南側のものは南西端が階段状になり、底面に落ち込んでいる。またその高まりの南側には、木枠や曲物などは確認できなかったが、13世紀代の井戸と思われる大型の土坑があり、さらに高まりに直交するように小土坑列が検出され､「大観通宝」を含む銭貨が約７枚出土している。

Ｄ・Ｅ区　　調査区内でもっとも高く安定した基盤を呈しており、古墳時代の竪穴住居が８棟検出された。さらに竪穴住居は、古墳時代初頭になるＥ区ＳＢ02・ＳＢ04と古墳時代後期に属するＳＢ01・ＳＢ03に分けることができ、Ｄ区の住居群も後者の時期と考えられる。また同地区には、江戸時代中葉～後葉の溝・掘立柱建物・柵列・井戸が検出されており、この時期も居住域であったことが窺える。

Ｆ　区　　Ｅ区南半から続く落ち込みＳＸ01が北半を占め、南半は近現代の水田になっている。ＳＸ01の埋没時期はＢ区ＳＸ03と同様江戸時代後葉であるが、成立時期については不明である。また、いくつかの高まりが検出され、その部分に江戸時代後葉の土坑が掘削されている。

Ｇ　区　　Ｇａ区北半は近現代の水田が続き、南半からＧｂ区にかけて江戸期の水田、およびそれらに付随すると思われる溝群・桶組みの井戸が検出された。またＧｂ区の南側のやや高い部分に、水田と平行して５～5.5ｍの間隔をもって走る２条の溝が見つかった。この部分には水田が広がらず、他の遺構も見られないことから「道」になると思われ、位置や方向から見て古い「八神街道」である可能性がある。

Ｈ・Ｉ区　　基盤は南側に急激に落ち込んでおり、安定した状況で粘土が堆積している。下層の明オリーブ灰色粘土からは古墳時代後期～飛鳥時代の須恵器が出土する。またその上層には、鉄分が固着する多孔質の褐色砂が約20㎝の厚さで堆積している。　　（宮腰健司･織部匡久）



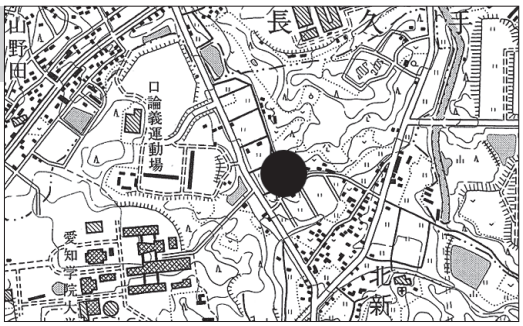
Ｃ区　銭貨出土状態（南西から）



Ｇａ区　ＳＫ58桶組み井戸（東から）

岩崎（いわさき）6号窯遺跡

所 在 地　日進市北新町金萩地内
調査理由　県道日進瀬戸線道路改良
調査期間　平成 12 年 6 月～ 9 月
調 査 積　2,500 ㎡
担 当 者　北村和宏・池本正明・宇佐見 守・鈴木達也



調査地点（1/2.5 万「平針」）

調査の経過　当調査は、県道日進瀬戸線建設に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 12 年 6 月～ 9 月にかけて実施した。調査面積は 2,500 ㎡である。

岩崎 6 号窯遺跡は、日進市北新町金萩地内に所在し、標高 70 m前後の南側に向けて傾斜する緩斜面に立地している。本遺跡は、猿投窯岩崎地区に属し、近隣には、Ⅰ - 9 号窯やⅠ - G -10 号窯をはじめとして、多数の古窯跡が存在しており、また、付近の史跡として、古墳時代後期の築造とされる白山第一号墳や、戦国時代に丹羽氏の居城であった岩崎城跡が知られている。

調査の概要　調査の結果、奈良・平安時代の集落遺跡を確認している。具体的には、ロクロピットを伴う工房と、竪穴住居･掘立柱建物などの建物跡、土器集積遺構と廃棄土坑などの遺構の他に、粘土採掘土坑や土器成形に適した素地をつくるために粘土を寝かしたと思われる粘土ピットが検出され、当遺跡は集落跡としての性格を帯びることとなった。

工房跡は、削平された部分があるものの、9.5 m× 2.0 mほどの規模があり、直径 2.5 ㎝･深さ 20 ㎝ほどのロクロピットを伴うものである。工房跡からは生焼の灰釉陶器が数点出土したが、出土品との関係は不明で、工房自体の性格などの断定は今後の課題である。竪穴住居は、数棟確認されている。斜面下方側が流失し、斜面上方側のみを残存させるたものが多い。比較的良好な状態であるＳＢ 01 を例にあげると、平面形が 3.5 m× 3.0 mほどの規模で、カマドを伴うものである。これらのものは、掘立柱建物も含めて、工房に従事する工人が使用した可能性が高い。

土器集積遺構は、調査区南側に集中する。7 基確認されているが、出土品は、生焼であったり歪んでいたりするものの、完形に近い遺物が比較的多い。さらに、廃棄土坑ＳＫ 01 からも、同じく完形に近い灰釉陶器が 2 ～ 30 点ほど出土している。

遺　物　出土遺物は、コンテナー約 200 箱に及ぶ。このうち主体となるのは土器類である。時期的には、奈良・平安時代に集中する。種類別では須恵器と灰釉陶器が主体を占め、土師器も若干含まれている。器種は豊富で、当該期に属するほとんどの器種を含んでいる。

遺物の出土状況は、大きく二つのあり方に区分できる。前者は竪穴住居に代表されるもので、出土量が乏しく、破片資料が多い。一方、後者のあり方は、本遺跡での特徴的な様相を呈する。主に、土器集積遺構や廃棄土坑に見られる出土状況で、完形品を多く含む土器の集中的な出土である。焼成不良品も目立つ。ここでは、若干ではあるが、窯道具類も含まれている。ＳＵ 06 や 07 では、未焼成の粘土塊も検出されている。これらは土器類の

原土である可能性を持つ。また、刀子などの金属製品や砥石などの石製品を若干得ている。なお、そのほかの時期に帰属する資料として、後期旧石器時代のナイフ形石器と縄文時代の石鏃が、各１点ずつ出土している。

ま と め　岩崎６号窯遺跡は、前述したように、猿投窯岩崎地区に含まれている。周知のように、猿投窯は古代における全国屈指の規模を誇る大窯業地である。今回検出された遺構群は、猿投窯岩崎地区の活動期間の一部と年代的に整合している。ところで、今回判明した遺跡の内容もこれと深く関わる様相を示している。特徴的であるロクロピットを付設する工房跡や、焼成不良品を多量に含む廃棄土坑や土器集積遺構などの存在がそれである。また、窯道具の存在もこれを補足するものであろう。

古代における窯業関連集落は、東海地方では初見で、全国的にも数例報告されるのみである。遺構群を詳細に分析を進めれば、古代における手工業生産のあり方をより立体的に考えることができるであろう。　（鈴木達也・池本正明）



第１図　調査区位置図（１：5,000）



航空写真



工房



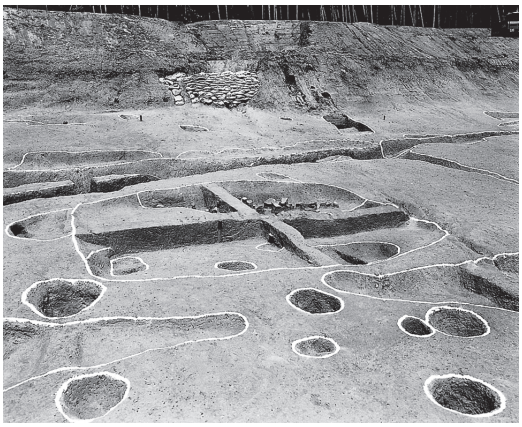
ロクロピット断面



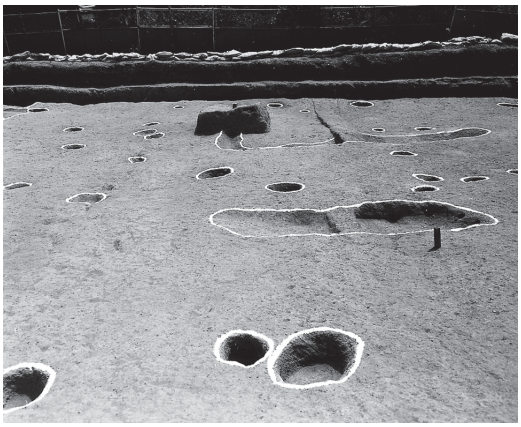
土器集積遺構



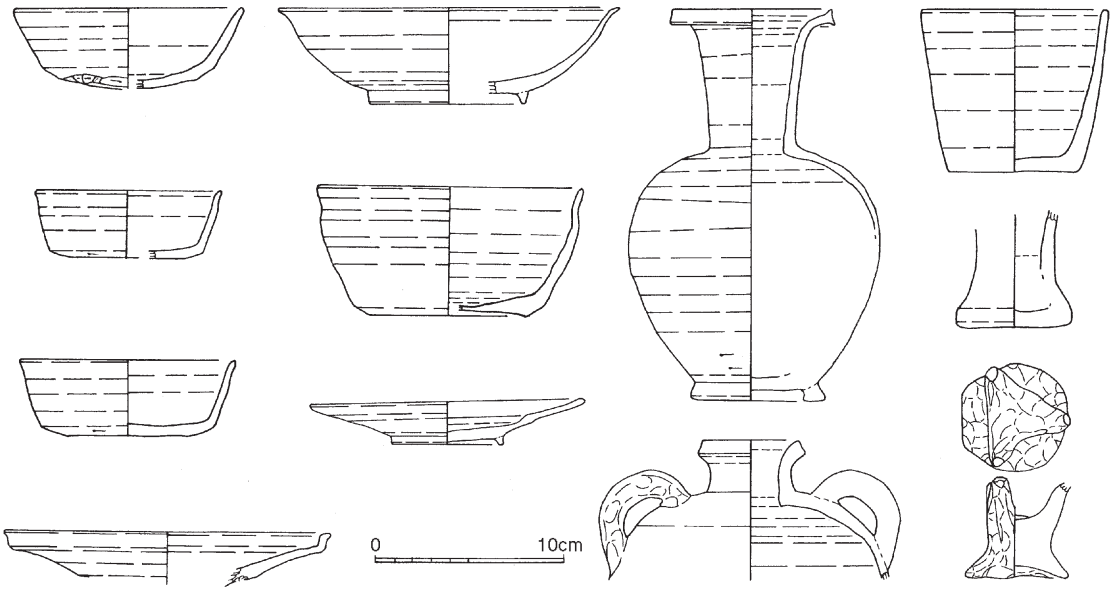
ＳＫ 01



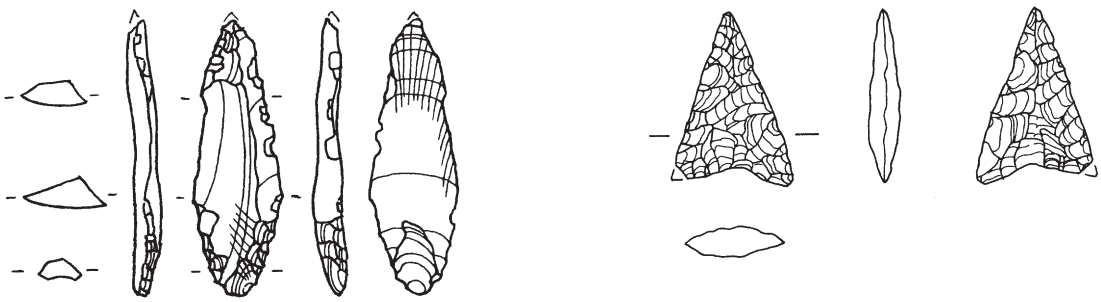
竪穴住居



掘立柱建物



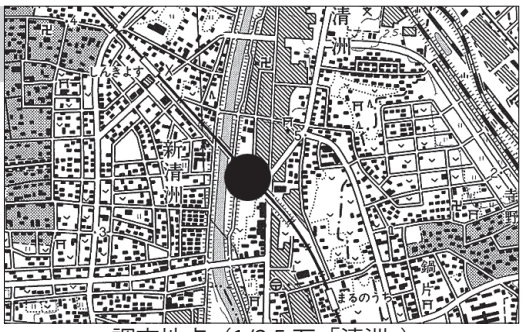
第２図　土器実測図



第３図　石器実測図（1：1）原図斎藤基生氏

清洲城下町遺跡（きよすじょうかまち）

所 在 地　西春日井郡清洲町
調査理由　五条川河川改修
調査期間　平成 12 年 12 月～ 13 年 3 月
調 査 積　1,800 ㎡
担 当 者　赤塚次郎・洲嵜和宏・蔭山誠一



調査地点（1/2.5 万「清洲」）

調査の経過　清洲城下町遺跡は五条川中流域に形成された自然堤防と後背湿地上に立地する古代から近世の複合遺跡である。五条川改修に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、今年度は五条川の左岸名鉄名古屋本線南側のＡ区（800 ㎡）と右岸県道 67 号線清洲橋北側のＢ区（1,000 ㎡）を調査した。

調査の概要　Ａ区は南部地区の南側に位置し、62 Ｄ区・63 Ｄ区の西に隣接する調査区で、標高 1.0 m にて遺構検出を行った。遺構は、城下町期後期に属する溝 1 条、土坑 2 基と 62 Ｄ区・63 Ｄ区から続くＳＸ 8001 が検出された。この中でＳＸ 8001 西側の遺構上端を確認し、その一部に人頭大の円礫が縦列に 6 個並んだ石列を検出した。ＳＸ 8001 の東西幅は約 23 m とわかった。ＳＸ 8001 の出土遺物には、16 世紀後半から 17 世紀初頭までの瀬戸・美濃産陶器、伊万里磁器、常滑甕などがみられ、他に平瓦、巴文軒丸瓦、銅銭、銅製品、鉄鏃、鉄製刀子、漆椀、五輪塔、桶のタガ、曲物、杓子、下駄、犬の頭骨等の獣骨、貝殻などがある。埋土の上部において桶のタガや曲物が 10 m程離れてほぼ同位置レベルにて出土し、城下町期後期の井戸の可能性がある。

Ｂ区は本丸地区北端に位置する調査区で、標高 2.5 mにて遺構検出を行った。遺構は城下町期に属する堀状の落ち込み、土坑などを確認した。堀状落ち込みは、本丸跡から北に 3 本目の内堀の可能性がある。

ま と め　今回の調査によって城下町期後期における南部地区の大型土坑状遺構（ＳＸ 8001）が、その地形的特徴を活かした利用状況を推定できるようになった。遺物の出土状況なども含めた町屋の復元研究において重要な資料を提供できたものと思われる。　（蔭山誠一）


00 Ａ区南側全景


石垣出土状況



ＳＸ 8001 出土の曲物



ＳＸ 8001 出土の軒丸瓦



ＳＸ 8001 出土の漆塗椀



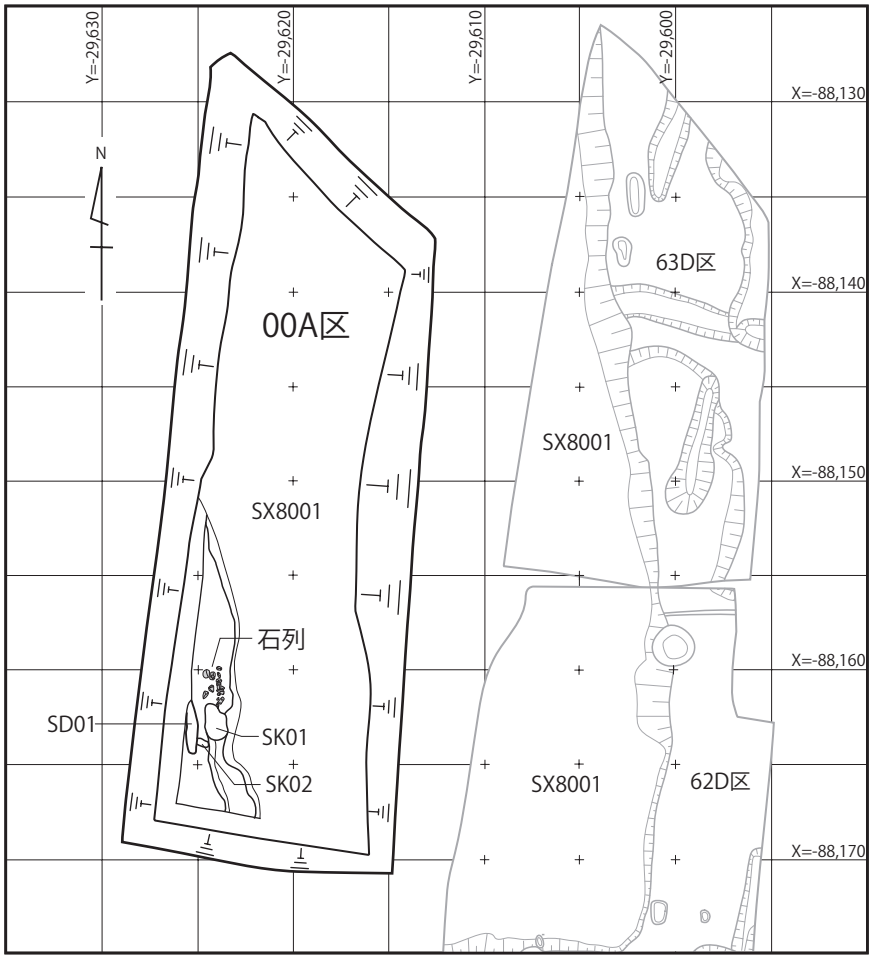
ＳＸ 8001 出土の茶入れ



ＳＸ 8001 出土の天目茶碗



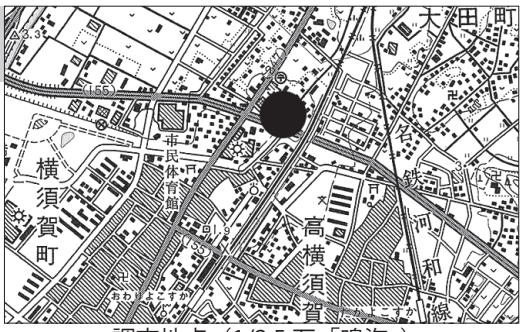
ＳＸ 8001 出土の鉄絵小皿



00 Ａ区遺構図（1：400）

烏帽子（えぼし）遺跡

所 在 地　東海市高横須賀町字烏帽子・踊場・尾之松地内
調査理由　国道 155 号線建設
調査期間　平成 12 年 4 月～ 9 月
調 査 積　2,500 ㎡
担 当 者　石黒立人・中野良法・木川正夫



調査地点（1/2.5 万「鳴海」）

調査の経過　国道 155 線建設に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。なお、平成 5 年度にも隣接地の調査を当センターが実施している。今回の調査期間は平成 12 年 4 月から 9 月まで、面積は 2,500 ㎡である。調査区は、国道 155 号線の建設予定地内を横断する通学路・生活道路の関係から、A・B・Cの三区を設定して実施した。

立地と環境　烏帽子遺跡は東海市高横須賀町字烏帽子（C区）・字踊場（B区）・字尾之松（A区）に所在し、伊勢湾に面する海岸線と並行する 3 条の砂堆（浜堤）列のうちの最も海岸線沿いの砂堆の東端に位置し、現地表面の標高は 3 m前後である。また、本遺跡の周辺には、同砂堆上に、弥生時代の遺跡と古代製塩遺跡が散在している。

調査の概要　平成 5 年度に実施した前回の調査では、遺跡の形成時期が、A期：縄文時代晩期から弥生時代前期（集落）、B期：弥生時代中期後半（集落）、C期：古墳時代前期（集落）、D期：古代（集落）、E期：江戸時代（「横須賀御殿」）の 5 期にわたることが明らかになっている。基盤層は比較的粗い砂層で、包含層も砂質である。包含層は、弥生時代までは黒色で旧地表面が有機質の黒色土壌で覆われていたことがわかる。古代以降は明褐色となっている。

A 期　B区で東西方向に掘られた長楕円形の舟形土坑（長さ 1.95 m、幅 0.72 m、深さ 19 ㎝）の西端に直径 4 ～ 6 ㎝程度の下呂石原石が 35 個詰められた弥生土器（高さ約 30 ㎝、水神平期；紀元前 4 世紀頃）の壺が土坑底から 15 ㎝ほど浮いて出土した。下呂石は川原石状で、その大きさからみて木曽川下流域の河原で採取され、何らかの手段で烏帽子遺跡まで運ばれたものと思われる。被葬者は石器の工人か、採集された地域にゆかりの人か、などのことが想像される。弥生時代前期の墓は、県下ではこれまで土器棺墓、方形周溝墓が知られていたが、今回新たに土坑墓を加えることになった。壺は捧げ物の容器として用いられ、墓の上に据え置かれたものと考えられる。このような事例は県下では初めてである。

B 期　B区の長楕円形の土坑墓では北端に弥生土器（高蔵期）の鉢が底部に穿孔されて伏せられた状態で出土した。C区では、炉の焼け土を伴う竪穴住居や隅丸方形の竪穴状遺構数基等が展開する。

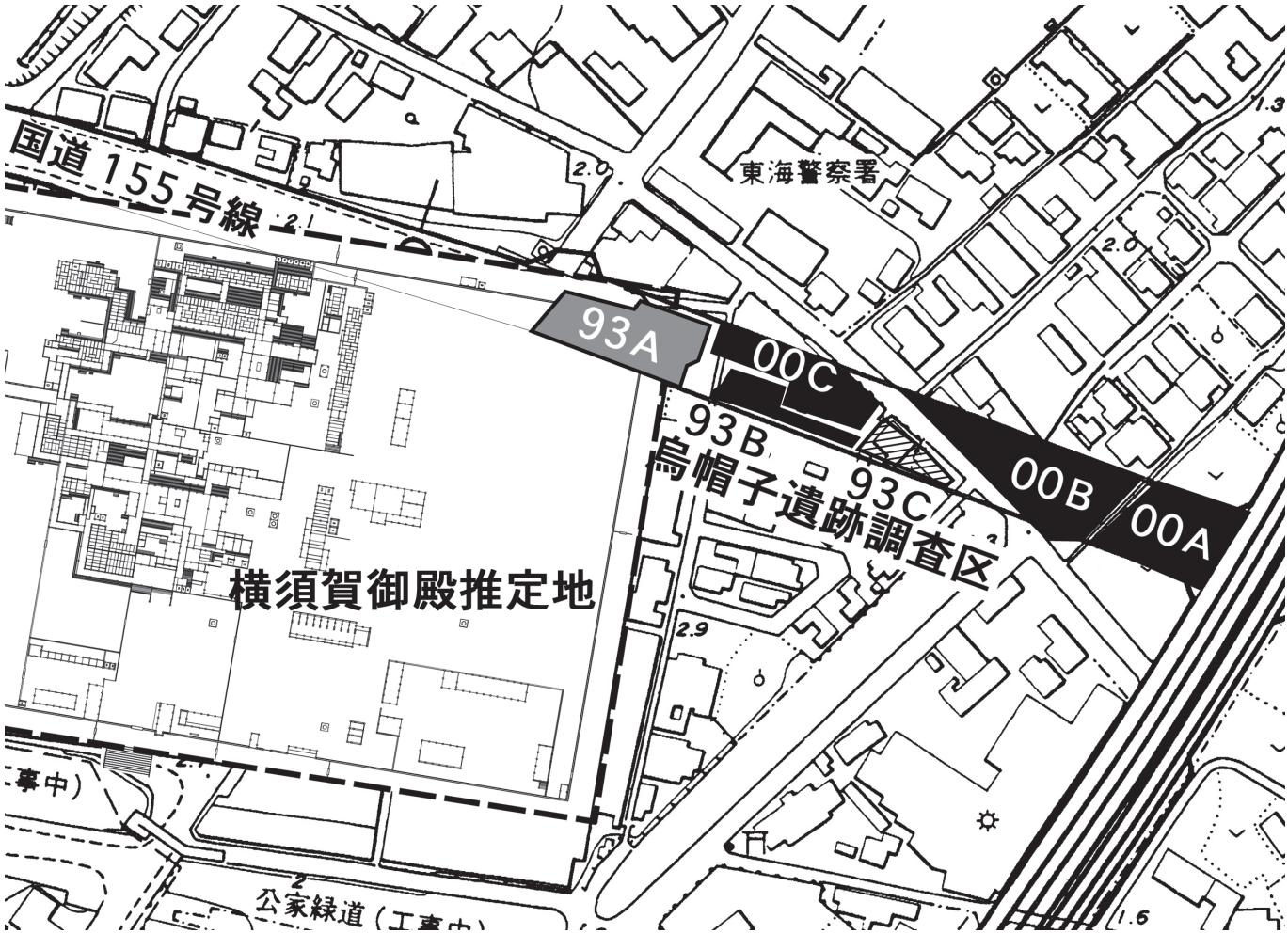
C 期　B区で北東から南西方向に掘られた長楕円形の舟形土坑（残存長 2.23 mで全長は不明、幅 0.97 m、深さ約 35 ㎝；3 世紀頃）に、北東部でベンガラによって赤色に変色した部分が検出され、その内部および付近からガラス製勾玉 1 点、緑色凝灰岩製管玉 6 点、ガラス製小玉 28 点とガラス製小玉の小片が複数個体分出土した。ベンガラによって赤色に変色した部分は長さ約 50 ㎝、幅約 40 ㎝、高さ約 30 ㎝で、葬られた人の頭部から胸部にかけて

塗られていたかもしくはふりかけられたものと思われる。ガラス製勾玉・管玉・ガラス製小玉は首飾りとして一揃いのもので、首にかけられていたか、胸部に置かれたものと考えられる。ベンガラや朱などの赤色顔料の使用は、弥生後期から古墳前期では大型の墳丘墓の埋葬施設にみられるもので、土坑墓では珍しい。したがって、今回発見された舟形土坑は、それ単独で墓（土坑墓）というわけではなく、墳丘墓の主体部であった可能性が高い。ガラス製勾玉・緑色系ガラス製小玉は県下で初例である。ベンガラ塗布の埋葬法を含めて、他地域との関連を考える必要がある。

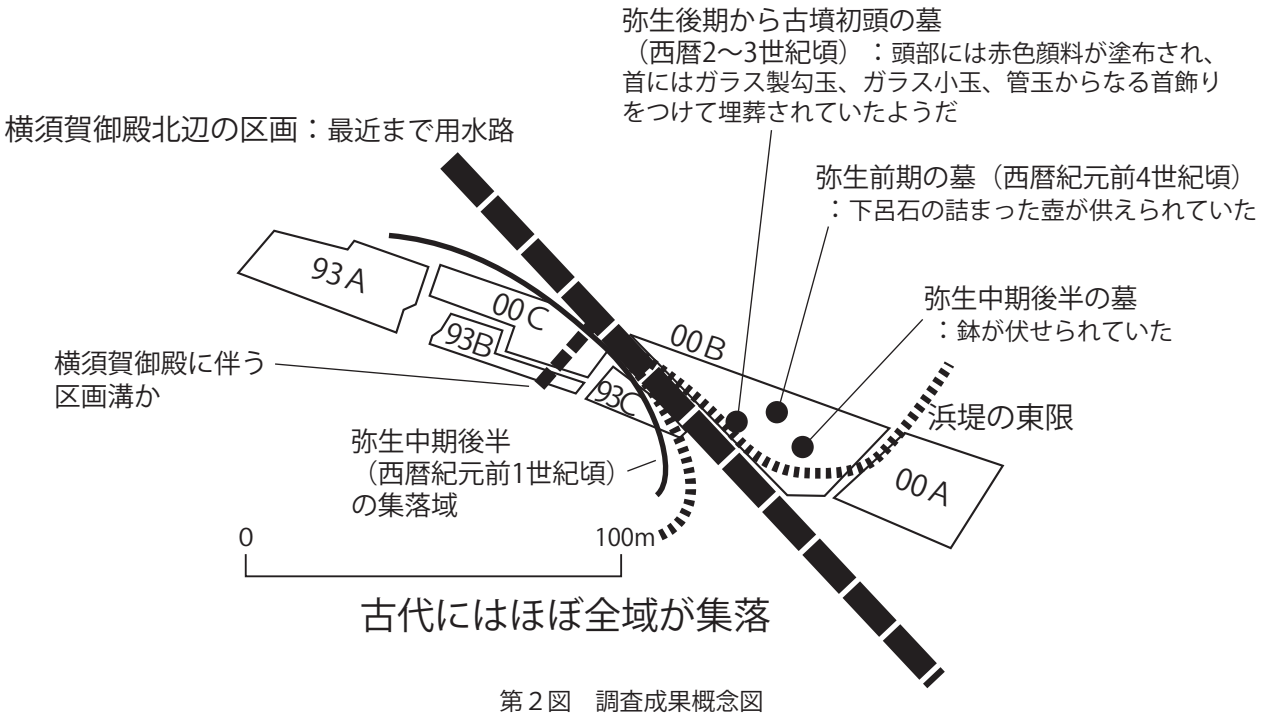
D 期　竈を伴う竪穴住居がB区で1棟、C区で2棟検出された。B区の1棟は軸が南北方向から約45度傾き、西北壁に竈を伴い、柱穴と一部に貼り床粘土が検出された。竈の粘土は比較的良好に残存していた。その他、隅丸方形の竪穴状遺構がかなり検出されているが、軸方向正北のものと約45度西に振れているものがあり、切り合い関係から前者がやや古い段階のもので、竈のない竪穴住居と思われる。B・C区で同時期の土師質竈が出土しているので建て替えのたびに移動させたと思われる。いずれもその埋土から当時の須恵器・土師器・製塩土器等が多数出土している。C区では須恵器・移動式竈片・貝層を含む竪穴状遺構が1基検出されている。また、C区中央南部に柱穴が分布し、1間×1間に並ぶ掘立柱建物がある。

E 期　B区南辺とC区北辺の水路（完掘幅約20ｍ）は横須賀御殿（1666～1700）が作られたころ、砂堆を横断するように掘られ、幾度となく改修された水路である。明治になって公家（こうけ）川を横須賀入江に流入させた後、閉め切ったようで、現在は道路となっている。砂堆の砂を掘った水路なので砂の崩落防止のため粘土を厚さ約30㎝にわたって貼り付けてある様子が一部で残っていた。さらに、C区東端でこれと直交する近世水路（完掘幅約5ｍ・深さ約2ｍ）が検出された。両水路とも、17世紀後半の横須賀御殿窯の小分焔柱2本（ともに長約30㎝、直径約15㎝）ほか窯構造物・窯道具が多数と、陶器片も若干出土している。また、C区西端には柱穴があり、1間×2間に並ぶ掘立柱建物がある。

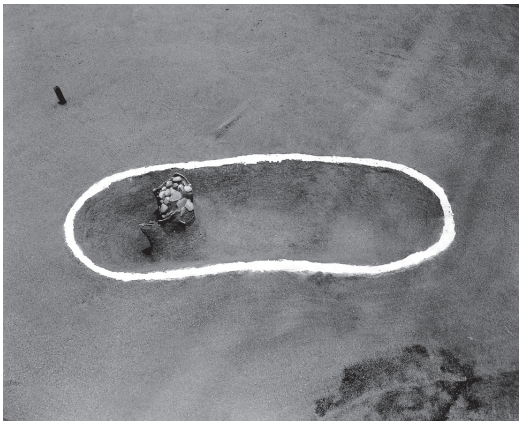
ま と め　A区は砂堆（浜堤）の東端で、後背湿地への変換部分に相当することがわかった。B区は弥生時代から古墳時代初頭にかけて墓域であったことが判明した。また、古代（7世紀頃）には竪穴住居群が展開することがわかった。C区は弥生時代中期後半以降、断続的ながら古代（8世紀頃）まで集落域であることが判明した。（木川正夫）



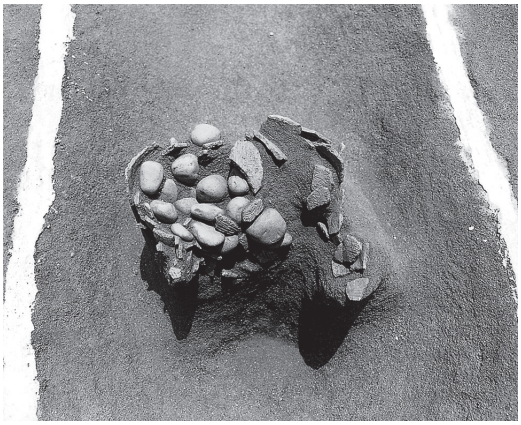
第１図　調査区位置図（1：2,000）



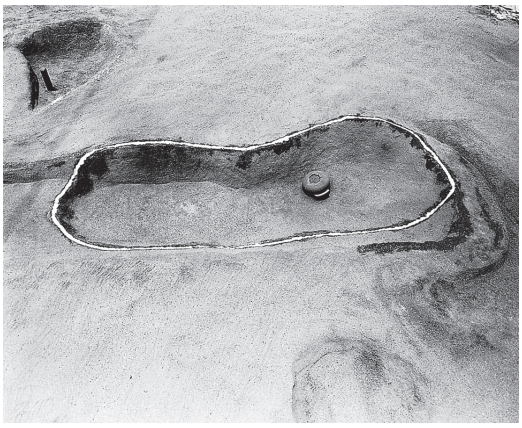
第２図　調査成果概念図



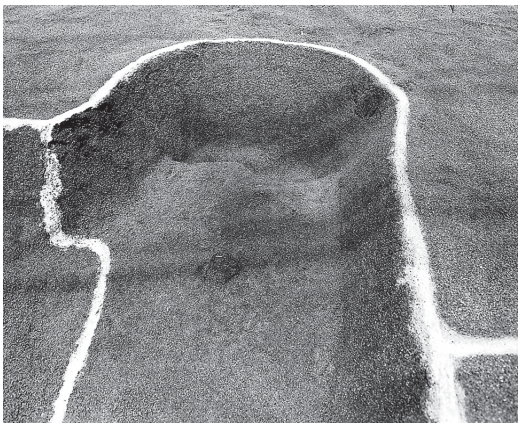
Ｂ区　Ａ期土坑墓遺物出土状況（南より）



Ｂ区　Ａ期土坑墓遺物出土状況（西より）



Ｂ区　Ｂ期土坑墓遺物出土状況（東より）



Ｂ区　Ｃ期土坑墓遺物出土状況（南より）



Ｂ区　Ｄ期竪穴住居完掘状況（南より）



Ｃ区　弥生～古代完掘状況（西より）



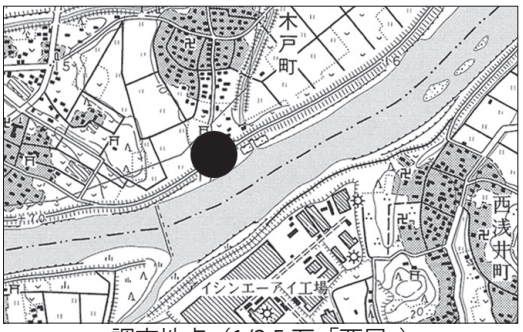
Ｃ区　近世水路完掘状況（西より）



Ｃ区　小分焔柱出土状況（北より）

木戸城跡（きどじょう）

所 在 地　安城市木戸町東屋敷
調査理由　矢作川改修
調査期間　平成 12 年 10 月～ 12 月
調 査 積　1,400 ㎡
担 当 者　川井啓介・池本正明・鈴木　裕



調査地点（1/2.5 万「西尾」）

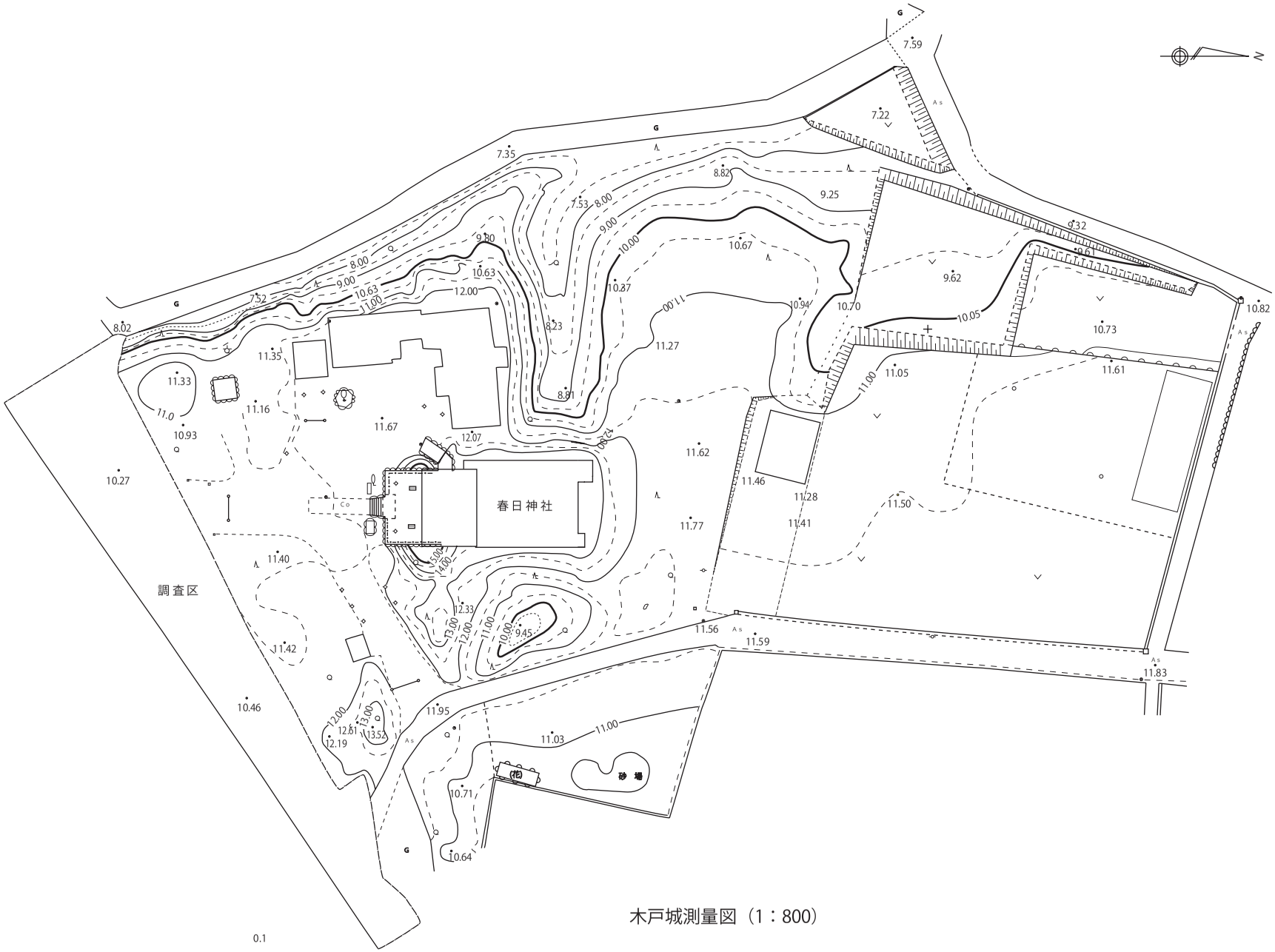
調査の経過　木戸城跡は、安城市木戸町東屋敷に所在する。地形的には、北側から南方に向かって緩やかに下る舌状台地上に立地している。調査区はこの先端部に位置し、標高は約 12 m。調査区の長辺がその幅と一致している。城跡は現在安城市指定史跡となっており、北側と東側に幅約 10 m、深さ約 3 mの堀が現存している。

発掘調査は、矢作川改修に伴う事前調査として国土交通省から愛知県教育委員会を通して委託され、平成 12 年 10 月～ 12 月に実施した。面積は 1,400 ㎡である。

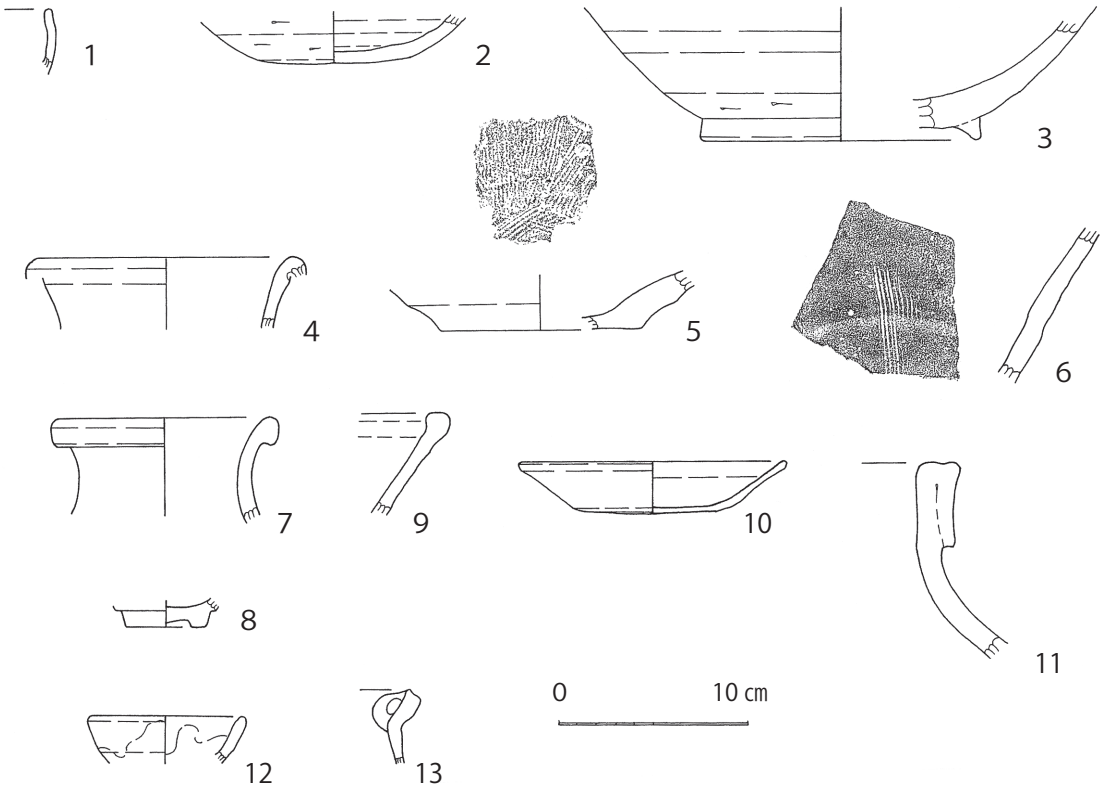
調査の概要　今回の調査で確認できた遺構は、大きく二時期に区分できる。前者は飛鳥時代～奈良時代を中心とする時期で、後者は戦国時代に該当する。いずれの遺構群も基盤層である赤褐色または黄橙色の土層上面で検出した。

飛鳥時代～奈良時代の遺構群は、竪穴住居、掘立柱建物、土坑などで構成される集落遺跡となる。竪穴住居は 2 棟確認している。このうちＳＢ 01 は、平面形が長辺 5.2 m短辺 3.8 mの隅丸長方形を呈する。他遺跡で確認されている同時期のそれと比較すると規模も大きい。戦国時代の遺構群は、土塁、溝、土坑などがある。これらは、遺跡の名称にもなっている「木戸城」に関連するものと考えられる。土塁は、2 条検出されている。上記のように、調査区が南北に伸びる舌状台地のほぼ上面を占める関係上、調査区の東西が台地の縁辺部に該当している。土塁は、その場所に位置している。検出できた土塁（土塁 A）は、断面観察によれば改修が確認できる。規模は、古段階が基底部幅 3 m、残存高 0.8 m、改修後が基底部幅 9 m、残存高 3 mになる。なお、東側土塁の外側には、溝が掘削されている。幅は 4 mを測る。西側土塁（土塁 B）は、基底部幅 6 m、残存高 1 mを測る。残存状況は良好とは言えず、基底部のみが残存する。土塁に囲まれた範囲には、西側で掘立柱建物が検出されている。調査区の形状等により、全形は確認できないが、柱穴は検出面からの深さが 0.9 mを測る。また、西側土塁に近接した位置には、廃棄土坑（ＳＫ 167）が存在する。平面は楕円形で、長径 1.8 m、短径 1.3 m、検出面からの深さは 0.5 mとなる。埋土中より、施釉陶器、灰釉系陶器などの土器類、土壁と考えられる焼土塊、炭化米などが出土している。

出土遺物は、乏しい。しかし、飛鳥時代～奈良時代に属する資料として、須恵器、土師器が、戦国時代に属する資料として、施釉陶器、灰釉系陶器、土師器などがある。この他に中世前期に属する灰釉系陶器や、近世陶磁器も確認されている。　（池本正明）



木戸城測量図（1：800）



第１図　遺物実測図



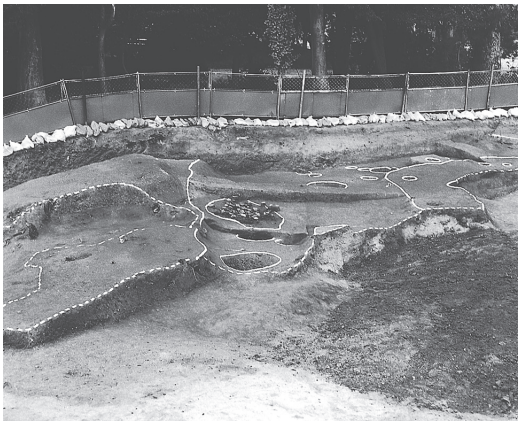
航空写真



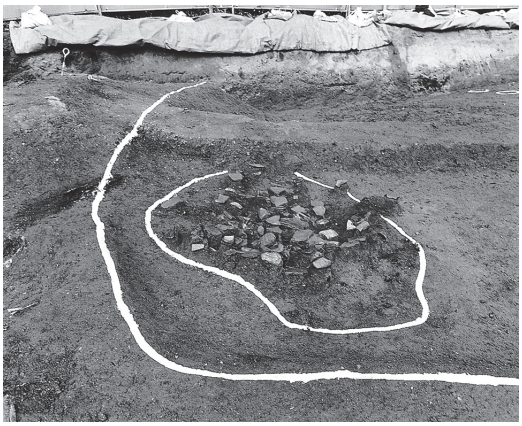
土塁A断面



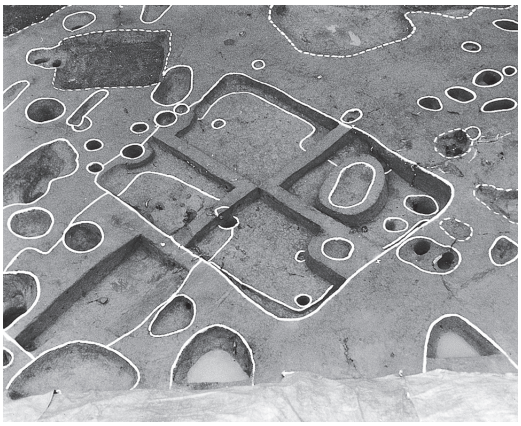
土塁A遠景



土塁B・SD 04



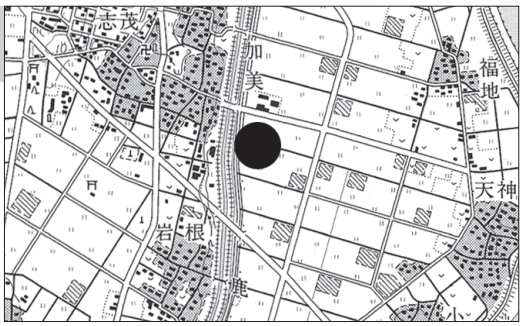
SK 167



SB 02

下懸（しもかけ）遺跡

所 在 地　安城市小川町下懸
調査理由　鹿乗川河川改修工事
調査期間　平成 12 年 12 月～平成 13 年 3 月
調 査 積　3,700 ㎡
担 当 者　川井啓介・池本正明・竹内 睦・鈴木 裕・皆見秀久



調査地点（1/2.5 万「西尾」）

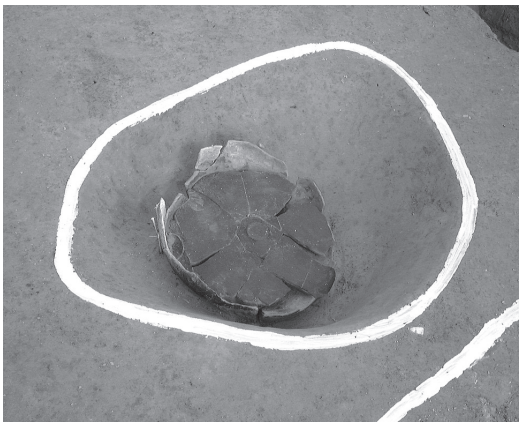
調査の経過　調査は愛知県建設部河川課による鹿乗川河川改修工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成 12 年 12 月から平成 13 年 3 月にかけて実施している。調査区は、これを横断する道路及び排水路により五分割して設定し、南側からＡ区～Ｅ区と呼称している。

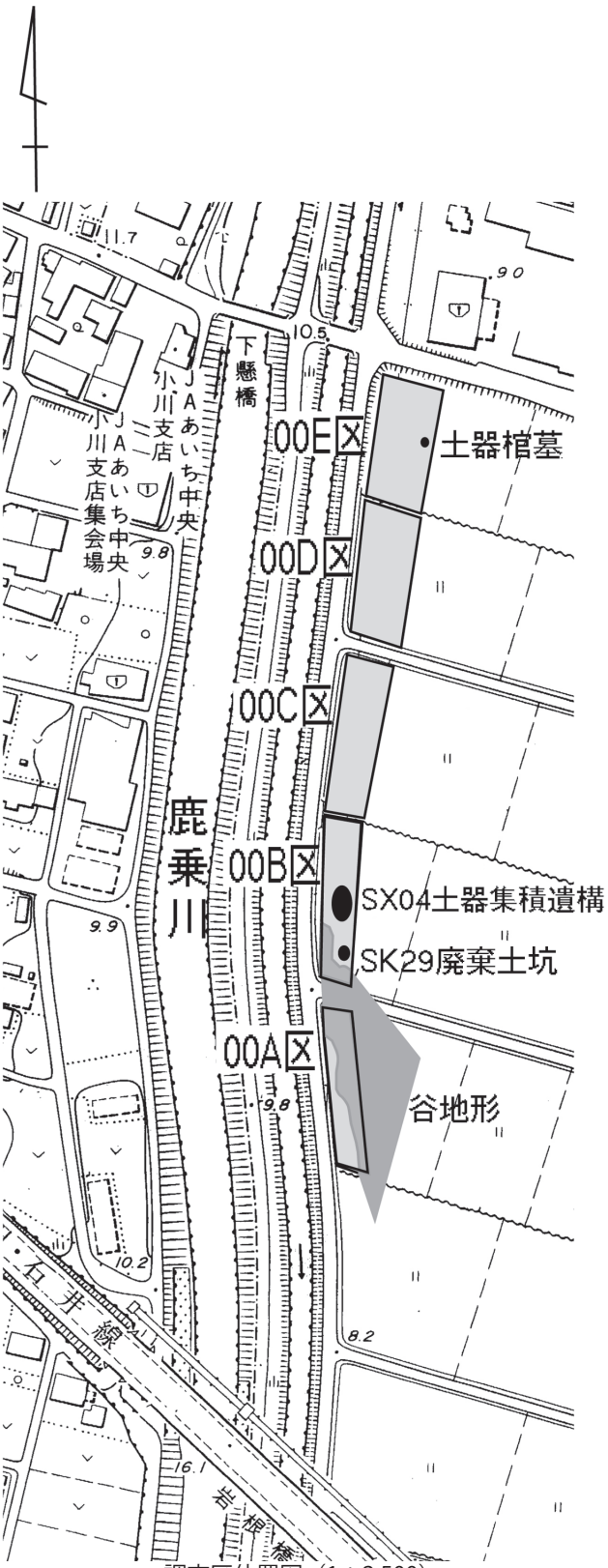
立地と環境　下懸遺跡は、安城市小川町の鹿乗川左岸に位置する。鹿乗川は、碧海台地縁辺に沿って安城市東部を南北に流れており、この碧海台地からみた外側を矢作川が並行する。周辺の地形は、これらの河川により沖積地が形成され、現況として水田や畑地が広がり、また、自然堤防上の微高地には小規模な集落が形成されている。

調査の概要　下懸遺跡は、矢作川右岸の微高地上に展開する。遺構は、時期幅があるが、いずれもほぼ同一遺構面で検出することができた。今回の調査では、弥生時代中期、弥生時代終末期から古墳時代前期、平安時代から鎌倉時代にかけての遺構をまとまって確認することができた。弥生時代中期と考えられる遺構として、Ｅ区を中心に検出された竪穴住居、土器棺墓などがあげられる。また、弥生時代終末期から古墳時代前期と考えられる遺構としては、Ｂ区を中心に検出されたＳＫ 29 の廃棄土坑、ＳＸ 04 の土器集積遺構があげられる。Ａ、Ｂ区では、谷地形が確認でき、微高地との境界部分に、廃棄土抗、土器集積遺構が確認されている。さらにこの谷地形の埋土からは、木鋤等の木製品や未製品、切断痕の確認できる原木も多数出土しており、調査区周辺に木製品の製作場所が存在した可能性が考えられる。

（鈴木　裕）

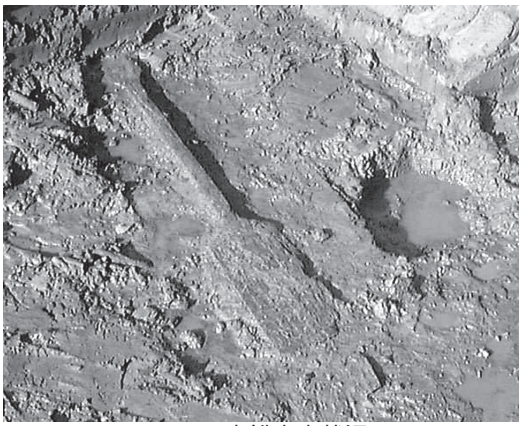

Ｂ区　ＳＸ 04 土器出土状況


Ｅ区　土器棺出土状況



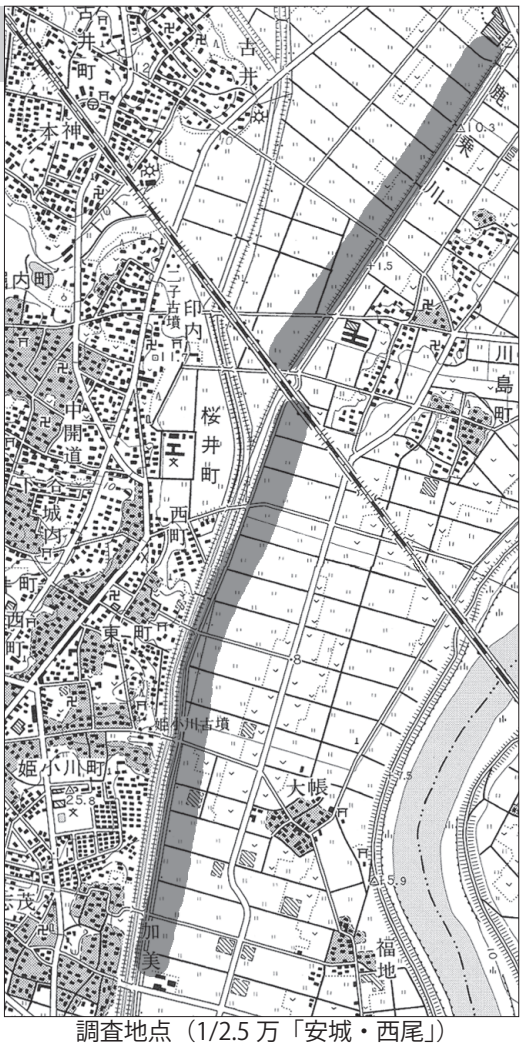
調査区位置図（1：2,500）


B区　調査区全景


A区　木鍬出土状況

鹿乗川（かのりがわ）流域遺跡群 範囲確認調査

所 在 地　安城市桜井町・川島町・河野町・東町・小川町・姫小川町
調査理由　鹿乗川河川改修工事に伴う事前調査
調査期間　平成 12 年 10 月～平成 13 年 1 月
調 査 積　1,300 ㎡
担 当 者　川井啓介・竹内　睦・皆見秀久



調査地点（1/2.5 万「安城・西尾」）

調査の経過　調査は、鹿乗川河川改修工事に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通した委託事業として、平成 12 年 10 月～平成 13 年 1 月に実施した。調査面積は 1,300 ㎡である。

立地と環境　鹿乗川は安城市東部を南北に流れ、東には矢作川が並行し、西は碧海台地である。周辺の地形は、これらの河川による沖積地が形成され、新幹線以北では両岸とも水田や畑地が広がり、新幹線以南の右岸は小規模な集落が、左岸は畑地が広がっている。

調査の概要　今回の調査では、新幹線以北を北地区新幹線以南を南地区と 2 つの調査区に分けて実施した。全体的に現耕作土下は、近世以降と思われる暗灰黄色細粒砂、シルト層が 20 ～ 40 ㎝ほど堆積している。若干の遺物は出土したが、かなり摩滅している。

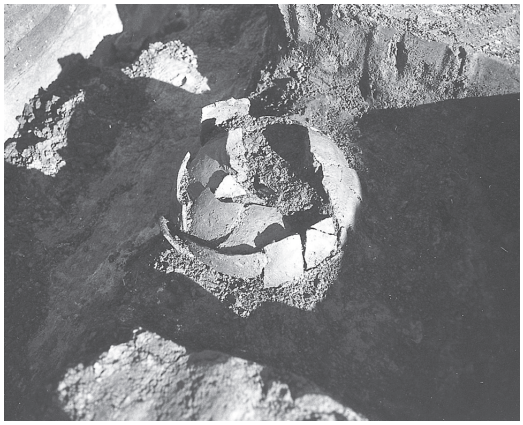
北 地 区　北地区では、調査の対象地内に 21 ヶ所のテストトレンチを設定した。T.T.A-1、T.T.A-3 地点では、シルト層下に弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物を多量に含む黒褐色シルト層が約 30 ㎝堆積する。T.T.A-3 からは畦畔を検出することができた。また、その下層からは土坑が検出された。T.T.A-4、T.T.B-1 地点では、遺構・遺物包含層の確認はできなかった。T.T.A-4 は下層に中粒砂が厚く堆積し、河川であったと思われる。T.T.B-1 では、耕作土下から近代以降の攪乱を受けており、下層から出土した杭・横木も同時代のものと思われる。T.T.B-2 ～ T.T.D-3 にかけての地点では、いずれも遺構か遺物包含層が認められる。包含層はいずれも黒色または黒褐色のシルト層で、包含層の厚さは 10 ～ 35 ㎝、弥生時代後期から古墳時代の土師器・須恵器がほとんである。T.T.D-3 では畦畔を検出することができた。T.T.D-4 ～ T.T.E-2 にかけての地点では、遺構・遺物包含層とも確認することができず、小片の遺物が極少量出土した。いずれの遺物もかなり摩滅しており、流れ込んだものと思われる。地表下 150 ㎝には、腐植物層が確認された。T.T.E-3 ～ T.T.E-6 にかけての地点では、遺物包含層は認められないが、T.T.E-3 では、地表下 150 ㎝から横木・杭を確認することができた。T.T.E-5、E-6 では畦畔と思われる遺構を確認することができた。T.T.E-4 は、暗灰

黄色細粒砂下に灰色粘土が厚く堆積し、遺物・遺構とも確認することができなかった。

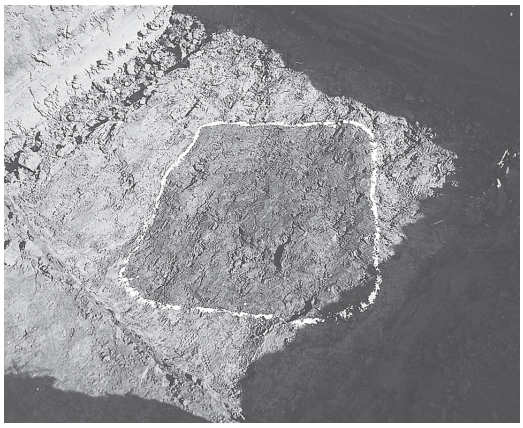
南地区　南地区では、調査対象地内に 22 ヶ所のテストトレンチを設定した。T.T.6-1 ～ 6-4 の地点では、暗灰黄褐色極細粒砂層直下に弥生時代から古墳時代にかけての遺物を多量に含むシルト層が 20 ㎝～ 30 ㎝堆積し、直下または黒褐色シルト層をはさみ、溝状遺構、土坑を検出することができた。T.T.7-1、7-2 地点では、自然流路の堆積がみられ、特に T.T.7-2 では遺構・遺物包含層とも確認することができなかった。T.T.7-1 では上層の黒褐色シルト層を埋土とする土坑を検出することができた。T.T.7-3、7-4 地点では、地表下 45 ㎝～ 80 ㎝ほどで厚さ 20 ㎝ほどの弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物を含む黒褐色シルト層が堆積している。TT.7-4 では、黒褐色シルト層の下層に薄い黄褐色中粒砂層をはさんで断面より土坑を検出することができた。T.T.8-1、8-2 地点では、地表下 60 ㎝～ 70 ㎝ほどで遺構を検出することができた。T.T.8-1 では、耕作土直下にオリーブ褐色極細粒砂層、黄褐色極細粒砂層と続き、その下から溝状遺構を検出することができた。弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物を含むシルト層はさらに下層であり、溝は近世以降のものと思われる。T.T.8-2 では、耕作土直下は近代以降の客土が堆積しているが、直下から土坑 1 基を検出することができた。土坑内から弥生時代後期から古墳時代にかけての台付甕が出土した。T.T.9-1、9-2、9-8 地点では、遺物包含層までの厚さが北へ行くほど薄くなっている。T.T.9-1 では、地表下 130 ㎝から遺物を多量に含むシルト層が 60 ㎝ほど堆積している。時期は弥生時代中期から古墳時代にかけての遺物である。下層の中粒砂層から弥生時代中期から後期にかけての土器が出土している。T.T.9-2 では、竪穴状遺構、土坑、溝状遺構を検出することができた。T.T.9-8 は地表下 50 ㎝ほどで黒褐色シルト層に達するが、厚さは 5 ㎝ほどで遺物の量も T.T.9-1、9-2 に比べ、少ない。下層は河川の流路の堆積となっている。T.T.10-1 ～ 11-1 にかけての地点では、遺物の出土はごくわずかであった。T.T.10-3 では黒褐色シルト層下から土坑を 1 基検出することができた。T.T.11-1 では、遺物を含む黒褐色シルト層がみられた。T.T.11-5 地点は、耕作土下からオリーブ褐色シルト層に暗褐色シルトがブロック状に堆積している層が 70 ㎝ほど堆積しており、近代以降の攪乱を受けている。T.T.11-3、11-4 地点では、耕作土直下に、にぶい黄褐色シルト層が 30 ㎝ほど堆積し、その下は河川の流路の堆積となっている。T.T.11-4 では、にぶい黄褐色シルト層下の断面より土坑を 2 基検出することができた。T.T.12-1、12-2 地点では、地表下 60 ㎝～ 90 ㎝ほどに弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物を含む黒褐色のシルト層が堆積しており、T.T.12-1 より北の T.T.12-2 の方が浅くなっている。T.T.12-1 の包含層は厚く 80 ㎝ほどで、その下層は中粒砂である。中粒砂の直上からは多量の土器が出土している。T.T.12-2 の包含層の厚さは 40 ㎝ほどであるが、完器に近い土器が多数出土している。いずれも遺構を検出することができなかった。

まとめ　以上の結果、調査地点は沼沢地または河川と微高地が入り組んだ場所であり、遺構・遺物包含層が確認されたトレンチ周辺は微高地にあたり、遺跡の種類としては集落跡と考えられる。また、T.T.E-3 ～ T.T.E-6 や T.T.A-3、T.T.D-3 で畦畔が検出されたように、古代以降の水田域が周辺に展開しているものと考えられる。遺構・遺物包含層とも確認できなかったトレンチ周辺は、河川もしくは沼沢地であったと思われる。

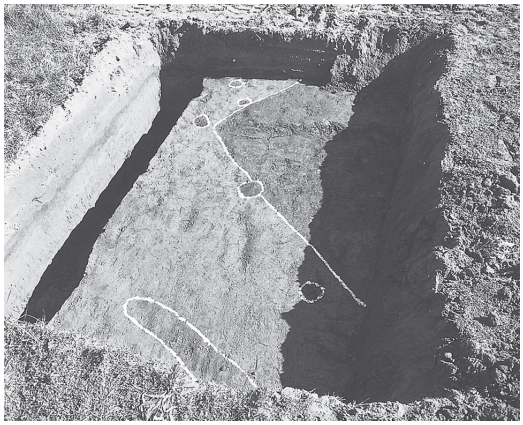
（川井啓介・竹内　睦・皆見秀久）



T.T.12-2（西から）



T.T.10-3（西から）



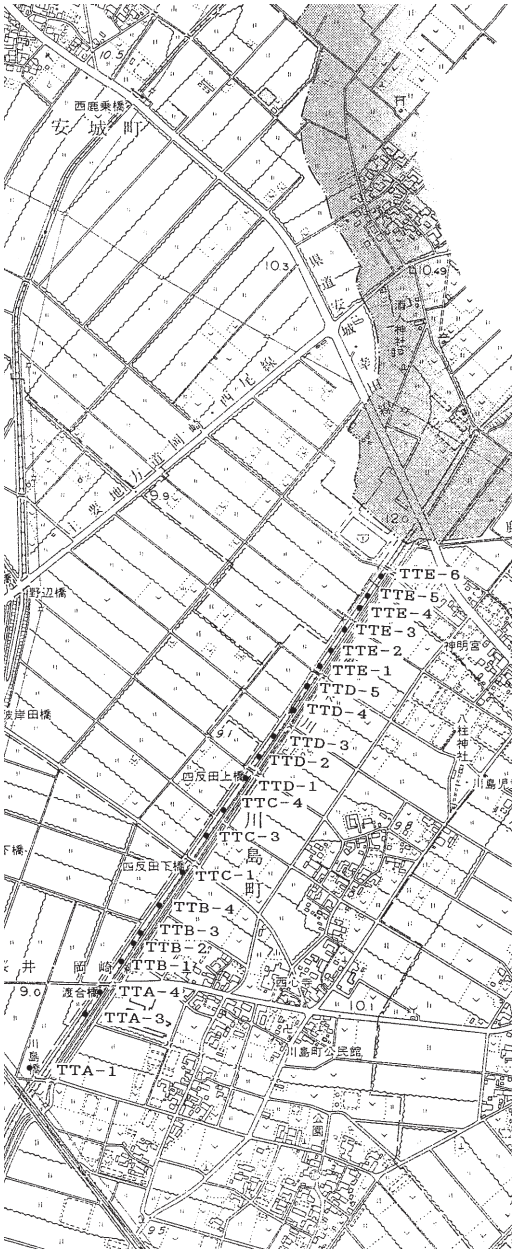
T.T.9-2（西から）



T.T.8-1（南西から）

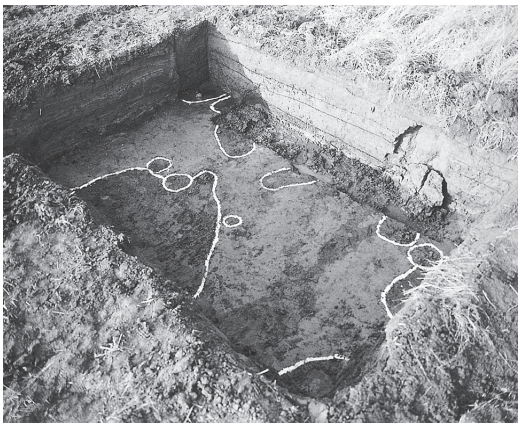


南地区調査地点位置図（1：1,500）



北地区調査地点位置図（1：1,500）


T.T.D-2（西から）

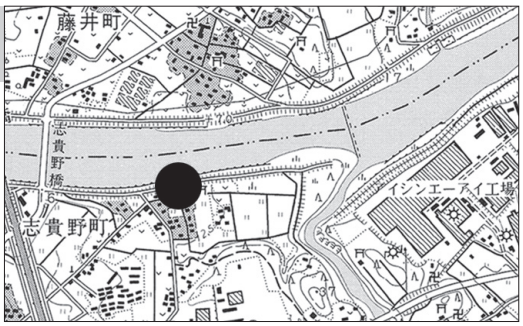

T.T.D-1（南西から）


T.T.C-1（南西から）


T.T.B-4（北西から）

古新田（こしんでん）遺跡

所 在 地　西尾市志貴野町
調査理由　矢作川河川改修に伴う事前調査
調査期間　平成 12 年 11 月～平成 13 年 3 月
調 査 積　4,100 ㎡
担 当 者　花井　伸・小嶋廣也・武井繁樹



調査地点（1/2.5 万「西尾」）

調査の経過　調査は、矢作川河川改修予定地内における事前調査であり、国土交通省より愛知県教育委員会を通した委託事業として、平成 12 年 11 月から平成 13 年 3 月にかけて実施した。調査面積は、4,100 ㎡である。

立地と環境　古新田遺跡は、愛知県の中央を流れる矢作川流域の岡崎平野南部にあって、南西部が三河湾に接する西尾市志貴野町に所在する。本遺跡は矢作川と矢作古川との分岐点近くの矢作川左岸に位置するが、江戸時代初期にこの川が開削される以前は、対岸の安城市域から南に延びる碧海台地の東端にあって、大郷山や小島山の分離丘陵や台地から旧矢作川に向かっての開析谷に面していた。

本遺跡の周辺には多くの遺跡が立地しており、愛知県埋蔵文化財センターにおいても矢作川対岸の木戸城跡（古代の集落、中世城館）、西には志貴野遺跡（古代の集落）、南の沖積地に岡島遺跡（弥生時代の集落）などの調査を行っている。なお、本遺跡に隣接する新堤防建設に伴う事前調査として平成 6 年度に西尾市教育委員会が調査を行い、古墳時代後期と中世の集落跡を確認している。

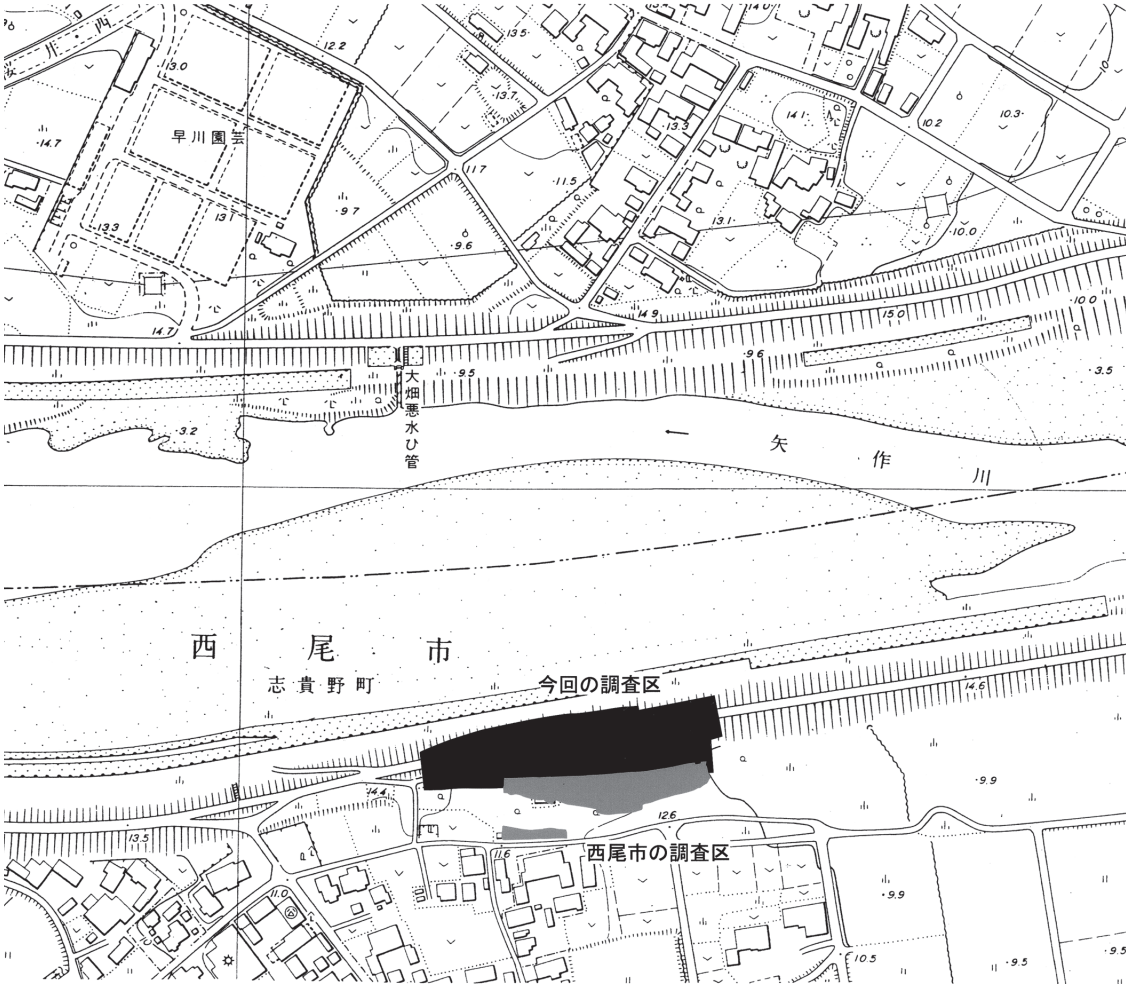
調査の概要　調査区は東西約 160 m、南北約 30 mの長方形を呈し、東西方向では西から東に向かって緩やかに傾斜し、標高約 12 mから約 9 mまでで推移する。調査区東端では、台地が西から東に向かって落ち込んでいた。南北方向はほぼ水平であるが、南側は新堤防建設のため削平され、北側は矢作川に向かって台地の落ち込みが見られた。旧堤防盛土を含む表土を重機で除去し、さらに中世包含層直上まで掘り下げ遺構の検出を行った。調査の結果、飛鳥時代から奈良時代と平安時代から室町時代の遺構、遺物を確認することができた。

飛鳥時代から奈良時代の遺構としては、竪穴住居、土坑、溝、多数のピットを検出した。竪穴住居は調査区全体で 20 棟以上が確認され、一辺が 4 ～ 6 mと大型のものが多く、ほとんどが隅丸方形を呈していた。 4 本の主柱穴や周溝、カマドを持つものもあるが、残存状態が悪く焼土面のみが残るものがほとんどである。出土遺物については、土師器の甕・甑・土錘、須恵器の蓋杯・高杯などがみられる。また、これ以外に、軒丸瓦や平瓦・丸瓦などの古代瓦と思われる布目瓦や瓦塔が出土した。

平安時代から室町時代の遺構としては、掘立柱建物、土坑墓、柵列、溝、多数の土坑やピットを検出した。掘立柱建物については、柱穴からの遺物が少ないため時代の判定が困難であるが、遺構の切り合い関係から鎌倉時代から室町時代と思われる溝と軸線が異なる建物と一致する建物に分けられる。このことから、溝と方向が同じ掘立柱建物は鎌倉時代以降、方向が異なる建物は柱穴を破壊して溝が掘削されていることから平安時代の遺構と考える。

これらの遺構はこの地方で同時期に出現した方格地割屋敷の在り方に則しており、本遺跡周辺の八ツ面山北部遺跡や室遺跡、平成６年度の西尾市教育委員会の調査でも確認されている。また、鎌倉時代と思われる井戸や地山面が被熱している土坑も確認した。遺物については、灰釉系陶器の椀・皿や鍋などの土器、中国産の青磁の破片などが出土した。

ま と め　今回の調査区は平成６年の西尾市教育委員会の調査区と隣接しており、検出された遺構の規模や出土遺物の時期から、同一遺跡の可能性が高い。双方の遺跡の調査結果や周辺の遺跡の調査結果から、周辺地域の古代集落の出現、変容、解体から中世集落の出現を考察するうえで重要な成果といえる。なお、古新田遺跡の南側には東西 125 m、南北 130 mの範囲に古代瓦の散布地が広がり志貴野廃寺の推定地とされている。今回の調査においても布目瓦や瓦塔が出土しておりその志貴野廃寺との関係が想定される。また、調査区東壁において人為的に積み上げられた堤防状の土層が確認されている。これが 1605 年に開削された矢作新川の堤防の一部であると考えている。　（花井　伸・小嶋廣也・武井繁樹）



調査区位置図（1：5,000）



空撮写真



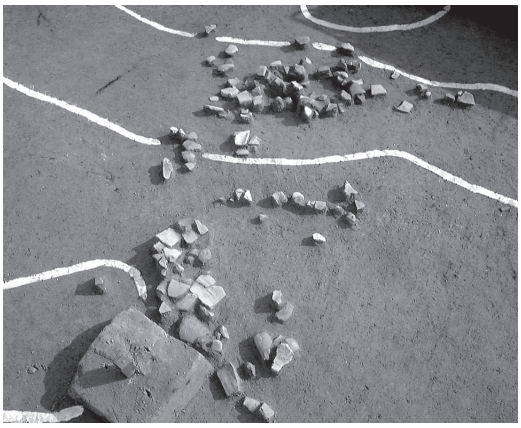
ＳＢ 08（南西から）



ＳＢ 03 遺物出土状態（北から）



ＳＢ 13 カマド断ち割り状態（南東から）



古代瓦出土状態（北西から）



掘立柱建物（南東から）



ＳＫ 2965（南から）



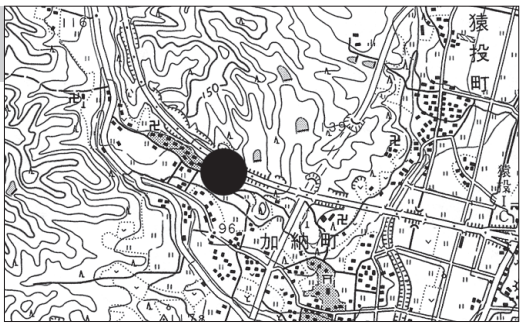
ＳＫ 835（西から）



東壁セクション（北西から）

寄元（よりもと）3号墳

所 在 地　豊田市加納町字寄元地内
調査理由　猿投グリーンロード建設
調査期間　平成 12 年 4 月～ 6 月
調 査 積　600 ㎡
担 当 者　花井　伸・武井繁樹・永井邦仁



調査地点（1/2.5 万「豊田北部」）

調査の経過　寄元古墳群は、3 基以上からなる古墳時代後期の群集墳である。猿投グリーンロード拡幅工事に伴う事前調査として、愛知県道路公社から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた。平成 11 年度に道路建設予定地内での古墳の範囲調査を実施し、3 号墳・4 号墳の存在を確認し、4 号墳については本調査を行い、7 世紀末から 8 世紀初頭に位置づけられる小石室を確認した。次いで平成 12 年度は、3 号墳の発掘調査を実施した。

立地と環境　猿投山南麓に位置する。一帯には、北西から南東方向に舌状に伸びる尾根がいくつかあり、それら尾根上に古墳群は形成される。付近には、藤山古墳群や池田古墳群などの後期古墳が点在している。

調査の概要　墳丘は、風化花崗岩を基盤とする尾根筋に平坦面をつくり、その上に土砂を積み上げて構築される、直径約 12 mの円墳である。平坦面をつくる際に、墳丘底面規模に合わせて周溝を掘るが、明瞭に確認されたのは山頂側のみである。石室の構築と同時に側壁石材の背面から盛土を行うが、石室東側中層では明灰色の地山土と黒色土が厚さ約 5 ㎝ずつ交互に積んでいるのが確認された。なお、石室東側下層や石室西側ではそのような工法をとっておらず、約 20 ㎝ずつ土を盛っているのが観察された。そして石室完成後、全体を覆うように一気に土を盛り上げ、墳丘を完成させる。また石室開口部から左右に人頭大の円礫を円弧に配し、列石とするが、土層の状況からみて、外護列石とは異なり、盛土の際の土止めを目的として配置されたものと考えている。ところで、石室前方では扇状の前庭部が確認されたが、そこに通じる墓道については不明である。

石室は、全長 5.2 m、最大幅 1.4 m、推定高 1.2 mの規模である。地山に全長 5.5 m、幅 2.6 m、深さ 20 ～ 30 ㎝の土坑を掘り、奥壁 2 枚を並べる。基底石は亜角礫を用いるが、その配置は、東側壁では直線的であるのに対し、西側壁は若干胴張形を呈し、左右非対称である。側壁石材は西側壁の方がやや小さめで、傾斜角は東側壁が 85 °、西側壁が 75 ° である。閉塞石は円礫を使用するほか、楕石状のものを開口部に据え置く。床面は拳大の川原石を敷き、礫床とする。石室は横方向から盗掘を受けており、天井石のほとんどと、東側壁の一部が紛失または移動していたが、副葬品にはほとんど影響はなかったとみられる。

出土遺物は、石室内からは勾玉 1 点、金銅製耳環 2 点、提瓶 1 点、鉄鏃、鉄刀の一部が出土した。また、人骨とみられる骨片も確認され、状況から被葬者が 2 人であった可能性が考えられる。石室前庭部からは、細かく破砕された須恵器が出土し、6 世紀後半から 7 世紀前半の範囲で 2 時期に分かれそうである。ところで、墳丘裾の土坑からは灰釉系陶器・伊勢型鍋の小片が出土したほか、調査区一帯からは条痕文系土器片が採取された。　（永井邦仁）



調査風景（南東から）



石室内遺物出土状況（東から）



石室全景（南西から）



石室奥壁



石室西壁



石室東壁



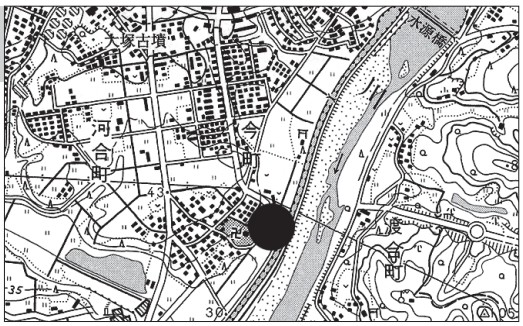
礫床



基底石（南西から）

今町（いまちょう）遺跡

所 在 地　豊田市今町地内
調査理由　第二東海自動車道建設
調査期間　平成 12 年 6 月～ 11 月
調 査 積　4,000 ㎡
担 当 者　花井 伸・小嶋廣也・武井繁樹・成瀬友弘・永井邦仁



調査地点（1/2.5 万「豊田南部」）

調査の経過　発掘調査は、第二東海自動車道建設に伴う事前調査であり、日本道路公団から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、すでに平成 9 年 6 月に範囲確認調査（面積 200 ㎡）、平成 10 年 9 月から平成 11 年 2 月にかけて本調査（面積 4,400 ㎡、98 A ～ 98 F 区）が実施されている。今年度の調査は、平成 10 年度調査区の北東側に隣接し、00 A区（400 ㎡）、00 B区（2,900 ㎡）、00 C区（700 ㎡）の 3 調査区を設定し実施した（以下 00 略）。

立地と環境　今町遺跡は、豊田市今町に所在する縄文時代から江戸時代までの複合遺跡である。本遺跡は、矢作川右岸の碧海台地上に立地しており、標高は約 27 ～ 28 mである。台地は、A区からB区へと矢作川に向かって緩やかに傾斜している。また、調査地点は矢作川と巴川の合流点に近く、上流の水源橋付近で川幅が狭くなっている。本遺跡の周辺には多くの遺跡があり、第二東海自動車道建設に伴い本センターが発掘調査を実施した遺跡として、本川遺跡、川原遺跡、郷上遺跡、天神前遺跡、水入遺跡があり、多くの遺構と遺物が確認されている。

調査の概要　平成 10 年度の調査で、縄文時代、奈良時代、鎌倉時代、戦国時代、江戸時代の 5 つの時期の遺構と遺物が確認されている。今年度の調査では、縄文時代を除く 4 つの時期の遺構と遺物が検出され、飛鳥時代から奈良時代までの竪穴住居群と、戦国時代の屋敷地が広がっていたことが明らかとなった。

縄文時代　前回の調査において竪穴住居などの遺構が検出されているが、今年度の調査では残念ながら明確な遺構や遺物を確認できなかった。しかし、B・C区の遺構埋土から、縄文時代と思われる石器が出土しており、石鏃や石錐などの製品の他に、石核（コア）や剥片（フレイク）も見られる。石材としては黒曜石やチャートが多く、頁岩もある。また、剥片の中には旧石器時代にまで遡る可能性があるものが含まれており、本遺跡周辺の遺跡から後期旧石器時代の石器が出土していることから、今町地内でも同時代に人々が活動していたことが推察される。

飛鳥時代～奈良時代　今年度の調査において中心となった時期で、竪穴住居 80 棟以上、溝 1 条、土坑数基が確認されている。竪穴住居は重複した形ではあるが、ある程度の集落を形成していたことが明らかとなった。住居の存続期間は、出土した遺物から岩崎 17 号窯式の古い段階から高蔵寺 2 号窯式頃まであったと考えられる。住居の規模は一辺が 5 ～ 7 m程の隅丸方形を呈し、多くの住居で周溝が確認されており、一部の住居からは北壁あるいは西壁にカマド痕が検出されている。ただし、B区のＳＫ 1423 とＳＫ 1424 は、2.6 m× 3.7 m程の隅丸長方形を呈しており、規模から考えて一般的な竪穴住居とは考えにくい。また、検出された竪穴住居には、掘り込みの深さにかなりの差が見られる。掘り込みの浅い住居は、単に上部が後世の削平を受けた可能性もあるが、それぞれの住居に何らかの機能的な違いを見出すこ

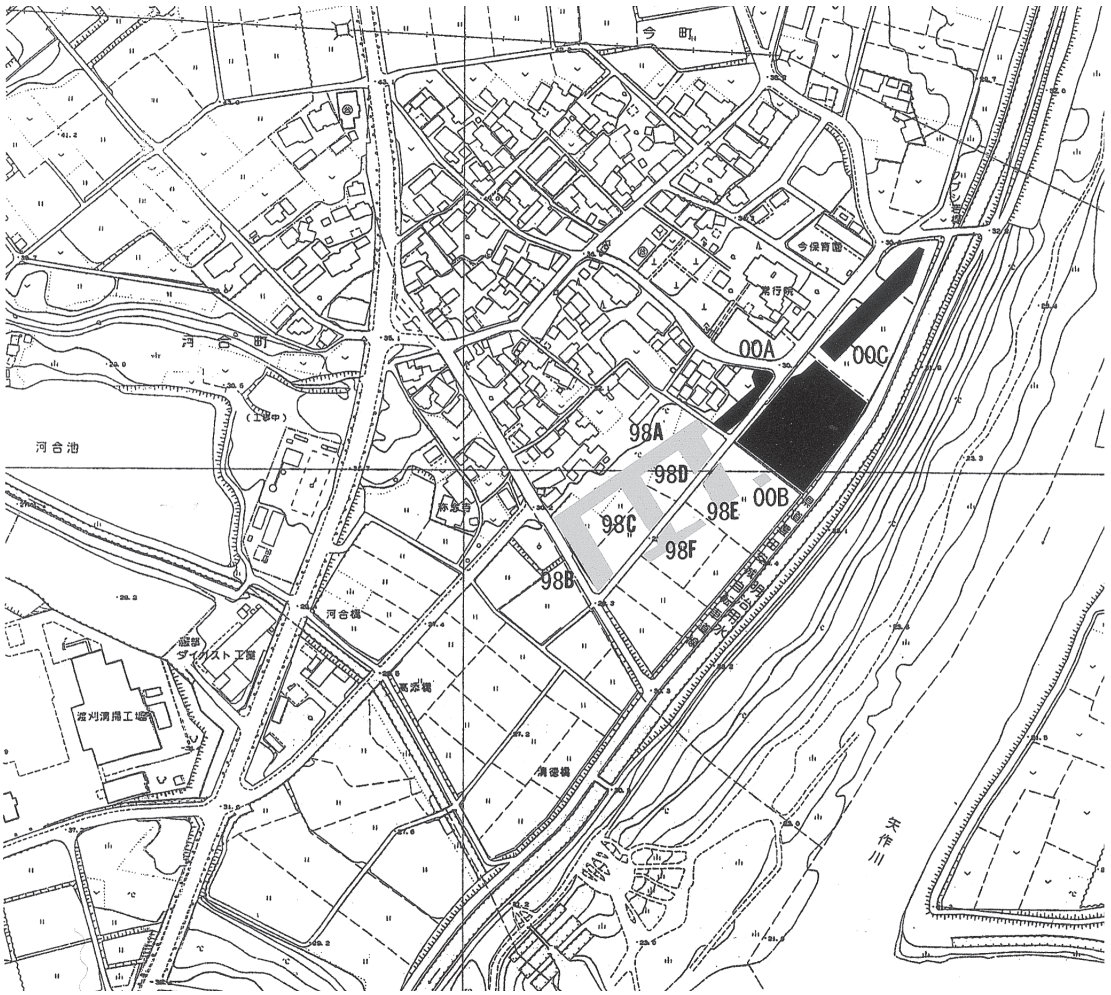
とができないものだろうか。出土遺物の詳しい検討が必要となろう。

鎌倉時代

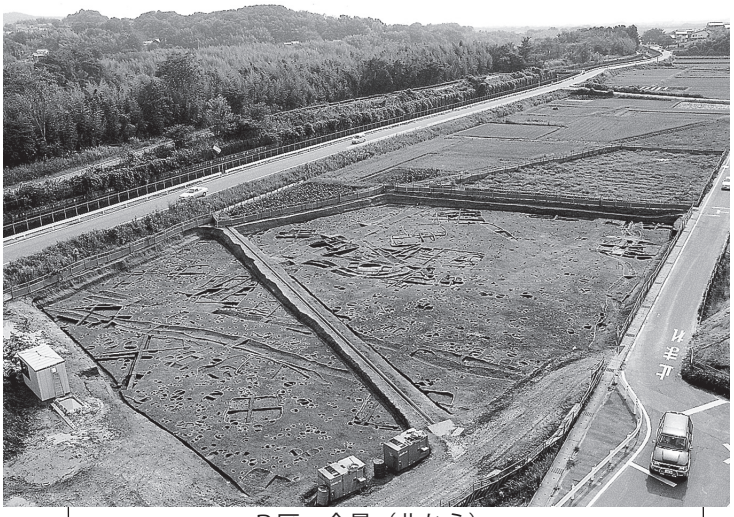
土坑墓約 10 基、竪穴状遺構 2 基が検出されている。前回の調査では土坑墓は確認されていない。形態や埋土が土坑墓に類似した遺構は検出されているが、遺物が出土していないために確定できなかった。しかし、C区のＳＸ 01 から灰釉系陶器・椀と鉄製の刀子が出土したことにより、今町地内はこの時期に土坑墓が広がる墓域であった可能性が高くなった。土抗墓の形態は、隅丸長方形のものと円形のものの 2 種類が見られる。また、B区のＳＢ 30 とＳＫ 1425 は、やや不定形で規模は小さいが竪穴状遺構と考えている。

戦国時代

屋敷地を区画すると思われる溝十数条、池状遺構 1 基、井戸 2 基、掘立柱建物数棟などが検出されている。まず、調査区を縦横にほぼ 2 本ずつの平行した溝が走り、その溝に囲まれた一辺が 40 ～ 50 m程の空間が屋敷地と推定される。その中に、井戸や掘立柱建物が配置されていたと考えられる。また、溝と溝の間には、戦国時代以降の遺構が検出されていないことから、道路として利用されていた可能性が高い。道路はB区の東側でＴ字状に交差している。同様の道路はC区でも一部確認されている。検出された掘立柱建物については、柱穴から遺物が出土していないことから時期を特定することは難しいが、溝と方向性が近似していることから同じ時期と考えている。また、B区のＳＫ 1147 とＳＫ 1545 は素掘りの井戸で、掘り形は袋状に広がっている。他に、A区のＳＸ 06 は石で護岸が行われており、出土遺物から江戸時代まで存続した池状遺構と思われる。



第 1 図　調査区位置図（1：5,000）



B区　全景（北から）

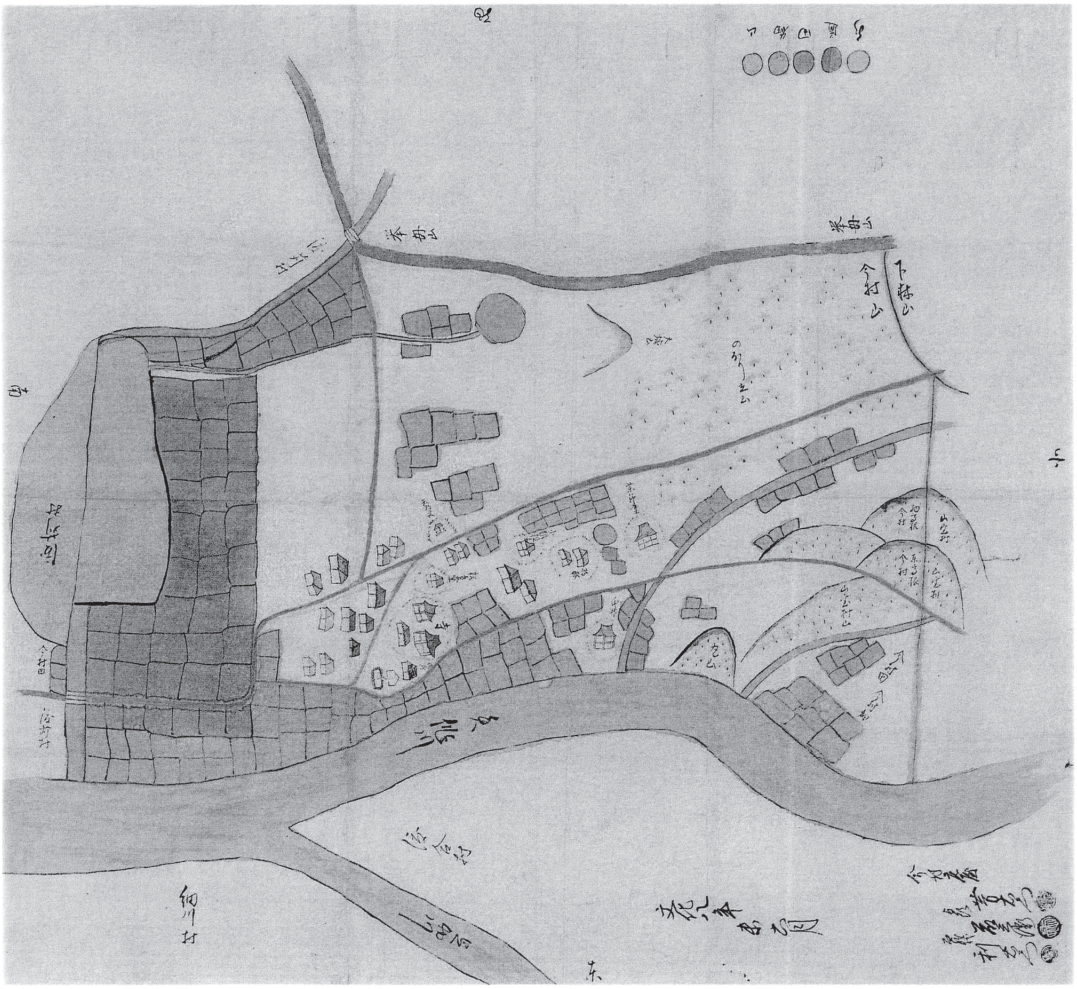
Y=800.000
Y=750.000
Y=700.000
Y=650.000
X=−106900.000
X=−106950.000
X=−107000.000
N
00C区
00B区
00A区
SD02
SD03
SB08
SB09
SB10
SB11
SD09
SD10
SX01
SD16
SB13
SD15
SD43
SD44
SB39
SB38
SB41
SB44
SB45
SB57
SD23
SB02
SK2780
SK1423
SK1147
SK1424
SB36
SD24
SB19
SK1029
SB30
SD01
SD38
SK1343
SK1354
SK1425
SB13
SD36
SD05
SB01
SB08
SK1545
SB31
SD07
SX09
SB03
SD02
SB02
SK80
SK94
SD32
SX06
SK340

第2図　主要遺構配置図（1：600）

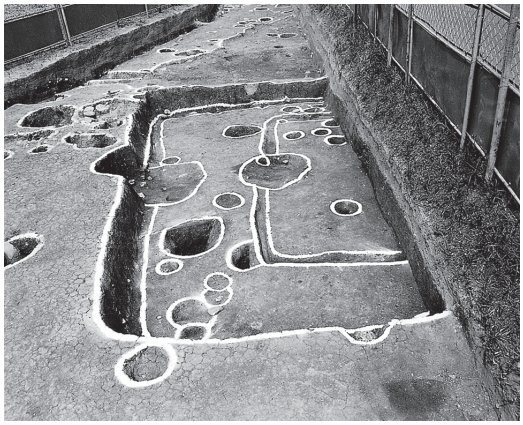
江戸時代　区画溝数条、排水用の溝数条、廃棄土坑数基、井戸３基などが確認されている。江戸時代の前半については、明確な遺構が検出されていないことから、屋敷地が展開していた戦国時代と同じ状況であったと推定される。また、江戸時代の後半には、Ａ区のほぼ全域とＢ区の一部は居住域、それ以外は水田として利用されていたようであり、水田の広がる農村の風景が想像される。Ａ区のＳＤ02やＢ区のＳＤ32は石組みの溝で、居住域と水田を区画していたものと思われる。Ａ区のＳＫ94は、南北に溝があることや一段段差が設けられていることなどから、汚水溜りのような遺構と考えている。また、Ａ区のＳＸ09・ＳＫ80・ＳＫ340は井戸で、曲物などの構造物は確認されなかった。

ま と め　以上、今町遺跡は飛鳥時代から奈良時代までと戦国時代から江戸時代までに集落が形成されていたことが確認された。平成10年度の調査区では竪穴住居は4棟しか確認されていないが、今年度の調査成果から矢作川に沿う形で竪穴住居が密集している様子が窺えることから、未調査部分にも集落が広がっているのではないかと推定される。また、戦国時代の屋敷地が城館跡と指摘されていることから、今後の詳しい検討が必要となろう。

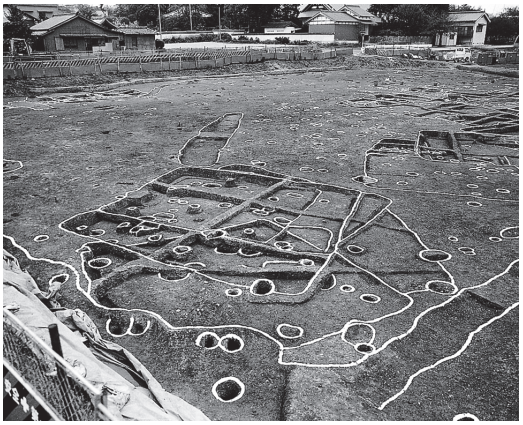
（花井　伸・小嶋廣也・武井繁樹）



第３図　「今村絵図（文化８=1811年）」（『豊田の古絵図』より転載）



A区　ＳＢ 02・03 完掘状況（南西から）



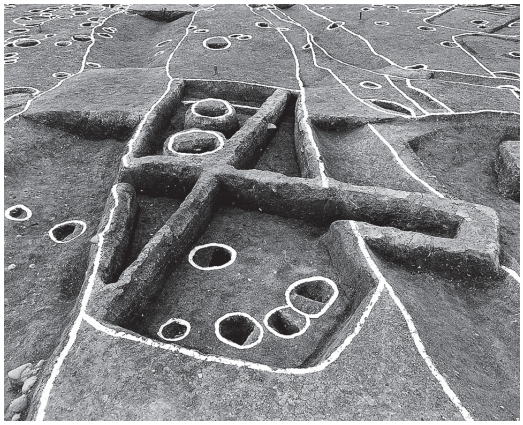
B区　ＳＢ 08 周辺（南から）



B区　ＳＢ 39 周辺（南西から）



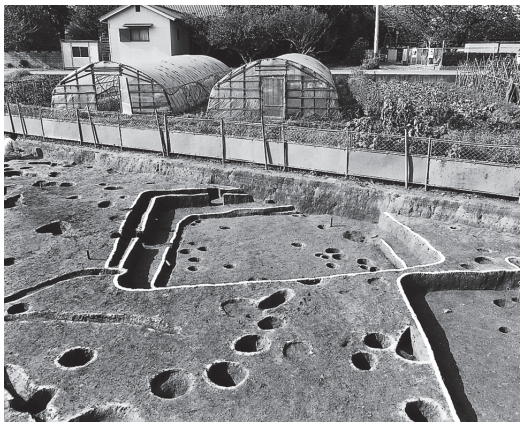
B区　ＳＢ 39 遺物出土状況（東から）



B区　ＳＢ 19 全景（南西から）



B区　ＳＢ 57 全景（西から）



C区　ＳＢ 09・10 周辺（南東から）



B区　ＳＫ 1425（北から））



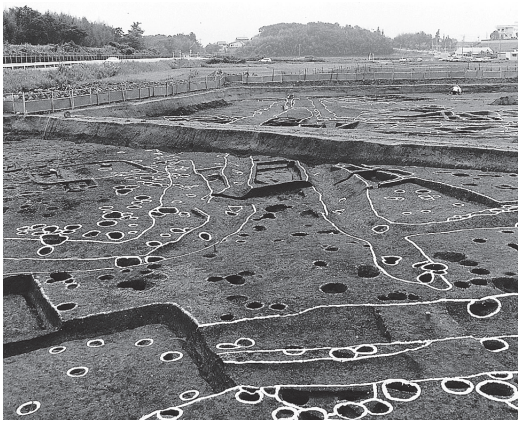
B区　ＳＫ 1029 全景（北西から）



C区　ＳＸ 01 完掘状況（南東から）



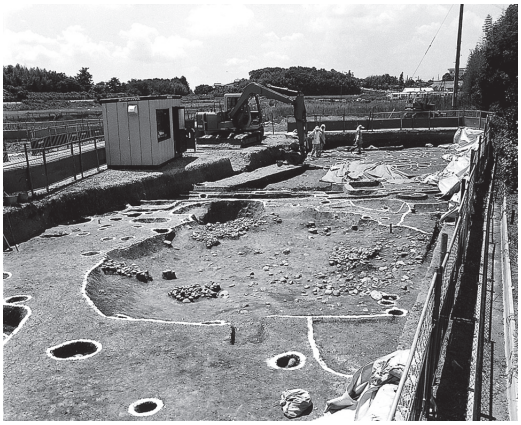
B区　道路状遺構（北西から）



B区　道路状遺構（北東から）



B区　掘立柱建物（西から）



A区　ＳＸ 06 完掘状況（北東から）



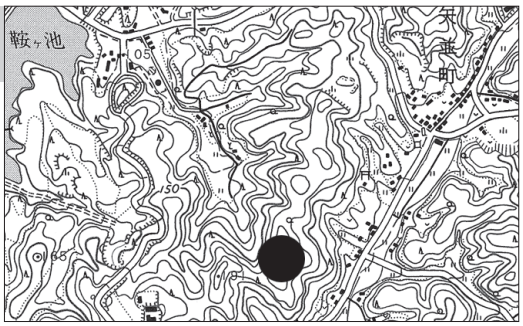
B区　ＳＤ 32 完掘状況（南西から）



A区　ＳＫ 94 完掘状況（北東から）

矢並下本城跡（やなみしもほんじょう） 範囲確認調査

所 在 地　豊田市矢並町地内
調査理由　東海環状自動車道建設
調査期間　平成 12 年 5 月～ 6 月
調 査 積　200 ㎡
担 当 者　花井　伸・小嶋廣也・成瀬友弘

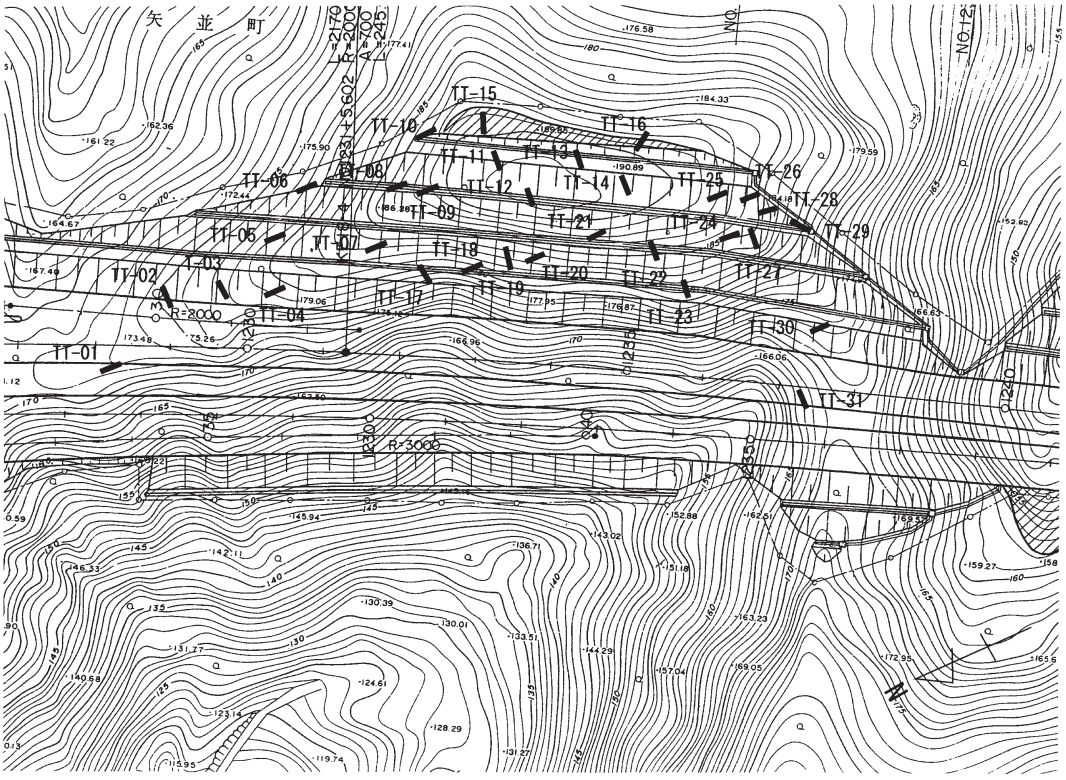


調査地点（1/2.5 万「豊田北部」）

調査の経過　調査は、東海環状自動車道建設に伴うもので、国土交通省より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、矢並下本城跡の範囲を確認するために、31 ヶ所にテストトレンチを設定した。なお、テストトレンチは概ね北から T.T.-01 と表記することとした。

立地と環境　矢並下本城跡は、矢並川右岸の南北に細長い山地頂部に存在する遺跡で標高約 190 mに立地している。付近には、対岸に鈴木善阿弥屋敷遺跡が、北東約 1 ㎞の所に矢並上本城跡が存在している。

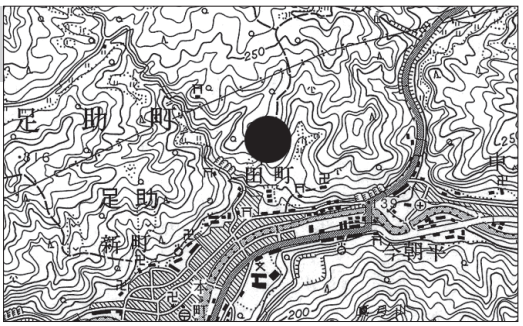
調査の概要　T.T.-04 ～ T.T.-07 で竪堀、T.T.-09・T.T.-10・T.T.-24・T.T.-25 で堀切、T.T.-15・T.T.-16 では曲輪境の溝を遺構として確認した。これら遺構の残存状況は比較的良好な状態であった。調査の結果、矢並下本城遺跡の範囲は、従来中世城館分布調査などで知られていた範囲よりも若干狭く考えなければならないと思われる。なお、遺物が出土していないために明確な時期や存続期間を知ることは出来ない。しかし、遺構の性格から考えて、戦国時代と推定される。（成瀬友弘）



矢並下本城遺跡範囲確認調査地点（1：2,000）

城山城跡（しろやまじょう）

所 在 地　東加茂郡足助町字城山及び引陣地内
調査理由　国道 153 号足助バイパス建設
調査期間　平成 12 年 11 月～平成 13 年 3 月
調 査 積　1,300 ㎡
担 当 者　花井　伸・成瀬友弘・永井邦仁



調査地点（1/2.5 万「足助」）

調査の経過　城山城跡は、足助町内にある戦国時代の山城を主体とする遺跡で、およそ 350 m× 150 mの規模と推定されている。国道 153 号足助バイパス建設に伴う事前調査として、国土交通省より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた。主郭から南西方向に伸びる 4 つの尾根を調査対象地とし、平成 12 年度は、西から 2 つの尾根について調査を行った。

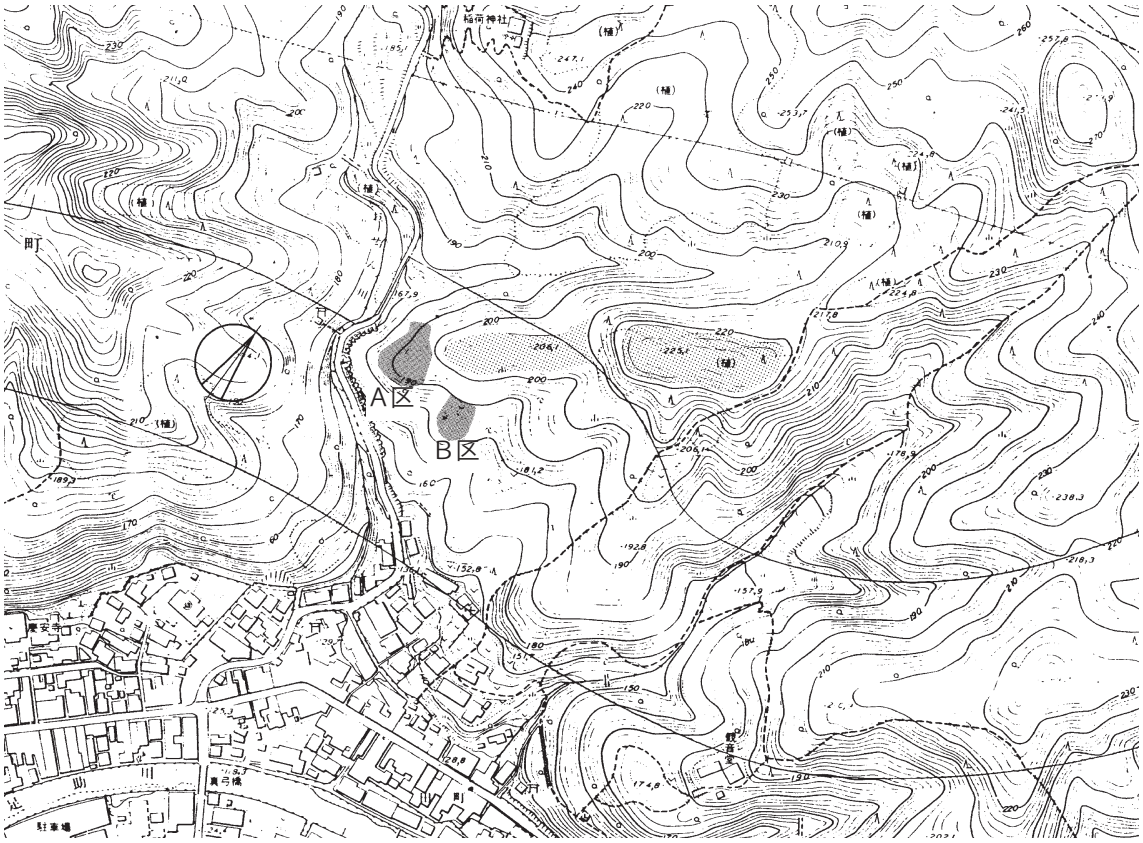
立地と環境　足助川の北岸に位置し、標高約 175 ～ 230 mの、山頂から南西へ伸びる尾根上に展開する。西側はおせん川の流れる谷に面し、東隣の尾根群には大観音城跡がある。また、市街地をはさんで南方の真弓山城跡と対面し、その西方に飯盛山城跡も視界に入る。

調査の概要　尾根の西端部をＡ区とし、尾根の南側にとりつく小さな尾根をＢ区とした。

Ａ区では、幅約 7.5 m、深さ約 2.5 mの堀切が確認された。断面は逆台形を呈し、底辺は約 3.5 mである。地形観察から、堀切は下方の斜面まで伸びているとみられ、完全に尾根を断ち切る防御性の強いものである。また、堀切底部から山頂方向へは高低差約 10 m、傾斜角 57 °の人工的な急斜面（切岸）になっており、その上には、主郭に準ずる規模の曲輪が想定される平場があることから、重要な防御施設であったことを伺わせる。出土遺物は、少量ではあるが土師器鍋や青磁碗の小片があり、山城に関わるものとみられるが、時期の特定には至っていない。一方堀切上層や周辺の表土からは 19 世紀以降の陶磁器や瓦・砥石などが比較的多く出土しており、耕作地になっていた頃に持ち込まれたものとみられる。堀切より西側で確認された土坑も、ほとんどが耕作の際に掘られたものと推定される。

Ｂ区では、腰曲輪がほぼ完全な形で検出することができた。腰曲輪上面は約 50 ㎡、そこから高低差約 4 m、傾斜角 70°の切岸を経て、曲輪下の幅 1.4 m、深さ 85 ㎝の断面Ｖ字形の堀に至る。堀はややカーブしながら尾根を断ち切るようにして伸びており、曲輪前面を防御するようになっている。堀底部からは長軸 20 ㎝以下の円礫・角礫が 50 点ほど出土した以外には、志野皿の小片が 1 点あるのみである。一方、切岸や付近の表土からは 16 世紀後半に位置づけられる土師器羽釜・鍋・小皿や常滑甕などが出土しており、腰曲輪の機能していた時期を示していると考えられる。なお、堀から下方は傾斜角 30°の切岸が谷底に向かって続いているが、曲輪下の切岸ともども竪堀などの造作は確認されなかった。

調査の結果、Ａ・Ｂ区が城山城の西端部にあたることが判明し、それぞれの地点で特徴的な防御施設を確認することができた。これらはいずれも城の西側にある谷からの攻撃などに備えたものであろう。谷を北方へ上る道は古く遡る可能性があり、交通の監視も意識していたのではないだろうか。また、Ｂ区で出土した生活雑器類は、腰曲輪において短期間ではあるが日常的な生活があったことを伺わせる。　（永井邦仁）



調査区位置と主な推定曲輪の位置図（1：2,000）


A区　堀切作業風景

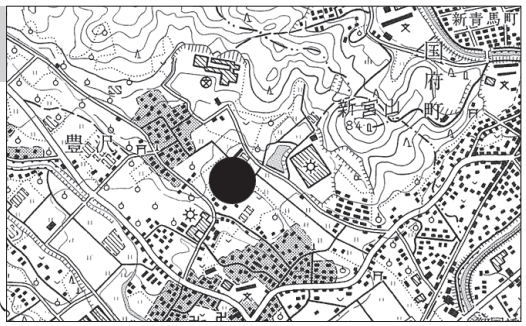

A区　堀切断面


B区　下方の切岸


B区　曲輪下の堀

石堂野（いしどうの）Ｂ遺跡

所 在 地　宝飯郡御津町広石地内
調査理由　県道大塚・国府線建設工事
調査期間　平成 12 年 5 月～ 9 月
調 査 積　6,400 ㎡
担 当 者　川井啓介・松田　訓・竹内　睦・鈴木　裕・皆見秀久



調査地点（1/2.5 万「小坂井」）

調査の経過　調査は県道大塚・国府線の建設工事予定地内における事前調査で、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 11 年 5 月 8 日から 9 月 29 日にかけて実施した。調査面積は、6,400 ㎡である。

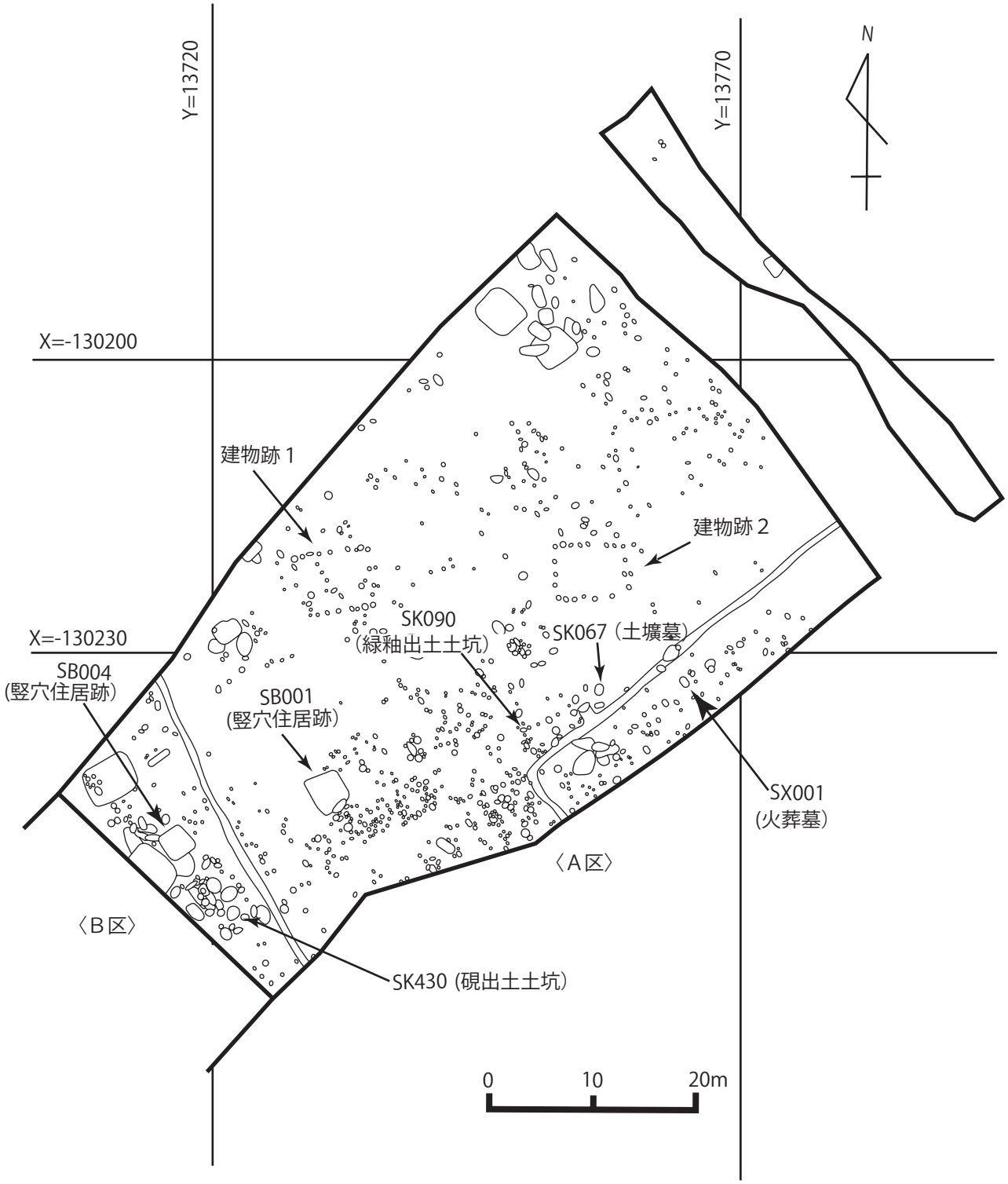
立地と環境　石堂野Ｂ遺跡は、ＪＲ東海道線愛知御津駅より北西約２㎞の、宝飯郡御津町大字広石に位置する。調査地は、北西から南東に向かってゆるやかに下る舌状の高まりと、小河川によって開削された浅い谷によって形成されている。標高は、29 ～ 31 mを測る。

調査の概要　今回の調査地点は、道路建設予定地内のため細長く、北西側から南西に向けて３分割し、A・Ｂ・Ｃ区の順に調査区を設定した。各調査区では大部分で、耕作土の真下から台地の基盤層である赤褐色または黄褐色粘質土が見られた。中世より以前に堆積したと思われる土層は、一部で確認できたのみであった。検出できた遺構は、円形小穴 301、土坑 896、住居跡 6、溝 22、火葬墓 1、土壙墓 1、方形周溝墓 1、不定型な掘り込み 42 などであった。この中で多く見られたものは、直径 25 ㎝弱の円形小穴である。小穴の列が、方位を合わせたように長方形に並ぶ建物跡も２ヶ所確認できた。これとは別に、欠山式土器を含む、竪穴式住居と思われる遺構が複数確認できたが、灰釉陶器が出土したものもあり、継続的ではないものの、複合した時代で居住地として利用されたことがうかがえた。出土遺物は古式土師器を主体とし、少ないながら須恵器、灰釉陶器、山茶椀なども見られた。

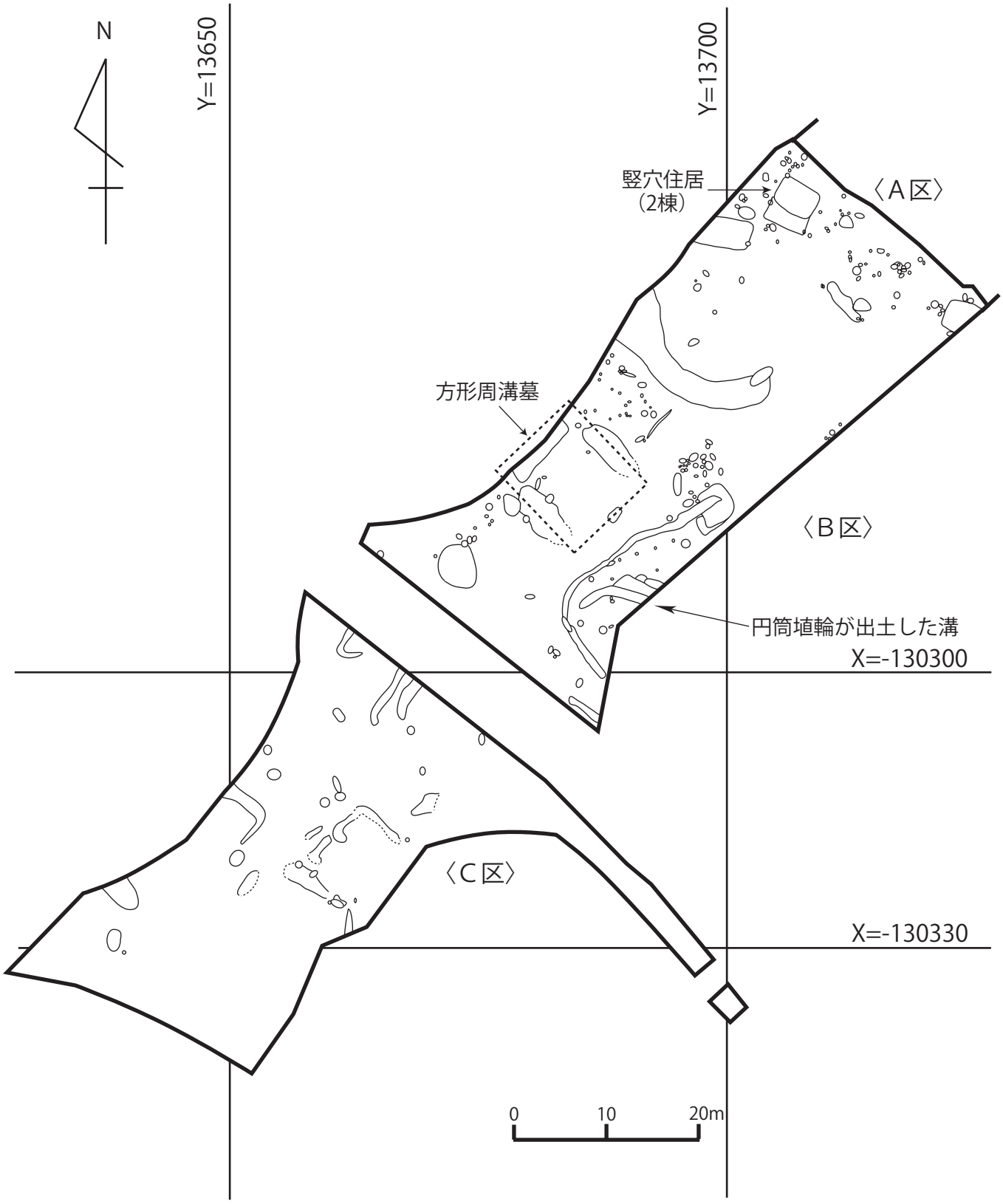
（松田　訓・竹内　睦・鈴木　裕・皆見秀久）



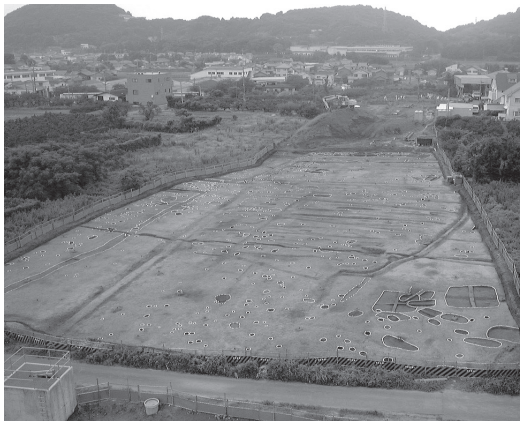
第１図　調査区位置図



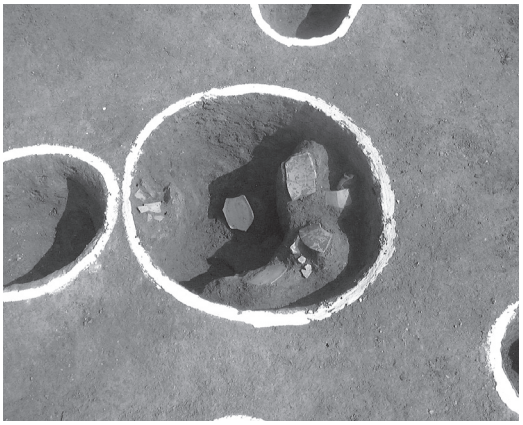
第２図　Ａ区遺構図（1：800）



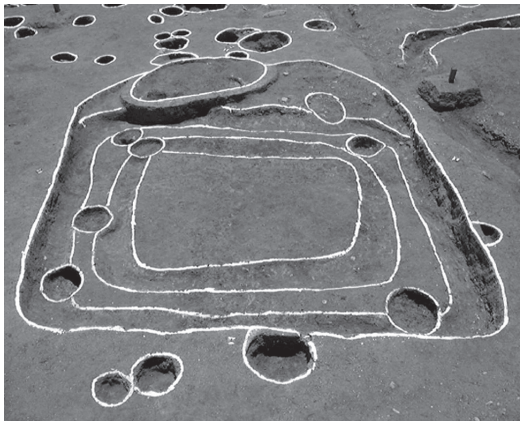
第３図　Ｂ・Ｃ区遺構図（1：800）



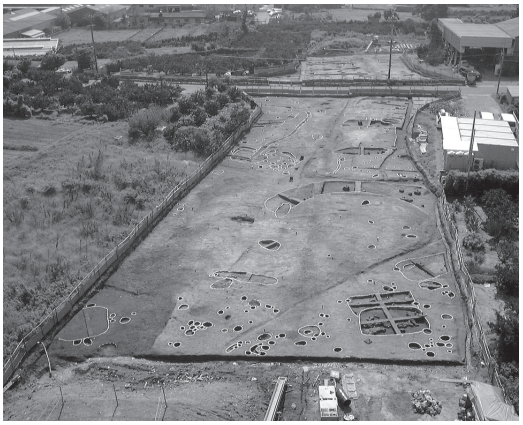
A区　全景（北東から）



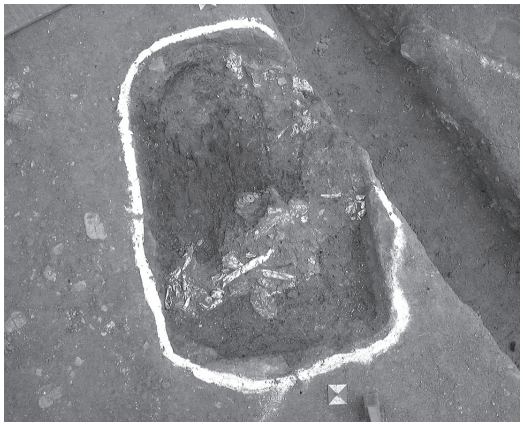
A区　ＳＫ 090



A区　ＳＢ 001



B区　全景（北東から）



A区　ＳＸ 001



B区　円筒埴輪出土状況



A区　建物跡２



B区　方形周溝墓（南東から）

III. 埋蔵文化財講演会の記録

織田信長の尾張統一と岩倉城

小和田　哲男氏（静岡大学教授）

はじめに

ただいま御紹介いただきました、小和田です。

今年西暦2000年は、ちょうど関ヶ原の戦いから400年ということで、ＮＨＫが大河ドラマで今年は「葵 - 徳川三代」として戦国時代を扱っております。この１月のオープニングが関ヶ原ということで、関ヶ原の戦いそのものからスタートしましたから、むしろ戦国時代というよりかは戦国時代が大体終わって近世に入った、そういう段階のお話ということになっているかと思います。

今年の大河ドラマの原作兼シナリオライターは、ジェームス三木さんですが、個人的にジェームス三木さんとはお会いする機会があって、今年のシナリオを書くもっと前の段階だったんですけれども、お会いした時に、「先生、家康の癖って何ですか？」っていきなり聞かれまして、「いや、私も家康には会ったこともありませんし、話をしたこともないので」とちょっと言葉を濁したんですが、その時にふと思いつきまして、「ああそうそう、爪を噛む癖がありますねえ」と言ったんですね。そうしたら一生懸命手帳か何かにメモしてました。そして今年のドラマを見て「ああ、あれか」ってわかったんですけれども、私は”爪を噛む”とまでしか言わなかったのに、ジェームス三木さんは”家康が爪を噛み切る”という様な癖に、拡大解釈しているんですね。「ああ作家というのはこういうふうにして、得た情報をいろいろふくらませるんだな」とあらためて驚いた次第です。

これにはちょっと話がついておりまして、その噛み切った爪を家康が”ぺっ”て鼻紙か何かに出しますね。そのシーンがどうも見苦しいとＮＨＫに相当投書やら抗議の電話があったようでした。ちょうど皆さん晩ごはんを食べながら見ている時が多くて、晩ごはん時に”ぺっ”てやるのはやめてくれという抗議が多かったようです



講演の様子

が、それを聞いた家康役の津川雅彦さんが一言「俺が迫真の演技をやっている時にメシなど食うな」と言ったという話が伝わってきております。そのように今年の大河ドラマは関ヶ原から始まる徳川家康の晩年と、秀忠、家光三代ということなんです。

４年前になりますか、1996年の大河ドラマの「秀吉」の時に私、時代考証をやりました。その時の時代考証の場で、”秀吉が、清須城の石垣が崩れ、それを大慌てで直す”という有名なシーンがございまして、”百間を十間ずつ十組に分けた”という有名なエピソードですね。それを番組にしたいという話があった時に、「ちょっと待ってくれ、清須城は今まで何箇所も発掘をしているけれども”石垣”は一箇所も見つかっていない。たぶん信長時代の清須城には”石垣”はなかったはずだから、ここは”石垣”ではなく、”土塀”あるいは”土塁”が崩れたというような設定にしてくれないか」という注文をつけたんですが、ディレクター達が「どうも”土塁”だとか”土塀”では崩れてそれを直すといっても迫力がない。やはり”石垣”を積んでいくというのが絵になる。だから”石垣”にしたい」と言います。時代考証というのは、結構そういうせめぎあいなんですね。ある程度作家あるいはディレクター達が要求するものと、それがどこまで史実として許されるか、というちょうど折り合いをどこで付けるかという仕事が多かったわけです。その時ディレクター達はここは何とか”石垣”でやりたいということを主張するものですから、私も何箇所かで自分の主張をそれまで通していたので、ここらで一つ折れてもいいかな、という思いで、私なりの論理は、確かに清須城は沢山発掘調査をしているとは言っても全面積からすると、何千分の一か何万分の一にしかすぎない。将来的に”石垣”がもしかしたら出てくるかもしれない、だからまあ”石垣”でいきましょうか、ということでゴーサインを出したんです。

先程図書館の２階で今回の埋蔵文化財展を見させていただきましたが、清須城の”石垣”の写真が出ておりました。「あ、やっぱり清須城に”石垣”があったんだ」という思いでそれを見ました。「あんまり無理押ししないでよかったなあ」ということを思ったんですが、ただその”石垣”もはたして信長時代の”石垣”なのか、もう少し後のつまり織田信雄の時代の”石垣”なのか、そのへんは今後検討がされていくのではないかというふうに

思います。研究というものは、何が出たからといってすぐああそうだ、ということにはなかなかならない。やはりそれなりの研究と検討を経ることが必要だと思うんです。

いずれにしても、我々といいましょうか私、主に文献の方からやっている人間としますと、最近の考古学的な成果、特に今回展示されております岩倉城・清須城・那古野城この３つの信長関連の城の発掘成果というのは、私の信長論を語るについては非常に勉強になっているところで、今回の埋蔵文化財の展示は、おそらく発掘成成果全体から見れば何分の一、何十分の、あるいは何百分の一の成果かもしれませんが、すごい勉強になったという気がしております。もしこの会場の方でまだその文化財展の方をご覧になっていない方いらっしゃいましたら、帰りがけにちょっと寄って見ていただくといいのではないかと思います。

その文化財展とのからみで今回は「織田信長の尾張統一と岩倉城」というテーマをかかげさせていただきました。手元に皆さんお持ちだと思います。私の簡単なレジュメと資料、後ろの方には松原さん・金子さんの了承を得た資料も入れてございますので、それらをご覧いただきながら、話の方は聞いていただけたらと思います。

１、信長誕生頃の尾張国

守護斯波氏と二人の守護代

それではまず「信長誕生頃の尾張国」ということでお話をしていきたいと思います。第一表に「織田氏と尾張関係年表」というのがございますが、「信長」が生まれたのはちょうどその年表の真ん中あたりですね。天文三年（1534）ということですので、いってみれば 1500 年代前半あたりのところから話の方は入っていきたいと思います。

資料には「守護斯波氏と二人の守護代」という書き方をしておきました。室町時代には、各国に守護が置かれるわけですが、その守護は必ずしも一国だけを管轄するということではなかったのです。今日の話の「斯波氏」というのは、越前（福井県）・尾張（愛知県西部）・遠江（静岡県西部）の三カ国の守護を兼ねていたのです。そういった意味では、この時代の守護としては比較的力の大きな守護であったのです。その守護が、ある程度自分の地域支配といいますか、その国に住んでいる武士達との関係で領主的な働きをするようになりますと、俗に”守護大名”という言い方をいたします。ですから、室町時代の半ば頃から守護大名と呼んでもいいわけです。その守護大名が斯波氏だったわけですが、それぞれの国に”守護代”というのを置くのです。その守護代は、普通なら一国に一人というのが大体きまりみたいな形になっているんですが、尾張みたいに、郡が八つもあるような大国の場合には、二人の守護代ということもあったわけで、まさに尾張はそういうことになります。

そもそも、今日お話しいたします「織田氏」を、我々は普通”おだ”というふうに濁って発音してしまうんですが、もしかしたら、というか本来これは”おた”氏ではないのかなというふうに考えているわけなんです。私は NHK の大河ドラマ「秀吉」の時代考証の時に、普通は「”あさい（浅井）”氏」と言っているのを、地元では”あざい”と発音しているから、”あざい”というふうにセリフを言ってもらうようにしました。その言い方でいきますと、どうも本来”おだ”は”おた”ではないのかなと思います。あまり”おた”なんて言っちゃうと、「なんだお前おたおたすんな」としかられそうなので、今のところは”おだ”というふうに普通に濁って発音しておりますが、越前の国、かつては織田庄、今の町名も織田町（おたちょう）というのがございます。そこがそもそも「織田氏」の発祥地ですから、その発祥地の発音を正式の発音というふうに考えていけば、やっぱりこれも、”おた”になると思います。

守護代織田氏のルーツと系譜

その越前出身の「織田氏」が何故この尾張に関係をもったのか、ということは、先程お話しました通り、越前・尾張・遠江という三か国の守護を兼ねていた「斯波氏」の存在と密接に関係するわけです。本来といいましょうか、最初の頃尾張の守護代は「甲斐（かい）氏」でした。甲斐の国（山梨県）の甲斐です。越前守護代の「甲斐氏」が尾張の守護代も兼ねていたんですが、応永九・十年頃（1402 ないし 1403 頃）に「織田常松（じょうしょう）」、第一図の系図「推定織田氏略系図」の一番上に”つねまつ”と書いて”じょうしょう”と読む人物がでてきます。これは何故”じょうしょう”と読むかといいますと、出家してからの法名なんです。ですからこの「常松」という人が、出家前に何という名乗りをしていたか、

ということは残念ながら明らかではないわけです。ちなみにこの「織田常松」が越前の守護代になったのが、年表の 1400 年のところですね。「応永七年頃に斯波氏が尾張守護となる。守護代は織田氏」ということで、守護代「織田氏」がたぶんその頃から尾張に移ってきているのではないかと思います。応永七年頃と考えられているのは、少なくともその三年後、応永十年（1403）の八月九日付けで、守護の「斯波義重」という人が山城（現在の京都府）の醍醐寺、秀吉が最後の花見”醍醐の花見”をやったその場所ですけれども、醍醐寺三宝院領の尾張国の国衙正税を厳密に沙汰すべき旨の文書をその「常松」という人に送っている、ということが史料的に明らかになるわけです。ところが、残念ながらこの「織田常松」という人物がなかなか文献の上ではわかってこないのです。別の史料には、「織田伊勢入道」というふうに見えてきますので、「伊勢守」を名乗っていた、これは確実です。そして入道して、つまり出家して「常松」と名乗った、そこまでは明らかなんですね。ですから、それ以上のことがなかなか明らかになってきません。ちょうどこの頃「常松」、今そこには”つねまつ”と書いて”じょうしょう”と読ませていますけれども、”つねにかつ”「常勝」という名乗りをする人が出て来ているんですね。あるいは、”つねにまさ”「常昌」という字を書く、それも音読みすれば”じょうしょう”ですから、どうもそれらと同一人であるという考え方が出てくる訳ですが、とにかく応永十年頃に活躍していたのは「常松」だということになります。その「常松」が、少なくとも正長元年（1428）の記録を最後に名前が出て来なくなりますので、たぶんその頃に亡くなっているのではないかと思います。

当時「斯波氏」など守護というのは、京都に住んでいるというのが一般的です。現地には守護代を派遣し、その守護代が現地支配を行うという形になりますから、これが後に戦国大名が生まれてくる一つの大きな要因になります。どういうことかといいますと、守護ないしは守護大名本人は、京都に住んでいますから、在地つまり尾張の人達からはやや距離がある。それは単に実際の距離というだけではなくて心の距離もある。つまり、守護代が尾張にいる訳ですから、尾張に住んでいる武士達と守護代との関係というのは、比較的密接になっていく訳です。それが京都に住んでいるとその密接の度合いは低い、ということで、結構後の戦国大名は、守護代からのし上がっていった人達が多いのです。これは、もう亡くなられましたけれども、昔東京大学の史料編纂所におりました杉山博という有名な先生が、非常にうまい言い方でこのあたりを表現しています。「守護大名はヴェールの彼方から在地を見ていた。守護代は実際に自分達が在地を治めていた」つまり、ヴェールの彼方から見ているのと、実際に国の人と接触をしている人との違いですね。ですからそんなところから、守護代クラスから戦国大名化していく人が沢山出てくる訳です。出雲の守護代だった「尼子氏」が守護大名の「京極氏」を越していく。あるいは、越後国の守護代「長尾氏」が守護大名の「上杉氏」を凌駕していく。そういったのもみんな、やはり彼らが在地に住んでいて在地の武士達と密接な関係をもっていたからという形になるというふうに思います。

その守護代が、『張州府志』という史料によりますと、「織田常松」の居城が春日井郡にあったということなんですけれども、その「常松」の方も比較的京都で生活することが多くなった関係で、その守護代のさらに下に、又守護代が下津城に在城していたという記述が出てまいります。その下津城というのは、岩倉城のやや西南、岩倉と清洲の間よりやや岩倉城に近い所に下津（稲沢市下津町）という所がございまして、そこに本拠を置いていたということになります。さてそこで、この守護代が尾張国は、先程言いましたように郡が八つもあるものですから、一人ではなかなか治めづらいということになりまして、結局二人置くことになります。その二人の守護代のうち一人が最初下津、その後岩倉に移ってくる訳です。これが、系図で見ていただきますと、「常松」それから「教長・淳広」というふうに世襲していったと考えられるわけです。「淳広」の後がちょっとわからなくなり、むしろ「教長」の兄弟の系統が続き、名前がわからない人物が何人かいて、「郷広」と言われる人が出てくるわけです。この「郷広」が守護代として名前が出てくるのが、西暦で言いますと 1451 年頃なんです。ちょうどその頃、守護「斯波氏」の当主は、「義郷」という字を名乗っています。その「義郷」の「郷」、その一字をもらって「郷広」と名乗っていることが明らかです。これは「偏諱（へんき）を賜る」という言い方をするんですけれども、自分の主人の名乗りの下の字を一字をもらっているのです。ですからこの「郷広」は、守護の「義郷」の時代の人だと言っていいだろうと思います。名乗りの一字をもらえるとい

うのは、重臣の証明なんです。めったなことでは殿様から名乗りの一字はもらえません。ですからこの時期、尾張の守護代の「織田氏」というのはやはり尾張においてはNo.1の存在であったということが言えると思います。そうした「常松」の直系が「岩倉織田氏」ですから、代々「岩倉織田氏」が受領名「伊勢守」を名乗るというのは、その「常松」が先程言いましたように、「織田伊勢入道」すなわち「織田伊勢守」を名乗っていた、ということですから、これは岩倉の方は自慢していいと思います。”清須よりおれんちの方が本家だよ”と。岩倉の方が本家なんです。ですから、「岩倉織田氏」というのはそういった意味では「常松」直系、「伊勢守」をそのまま名乗っているということは、清須の方が自分達より下であるという認識をもっていたと思われます。ですからそういうことで、この常松の跡を継いでいった「伊勢守」を代々名乗るような人達が「岩倉の織田氏」というものを形作っていくわけです。

さて、今度は第二図をご覧いただきたいんですけれども、そこに尾張国、黒い線で途中線を引いてありますが、中島郡・葉栗郡・丹羽郡・春日井郡の上四郡の守護代が「岩倉城織田氏」で、下の、普通に下四郡という言い方をする時には、知多郡の方まで含めますが、この頃まだ「織田氏」の力は知多郡の末端の方までいっていないと思います。いずれにしても、下四郡は、海東・海西・愛知・知多ということになりまして、その守護代が「清須城織田氏」ということになります。その「清須織田氏」の系譜がこれまた実はよくわからない。何人かの研究者の案を系図に書いておきましたが、新井喜久夫さん、松原信之さんあたりもはっきりこうだ、という形での系譜を図示するという段階までは至っておりません。第一図にあるように”…”でつないで、”？”がいくつかある、というのが研究の現況を表していると思います。いずれにしてもたぶん「常松」の息子達のうちの一人が、「清須織田氏」の先祖になるのであろうと、そこでは「久長」というあたりから名前が特定されてまいりますけれども、「久長・敏定」というような形できます。これが代々受領名「大和守」と名乗りますので、「大和守系織田氏」あるいは「清須織田氏」というような言い方になります。

余談ですが、その「伊勢守」とか「大和守」とかいう言い方なんですが、中には誤解されている方が多くて、「尾張の織田氏が何故伊勢守と名乗って伊勢の支配にあたっているんだ？」と疑問に思われる方もいるかもしれません。この「伊勢守」とか「大和守」というのは実際にその国とは関係ありませんで、これは「徳川家康」の重臣達の中にも、有名な「本多佐渡守正信」なんていう人がいます。彼は佐渡には一度も行ったことがありませんが、「佐渡守」を称しております。それは朝廷の官職の中の表に出てくる、いわゆる”官職相当表”というのがあるんですが、例えば「従五位下」とかいう位が授けられると、それに相当する、つまり国のランクによってそれに該当する国の受領名をもらう、という形です。あくまで「伊勢国」とか「大和国」とかとは直接は関係ありません。その辺ちょっと誤解なきようにお願いしたいと思います。

上四郡・下四郡守護代が、「大和守系」これが「清須織田氏」、「伊勢守系」これが「岩倉織田氏」ということで二家に分かれたのは、ちょうどそういう時期になろうかと思います。そうした段階をずっとを見ていきますと、名乗りからある程度の時代がわかってくるわけです。例えば、系図に「敏広」というのが「郷広」の子供に出てまいりますけれども、これは守護の「斯波義敏」という人の偏諱を与えられたということで、そういうことから時代が出てくるわけです。一説にはこの「敏広」の時に下津城から城を岩倉に移したのではないかと言われています。第一表の年表をご覧いただきますと、文明八年（1476）に下津から清須に守護所が移りまして、その後文明十一年（1479）の段階までに岩倉城が築かれる、ということで、時期的にはたぶんその辺りということになろうかと思われます。その年表をご覧いただきますと、応仁元年が1467年で、文明十一年が1479年で、ちょうどその間ですね。応仁・文明の乱は、文明九年（1477）に一応終わっておりますが、応仁・文明の乱のまさに真っ只中というのがこの頃の状況ということになるかと思います。

そんなわけで、守護代「織田氏」というのがそんな形で発展をしていき、そのルーツは、先程申しましたように、越前の「織田氏（おたし）」でした。それは越前においてはそもそもは「藤原」を名乗っています。それが後に「信長」の時に、ご存知の方多いかと思いますけれども、「平」つまり「平氏」に乗り換えているわけですね。これは当時の”源平交替思想”といいまして、源氏と平氏が交替で政権をとるという言い方がございます。これ

は歴史的にたどると明らかなのですが、「平清盛」が太政大臣として政権を武士として初めて握りました。その「平氏」を倒して「源頼朝」が鎌倉に幕府を開きました。その源氏は三代、つまり「頼朝 - 頼家 - 実朝」三代で滅びまして、実権を握ったのが執権の「北条氏」、この執権の「北条氏」は本姓「平氏」なんですね。その「平氏」である「北条氏」を倒したのが「源氏」である「足利」で、平氏 - 源氏 - 平氏 - 源氏ときましたから、その次は「平氏」だということで、「信長」はどうも「藤原」では天下をとれないそうもないので、ということで急遽「平」という系図を作りまして、「平氏」になるというのが筋道なんです。ちょっと話がはずれますのでその辺りは省略させていただきます。

2、岩倉城主伊勢守系織田氏

下津城から岩倉城へ

さて、先程年表で、文明十一年（1479）のことが出ておりました。この頃までに岩倉城が築かれるということなんです。これは先程ちょっと名前を出しました『張州府志』あるいは『尾張志』など、つまり江戸時代に書かれました地誌、そういったものに出てくるわけです。清須織田氏に「敏定」という者がおります。推定織田氏略系図の、大和守系織田氏のところに出てまいりますが、その「敏定」と当時下津におりました「敏広」とが争っておりました。それがようやく和議が成立したのが1479 年だと一般的に言われていますので、たぶんその頃ではないかと思います。

岩倉織田氏の歴代

その系図をご覧いただきますと、「敏広 - 寛広（とうひろ）- 広高…信安」で、その「広高」と「信安」の間がちょっと…になっています。これは実際問題としては、一代か二代間に入るのではないかなという感じがするわけですが、これも系図上はなかなかよくわかりません。「織田氏の系図はないのか？」と言われるかもしれませんが、これはあるんです。江戸時代に作られました「織田氏系図」は沢山あります。しかし、その「織田氏系図」は実は信用出来ないんですね。何故かと言いますと、「織田信長」の家をもう最初からそれが直系だよ、という形で書いているからなんです。実はそれはウソなんです。先程言いましたように、”平清盛の子供の重盛、重盛の子供の資盛、その資盛に側室がいて、そのお腹の中に赤ちゃんが出来ていて、それが織田家の先祖だよ”というのは、あり得ない話であって、これはまあ、「信長」が自分の先祖を「平氏」に結びつけるにあたって作りあげた系図ですから、その系図をまともにこの頃の系図として信用することは出来ないのです。実際にこの頃の尾張関係の古文書に名前が出てくる名前と江戸時代に作られた「織田氏」の系図の名前とはほとんど一致してこない、ということからも明らかです。この点は、やっぱり丹念に尾張に残っている古文書から大体年代とかあるいは名乗りだとかから推定して、いろいろと系図を研究していくしかないんではないかと考えているところです。

そんなことがあった後、また年表を見ていただきたいのですが、長享二年（1488）に、”織田敏定、岩倉城を落城させる”というふうに出てまいります。つまり「敏定」の頃ちょうど岩倉城では幼少の「千代夜叉丸」という人がおりまして、これは「敏広」の子供の「寛広」、ひろひろと読む人がいるんですが、これは”とう”とも読みますのでたぶん”とうひろ”と読んだんだろうと思いますが、その「千代夜叉丸」がまだ幼かったので、その「寛広（千代夜叉丸）」が跡を嗣いだいわば本家である「伊勢守系岩倉織田氏」が、弱体だというふうに見てとって「敏定」が軍勢を送って岩倉城を焼いたということです。お隣の展示に、岩倉城は二度兵火にあったといいますか、要するに二度焼けている、ということが発掘調査の二層の焼土層で明らかになったとありました。その下の方の焼土層が、長享二年（1488）の時の織田同族の争いで、後でお話します信長との争いも同族との争いですから、二度とも同族争いということにはなるわけですが、この時は「清須織田氏」によって「岩倉織田氏」が攻められた時のもの、ということになります。

3、発掘調査によってわかってきた岩倉城

五条川を堀とする

さて先程冒頭の埋蔵文化財センターのご挨拶で、県道の工事のために昭和 60 年から平成３年まで岩倉城の発掘調査が行われたというお話がございました。その結果、今日展示されております沢山の遺物、それだけではありませんで、遺構という言い方をいたしますが、要するに堀の跡とかそういったものが明らかになってきたということになります。岩倉城の大体の概略は、第三図・第四

図をご覧いただきたいと思います。まず第四図の方を先にご覧いただいた方がいいかと思いますが、五条川をはさんだ形の図が載っておりまして、五条川の西岸に”字城跡”・”字丸の内”・”字居屋敷”、それから上の方に”字下市場”といった、要するに城と城下町とおぼしき地名が”字”として残っています。実際に”字城跡”という所には城跡の遺構が一部あって、昔からそこが岩倉城の跡だということで、石碑も建てられています。その主要部分が道路になるということで、急遽発掘調査が行われたということになるわけですが、その発掘調査の結果に基づいて、金子さんが「戦国城下町岩倉の復元的考察」ということで『愛知県埋蔵文化財センター年報』の平成元年度版に、見事な推定復元図を作成されましたので、今回もそれを第三図として利用させていただきながらお話の方を進めさせてもらおうと思います。

要するに道路を作るということで発掘を行ったその部分だけしか実際には遺構は出ていないわけでして、あとの部分は第四図の地籍図に描かれている土地の一辺一辺の地目とか、道路の状態だとか、そういったもの等を勘案していきまして、五条川のまさに川を堀にした、館をちょっと大きくしたような城の姿が出て来たという形になります。ですから、この岩倉城というのは、例えば小牧山とか犬山城とかそういった所とは違って、全くの平地に築かれた城であるということが特徴になりますし、五条川を自然の堀、天然の堀として使っていたということもわかってまいりました。中に内堀と言ったらいいんでしょうか、中堀と言ったらいいんでしょうか、堀があって、少なくとも二重の堀に囲まれているという形になっている。その中にさらに区画を設けているような、そんな形が出てまいりました。おそらくこの形に近いものが岩倉城、往時の岩倉城としてあったのではないかというふうに思います。江戸時代になってからは、一番の中心部分を「本丸」という言い方をいたしますが、戦国時代まではまだ「本丸」とは言っておりませんで、「本曲輪」とかあるいは「一の曲輪」そんな言い方になっていたと思われます。注目されるのは、第三図の復元図で、南の方のやや五条川べりに近い所がちょっとゆがんだ形になっています。これが、城への入口ですね。「本曲輪」への入口。これは一般的には「こぐち（虎口）」という言い方をいたしします。”小さな口”という字ではなくて、”虎の口”と書きます。なぜ、お城に限って「こぐち」という時に”虎の口”と書くのかと言いますと、やっぱり”虎のキバ”によって城全体を守るのだ、というようなそんな意識をこめているのではないかなという感じがしています。その「虎口」を見てもどうやら南側が「大手」、北側が「搦手」であるということが言えるだろうと思います。

それからもう一点、この岩倉城を見ていきますと、やっぱり川、五条川というのが非常に大きな意味をもっていたなという感じがいたします。それは五条川の川の水を自然の堀にした、ということが一つなんですが、同時にもう一つ、その五条川が当時の水上交通のいわば重要な担い手であった、要するに、河川交通というか、水運というふうに一般的には言っておりますけれども、そういう水運というものをベースに考えていたお城だということがわかってまいります。ですから、単に陸上交通の観点からここを選んだのではなくて、やはり五条川という川の水を水上交通として使うんだという意識を築いた時から築城者は意識していた、ということがうかがわれるのではないかなと思います。

城下町の展開

さてそして城下町なんですが、私レジュメにも「城下町の展開」ということで”城下町”という言い方をしてしまいましたが、これははっきり言ってまだ”城下町”とまで言いうるかどうかというのはちょっと微妙です。江戸時代みたいなそれこそ商人・職人、あるいは武士が集まっているような”城下町”ではない。その辺りのことをちょっと念頭に置いていただきたいと思います。と言いますのは、近世城下町というのは、武士団が全部集まってきている、つまり家臣団が集住している。そして主な商人や職人達もそこに店を構えている、という人がいっぱい集まるという形で”城下町”が成り立っていたわけですが、室町時代から戦国時代にかけてのいわゆる”城下町”というのはむしろ”城下集落”と言った方が本当は正しいのかなとも思います。ここでは”城下町”というふうに書いてしまったのですが、意識としては”城下集落”と理解しておいた方がいいと思います。と言いますのは、確かに商人や職人たちは集まって来ています。町名と言いましょうか、字名でも”下市場”とか”下本町”という形でありますので、市場がたち、そしてそこに物を買う人、物を売る人が集まっていたということは確か

ですから、”町”になっていたことは明らかだと思います。けれど武士達は、家臣が全員この岩倉城下に集まっていたわけではないんです。要するに、これは江戸時代になってから、つまり兵農分離が完全に進んでからは、武士達もみんな城下町で生活をいたしますが、それ以前、特にこの岩倉城の頃には、そういう家臣達は、みんな自分達のもともとから住んでいるところにいて、いざ合戦というような時になってこの城に集まってくるという形をとりますので、武士達はほとんど集まっていないのです。若干の重臣クラスが城下町に屋敷をもらっていた、という程度ではなかったかというふうにみております。ただやはり尾張国の守護代の守護所ということで、中枢部を担っている、もちろん守護本人は清須城の方にこの後住みますのでそっちが尾張の政治経済上の中心ではあった訳ですが、この岩倉の方も経済的な、商品流通的な点では中心になっていたということは間違いないところではないかと思います。

４、織田信秀・信長の台頭

信秀は清須三奉行の一人

さて次に「織田信秀・信長の台頭」というところへ話を移していきたいと思います。ご存知の方も多いと思いますけれども、信長のお父さん「信秀」というのは”勝幡城”におりました。先程の第二図をご覧いただきたいと思います。海西郡と中島郡のちょうど間に”勝幡城”というのがございます。”しょうばた”と書いて”しょばた”と読みます。その南に津島と書いてございますが、現在の津島市で、そこに津島社という大きな神社がございます。そこの門前町であると同時に、やはりそのすぐそばを木曽川が流れておりますので、木曽川の港町的な側面もございます。つまり、勝幡城主「織田信秀」は、この津島の港を支配していた。これが彼の財政基盤を作ったという形になります。よく「信長」が、有名な”楽市・楽座”あるいは”関所撤廃”といったことを積極的に行ったというので、商品流通経済のいわば先鞭をつけた、という言い方をいたしますが、実は、お父さんの「信秀」がもうすでにそういう商品流通経済に目をつけていた、あるいは商品流通経済に目をつけていたために財力を得ていたのです。ですから私は、「織田信秀」の家が、つまり信長の家が台頭してくる一つの大きなきっかけは、この津島港をドル箱にしていたからだというふうに理解しています。

その「信秀」が、「清須織田氏」の三家老あるいは三奉行の一人だったということは昔からよく言われている事柄なんですが、第一図の略系図をご覧いただきますと、どうやら「清須織田氏」からの分かれであるということは間違いないようです。いつの世代に、誰の時に分かれたのかということについては、やはりまだ研究がそこまで進んでおりません。少なくとも今までのところ「信長」のお父さんが「信秀」、そのお父さんが「信定」、そのお父さんが「良信」という、「信長」の４代前まではたどることが出来ます。それ以前というのはまだはっきりはしていないということが言えますが、「清須織田氏」の三奉行という位置づけだったというところに注目していただきます。

先程冒頭の挨拶で市長さんがおっしゃいました、普通には「山内一豊（やまのうちかずとよ）」と言っておりますが、何年か前に現在のご当主さんの山内（やまうち）豊秋さんにお会いしたら、最初に「”やまうち”です」っておっしゃるんです。私ちょっとびっくりいたしまして、「あれ、”やまのうち”じゃないんですか？」ってお聞きしたら、「家では”やまうち”と言っています」とおっしゃるのです。ご本人が言っているんだからそれが一番正しいのかなと思って、私それ以来”やまうちかずとよ”というふうに言い直しております。その「山内一豊」のお父さんの「盛豊」という人がこの「岩倉織田氏」の家老であったということがよく言われています。ですから、「織田信長」の家の「織田氏」と「山内家」の先祖は、そういった意味ではランクとしては一緒だったんですね。つまり、かたや「清須織田氏」の家老だった、これが「信長」の家。かたや「岩倉織田氏」の家老だった、これが「山内家」というわけですから、そのあたりから「山内家」の歴史、そういったものをたどっていくのもちょっと面白い結果が生まれてくるのではないかなという感じがしています。

いずれにしても、その家老の一人「信秀」が、津島港に出入りする船にかける税といったものによって財力を得て、やがて尾張周辺に討って出ていきます。これが”那古野城進出”、第二図の地図にもございます”那古野城”に出ていきます。そして、すぐその近くに古渡城を築きます。その古渡城に本人が移っていった時に、生まれたばかりの子供、三男である「信長」を那古野城に置いて

いったわけです。この古渡城が熱田神宮のすぐそばにあり、そしてそのすぐ近くにはかつて”熱田の港”があったんです。「信秀」という人はすごい先進的な感覚をもった人だと思いますのは、”津島港”で財力を稼ぎ、さらにもう一つの尾張の大きな港の”熱田港”を押さえてしまったことです。この二つを支配下に置いたということによって、本家である清須織田氏、あるいはまたその清須織田氏の主人である「斯波氏」、そういったものを凌駕していく経済的な裏付けというものをこの頃から形作っていったということが明らかになってくると思います。その跡を継いだのが、ご存知信長でして、信長についてはいろんなエピソード、逸話類が沢山あるわけですけれども、時間の関係もありますので信長そのものについては今回は簡単にふれさせていただきます。

信長による清須城の奪取

年表をご覧いただきますと、弘治元年（1555）の段階で、「信長」が清須城を奪取いたします。この清須城奪取の事件というのは、非常に注目される事柄なんですが、その前の年に、「信長」は家臣宛の文書で、「上総守」次いで「上総介」という形で署名をしているのです。段々その頃から武士としての自覚が高まってきまして、結局、弘治元年の四月二十日と言われていますが、清須城を奪取するということになります。この清須城には先程の「清須織田氏」がもともとおり、同時にそこに守護の「斯波義統（よしむね）」もいたわけです。ところがその「斯波義統」の子供の「義銀（よしかね）」が家臣を連れて川狩に出かけた留守をついて清須の守護館を守護代の「信友」という人が攻めてとってしまいます。それを今度「信長」が攻めるという段取りになります。結局、守護代「織田信友」という人を殺した「坂井大膳」という人を追って、清須城に入るということになり、まさに絵に描いたようなそういう二つの”下剋上”によって「信長」は清須城に入ることになります。その後若干のやりとりがございまして、自らが清須城に入るということで、清須城攻めに功労がありました自分の一族の「織田信光」という人を那古野城に移しました。その「信光」が那古野城に入った後、不審な死を遂げます。第二図の系図に、「信秀」の弟として「信光」が出てまいりますので、「信長」としてみれば、自分の叔父さんにあたります。その自分の叔父さんが手柄をたてて清須城を奪った、ということでその功績として今まで自分がいた那古野城を与えたわけですが、そのまま叔父さんが自分にいわば指図する、そういうことがどうも「信長」としては我慢できなくなった。ということで「信長」の手の者が「信光」を暗殺したのではないか、と言われています。まさに戦国時代らしい、そういう状況になりますが、その一件を次にちょっと触れておきたいと思います。

5、信長による織田一族の殺害

那古野城主織田信光の死

弘治元年（1555）の十一月二十六日、今申し上げました、「信長」の叔父さんで清須城の織田信友を攻め滅ぼすのに最大の功労者でありました「織田信光」が、その居城であります那古野城で死ぬという事件がもちあがります。各種史料はそれをただ”不慮の死”とだけ書いています。例えばあの有名な信長の一代記とも言うべき『信長公記』にも、「不慮の仕合せ出来して孫三郎殿御遷化」、御遷化というのは死んでしまった、というふうに簡単に書いてあるわけです。その『信長公記』の記述には「天道恐ろしきかな、とお申しならし候いき」などとも出てきます。要するに、「何か自分が、信光が悪いことをしたので天の罰が下ったんだ」という言い方をしていますけれども、死因については全くふれていないわけでして、私には、確かに清須城を奪う時には大いに手柄をたててもらったんだけれども、いざそれが終わってみると、段々邪魔になってきた「信光」を抹殺した、としか考えられないということになります。そうしたいかにも戦国時代らしい粗っぽさ、そういったものが引続き次の「弟信行も殺す」という一件につながってくるわけです。

弟信行も殺す

この弟「信行」の一件は、弘治三年（1557）になります。「信長」が自分が病気になったと偽って、「信行」をいわば見舞いに来させ、そして殺させる、という事件です。この弟「信行」はですね、第二図の末盛城という所の城主になっていました。「信長」と同じお母さんの生まれです。どちらかというとお母さんは弟の「信行」の方を可愛がってた。というのは、「信長」はよく言われますように”うつけ”とか”たわけ”とかですね、どうも常人というか、普通の行動をしない人だったもんですから、

これはちょっと織田家を滅ぼすのではないかという危惧から、むしろ型の如くの「信行」の方を可愛がったという経過がございます。その「信行」と最初は、お父さんの「信秀」の頃から、宿老であります「林秀貞」と「柴田勝家」の二人に助けられて、「信長」に背くということになるわけです。その最初の戦いでは結局「信長」方が勝って「信行」が負けて、いわば謝ってきます。それでお母さんも中に入ってなんとか兄弟仲良くしてくれということだったので、「信長」もその時は「信行」を殺すことはしなかったわけです。しかしその後さらにまた「信行」についていた「柴田勝家」が、弟「信行」がやはり兄「信長」に謀反の企てを持っているということを密告してきたので、だまし討ちのようにして殺してしまうということになります。これによって、「清須織田家」の分家であった「信秀」系の織田氏というのは、「信長」一本にしぼられた、という形になるわけです。実は系図には「信長」のお兄さん二人の名前もあります。一人は「信広」、もう一人は「某」と書いてあり、これは残念ながら名前すら伝わっていません。ただ史料には「安房守」、四国の阿波じゃなくて千葉の方の安房で、「織田安房守」とだけ名前出てくる人がいて、それがもう一人のお兄さんなんですが、その方はどういういきさつになっていくのかは分かりません。一番上の兄「信広」は、美濃の「斎藤義龍」と結んで、清須城の乗っ取りを謀りますが、それは失敗に終わります。結局「信長」に降ったということで、「清須城織田氏」は「信長」一本に統一されていくということになります。

6、岩倉城を落とし尾張を統一

浮野の戦い

そこで問題はいよいよ、岩倉城の織田氏が織田一門としては残っているわけで、岩倉城の戦いへとなだれ込んでいくわけですが、その具体的な動きの中で見ていきますと、「永禄元年（1558）信長岩倉城攻略を開始する」、ということで出てまいります。ちょうどこの頃から少しずつ三河まで勢力を伸ばしてきました「今川氏」の勢力が段々この尾張の方にも伸びてまいります。その永禄元年の五月二十八日と言われていますけれども、岩倉城主の「織田信安」の子供、「信賢（のぶかた）」が美濃の「斎藤義龍」と謀って「信長」に攻撃を仕掛けてくるということがございました。「信賢」とその弟に「信家」という人がおりまして、この兄弟が相争うという状態になっていました。大体どこの守護大名家、あるいは戦国大名家でも、この頃結構兄弟の争いというのは多くて、例えば有名な例でいきますと、今の「織田信長・信行」兄弟もそうですし、「伊達政宗」も弟を殺していますし、それから弟を殺さなくて失敗したというのが、例の越後の「長尾晴景」ですね。「為景」後の「上杉謙信」を小さなうちに芽を摘まなかったので、かえって自分が追放されるというようなことがありました。兄弟は、ある意味では一番のライバルであったというところがこの頃の一つの特徴なんですが、この「信賢」と「信家」の兄弟の争いのため「岩倉織田家」は、一本化して大きな力をもつという状況ではなく、その分裂につながっていくということになります。その兄弟の分裂争いというものを察知した信長が、”好機熟せり”というかんじで丹羽郡の浮野まで兵を進めて行きまして、そこで有名な「浮野の戦い」ということになるわけです。その「浮野の戦い」については、『信長公記』だとかには詳しい記述はないんですけれども、どういうわけか江戸時代になって遠山信春という人の書いた『総見記』、これは別名『織田軍記』とも言っており、その名前の通り「軍記物」ですので、どこまで信用していいかということになるといくつか問題があるわけですが、経過についてはおそらくそれが一番詳しい部類ではないかと思っております。

さてそんなわけで、今申しましたように、「信安」の跡を長男の「信賢」と次男の「信家」が争う、ということで、たぶん弘治三年（1557）か永禄元年（1558）の段階で「信賢」が家督を継ぎ、「信長」は永禄元年の五月と七月に、岩倉城を攻撃にかかるということになります。ただその段階では、「岩倉城織田氏」側もかなり堅固に防戦をいたしまして、「信長」もそれを破ることは出来ませんでした。

岩倉城の戦い

結局翌年再び、岩倉城を攻めます。まずこの時は、城下町を焼き払ったと言われています。そして、数ヶ月の籠城をしたというわけですから、「織田信賢」側もかなり善戦をしたという感じがいたします。籠城をすると負ける、という思いを皆さん多くお持ちだろうと思いますけれども、「秀吉」が天下統一に向かう頃は、籠城すると即敗北、時間はかかるけれども、籠城したら負けとい

うことになりますが、戦国時代のこの「信長」の頃というのはまだそうじゃないです。籠城して逆に勝った方が結構あるんです。それはどうしてかというと、籠城している側と、同盟者とが手を結んで、その同盟者が援軍として攻めてきます。そうすると、城の外と内とで、攻めている敵を挟み撃ちできるのです。おそらくこの時も、「織田信賢」は美濃の「斎藤」と手を結んでそういう動きをしていますから、「斎藤義龍」からの援軍を待っていたと思いますが、この時援軍は来なくて、結局は数ヶ月の籠城の後、落城ということになります。

その時の、やはり岩倉城が戦火にあったという物証が、今回の発掘でも出て来ました。その遺構は第五図、遺物は第六・七図に載っています。結構物が豊富な岩倉城だったということもわかるわけです。この戦いは「信長」側の勝利で、この岩倉城落城によって、尾張一国が統一されたという形になります。これが永禄二年（1559）なんです。その次の年永禄三年に今川義元が尾張に攻め込んでくるのですから、信長にとってみれば本当に薄氷を踏む思いだったという気がいたします。つまり、この岩倉城との戦いが翌年にまでずれこんでいれば、おそらく、今川義元が攻め込んできた。となると当然その「岩倉織田氏」は、今川と手を結ぶ危険性が出てきます。そうするとあの「織田信長」ですらその後どうなったかわからない、というわけですからたった一年前とはいいながら、今川義元が尾張に進行してくるその前に尾張一国を統一できたというところに「織田信長」の運の開き始めを見ることができるのではないかと思います。

おわりに

さて最後に、第七図をご覧いただきたいと思います。今回の岩倉城の発掘の成果で、私はいろんなことを学ばせていただきましたが、特に一番注目したのは、埋蔵文化財展に展示されております、いわゆる”呪（まじな）い”に関する部分です。第七図の 717・718 ですが、これは木簡といい、木に墨で書かれたものなんです。たぶんこういう形で地面にさしていったんだろうと思います。「急々如律令」という字が判読できると思いますが、この「急々如律令」というのは本来は「急いで急いで律令の如くせよ」という「命令をしっかり守れよ」という文句なんです。それがいつしかおまじないの文句で、一種の”逃げ言葉”として理解されるようになりました。一番上にチョン４つで、これで四隅を封ずるという意味で、その下に梵字、そしていくつか文字があって、それで「急々如律令」と出てまいります。その「急々如律令」の上に”鬼”という字が出てきますね。この”鬼”で要するに悪い鬼を退散させるという意味をもたせます。その上に”日”という字が２つあって、その下に”甲”という字が３つ並んだりしてますが、これで何らかの意味をもたせるんだろうと思います。

呪いの具体例に江戸時代の修験者達が使っていた、いわゆる”病封じ”の資料があります。そういうものにはこれは該当しませんが、その修験者達がやっていた物を見ていきますと、そこにいろんな字を書いたりして、例えば虫歯が痛い時には、その字を書いた物を歯のところに当てておくとか、あるいは目が悪い時には、どういう字を書いたお札をどうするか、とかそういう一種の”病除け・厄除け”のものでした。そういうもののお札がこういう形で出てきているというところは本当に私もびっくりいたしました。中世の城はそういう空間でもあったんだな、ということをあらためて感じました。

その右の 786・788 は、そこの展示の説明のところでも”謎の”というふうに書いてありましたように、実際にこれが何を意味しているのかということはちょっとよくわかりません。もしかしたら、いわゆる”セーマン”、最近はやりの”安倍晴明”の由来をする”五芒星”という星印をかたどっているのかなと思ったりしております。

私の著書の中にも『呪術と占星の戦国史』という本もあります。こういう呪術的な、武士達が単に合戦で力で戦ったのではなくて、神仏を味方にして戦っていくという、そういう祈りの空間が岩倉城の中にもあったんだということが見つかって、私はちょっと感激いたしました。

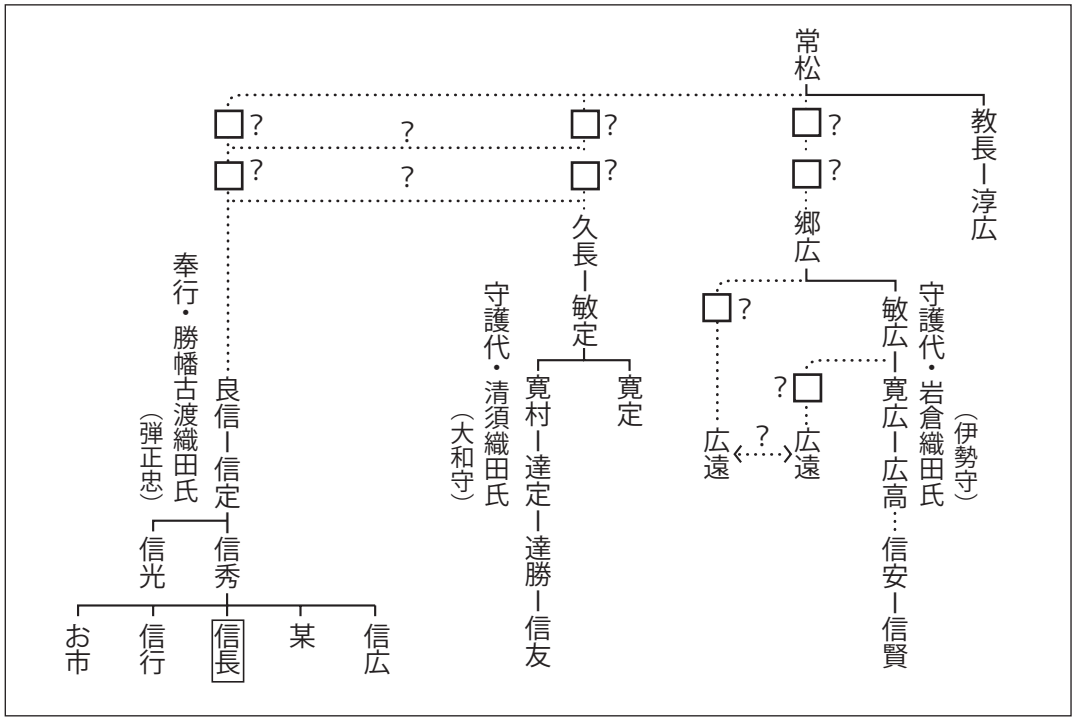
そんなことで、今日は「織田信長」による尾張統一過程、それとこの岩倉城との関わり、そのあたりを中心にお話させていただきました。ちょうど時間がまいりましたので終わらせていただきます。長時間ご静聴どうもありがとうございました。（平成 12 年８月 19 日、岩倉市公民館にて収録）



応永七年	（一四〇〇）	この頃、斯波氏、尾張守護となる。守護代は織田氏。同時期に清須城築城か？
応仁元年	（一四六七）	応仁の乱始まる。斯波氏は東・西両軍に分かれ戦う。
文明七年	（一四七五）	織田敏広と織田敏定との戦いが始まる。
文明八年	（一四七六）	守護所が下津から清須に移る。
文明十一年	（一四七九）	この頃までに、岩倉城が築かれる。
		敏定と敏広、和睦する。清須方守護代（敏定）・岩倉方守護代（敏広）による尾張の分割支配始まる。
長享二年	（一四八八）	織田敏定、岩倉城を落城させる。
大永四年	（一五二四）	この頃、今川氏那古野城を築き、一族を城主とする。
天文元年	（一五三二）	この頃、織田信秀、那古野城の今川氏を破り、勝幡から那古野に居城を移す。
天文三年	（一五三四）	信秀の子として、織田信長生まれる。幼名吉法師。
天文十七年	（一五四八）	信秀、斎藤道三と和睦する。のち道三の娘、信長に嫁す。
天文二十一年	（一五五二）	信秀、病没。信長が家督を継ぐ。
弘治元年	（一五五五）	信長、清須城を奪う。
永禄元年	（一五五八）	信長、岩倉城攻略を開始する。
永禄二年	（一五五九）	信長、岩倉城を攻略する。実質上の尾張統一の完成。
永禄三年	（一五六〇）	信長、桶狭間で今川義元を破る。
永禄四年	（一五六一）	信長、美濃に出兵する。
永禄六年	（一五六三）	信長、美濃攻略のため、清須城から小牧城に移る。
永禄十年	（一五六七）	信長、斎藤竜興を破り、井ノ口（岐阜）に本拠を移す。「天下布武」の朱印を使い始める。

岐阜　小牧　清須　那古野　信長の居城

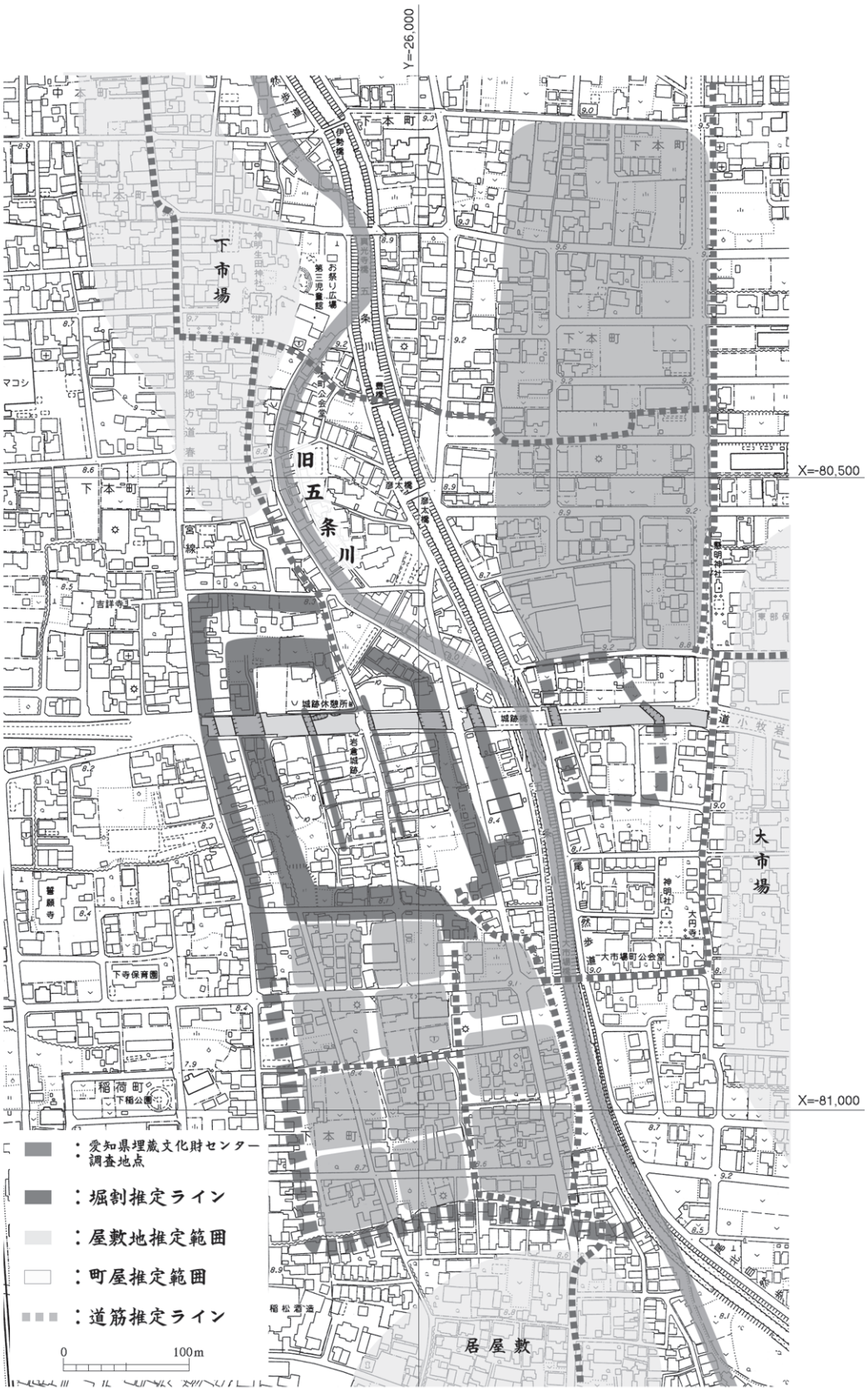
第一表　織田氏と尾張関係年表



第一図　推定織田氏略系図（新井喜久夫・松原信之両氏作成の図を参考に作図）



第二図　尾張の上四郡と下四郡および主な城。織田氏一族が対立抗争を展開。

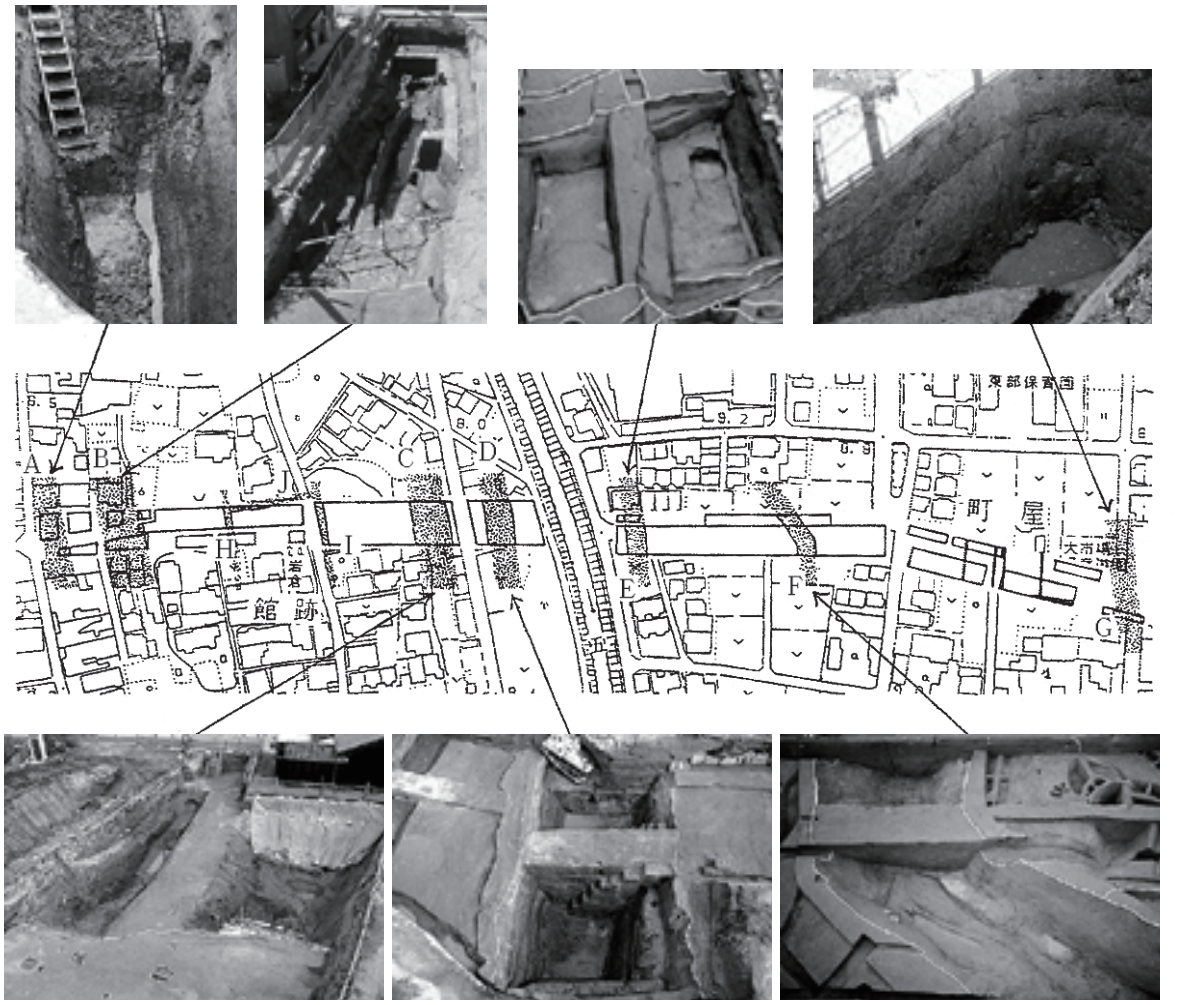


第三図　岩倉城下町復元図（金子健一「戦国城下町岩倉の復元的考察」第２図
『(財)愛知県埋蔵文化財センター　年報』平成元年度より）



第四図　岩倉城周辺地籍図（明治 21 年　1/2500）

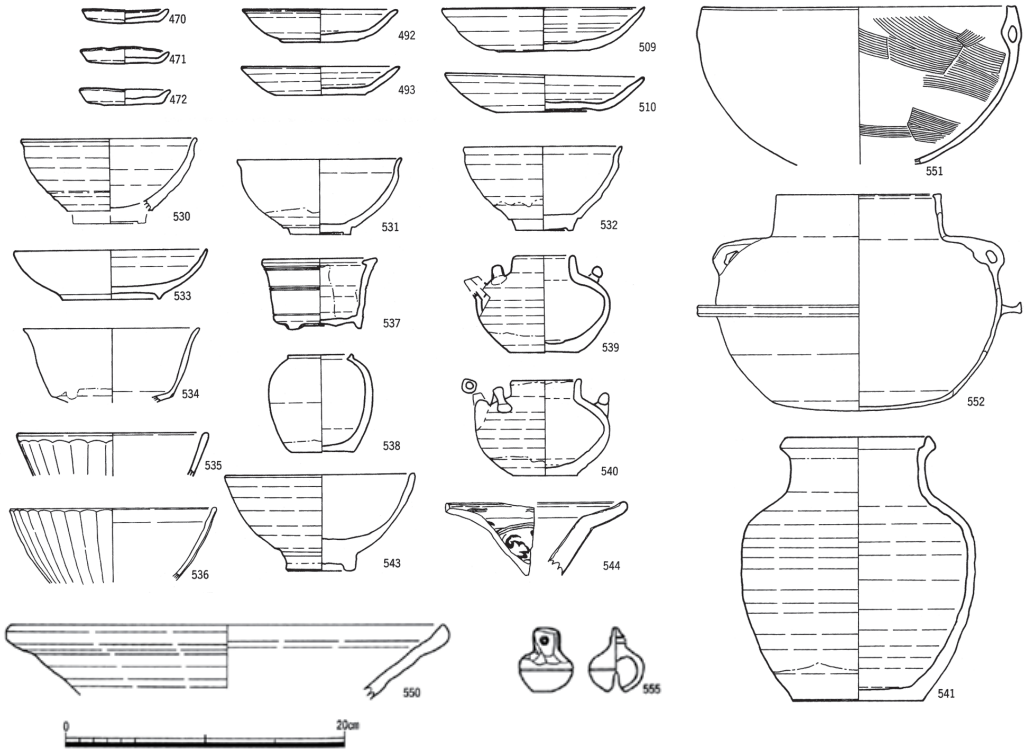
（金子健一 1990「戦国城下町岩倉の復元的考察」第 1 図に加筆）



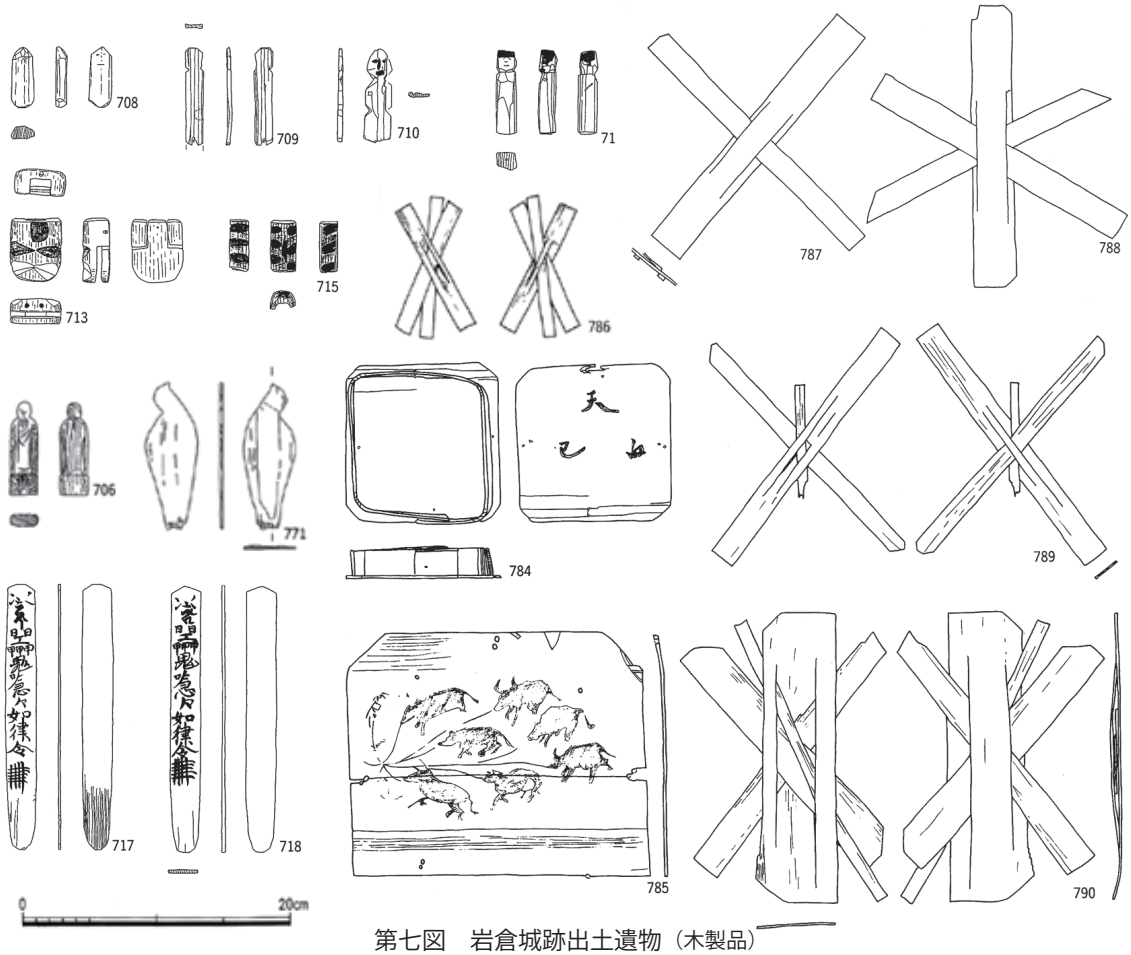
第五図　岩倉城の主な遺構（服部信博 1991 『幻の城から現実に存在した城へ』）

	規　模（m）		形　態	滞水状況	地　区	主な出土遺物
	幅	深　さ				
堀　A	10	3	箱型？	有	右　岸	陶磁器微量
B	23	4 以上	箱型？	有	右　岸	陶磁器微量
C	20	7	箱型	有	右　岸	陶磁器・土師器少量
D	12	3.5	箱型	有	右　岸	陶磁器・土師器少量
E	9	2.5	V字	無	左　岸	陶磁器微量
F	8	2.5	V字	無	左　岸	陶磁器少量
G	10	3	箱型	有	左　岸	陶磁器微量
区画溝H	6	2.5			右　岸	陶磁器・土師器・木製品多量
I	3	1.7			右　岸	陶磁器・土師器・木製品多量
J	3	1			右　岸	陶磁器・土師器・木製品多量

第二表　堀・区画溝規模一覧表（服部信博 1991）



第六図　岩倉城跡出土遺物（やきもの）



第七図　岩倉城跡出土遺物（木製品）

Ⅳ．埋蔵文化財センターの活動

蔵文化財展・埋蔵文化財講演会

埋蔵文化財展

会　場	岩倉市図書館
会　期	平成 12 年 8 月 12 日（土）～ 8 月 27 日（日） （月曜日を除く）
テーマ	「岩倉　清洲　那古野　－天下布武へのプロローグ－」
展示品	コーナー 1　岩倉市内の調査と出土遺物の展示 岩倉城遺跡・権現山遺跡 大地遺跡・西出古墳・薬師堂廃寺・御土居廃寺跡 コーナー 2　「岩倉　清洲　那古野　－天下布武へのプロローグ－」 岩倉城遺跡・清洲城下町遺跡・名古屋城三の丸遺跡 コーナー 3　「平成 11 年度愛知県埋蔵文化財センター調査遺跡」 猫島遺跡・八王子遺跡（一宮市）・朝日遺跡・川田遺跡・ 清洲城下町遺跡・鶯窯跡・八王子遺跡（瀬戸市）・牛牧遺跡・ 水入遺跡・川原遺跡・寄元古墳・西川原古墳・高坂遺跡
入場者	1,380 名
その他	入場者にパンフレット（A 4 版 8 頁）を配布 8 月 12 日（土）・8 月 26 日（土）に埋蔵文化財講座（岩倉市図書館）を開催

埋蔵文化財講演会

会　場	岩倉市公民館　講堂
開催日	8 月 19 日（土）
講　師	静岡大学教授 小和田哲男氏
演　題	織田信長の天下統一と岩倉城
入場者	270 名

発掘調査技術等研修会（Ⅰ）

9月７日（木）　於：愛知県埋蔵文化財調査センター		
講義Ⅰ	「埋蔵文化財保護の現状と課題」	愛知県埋蔵文化財調査センター　所長　加藤安信
講義Ⅱ	「文化財保護法の改正について」	愛知県教育委員会文化財保護室　教育主事　安藤義弘
講義Ⅲ	「教育委員会事務局が扱う埋蔵文化財関係書類」	愛知県教育委員会文化財保護室　教育主事　長島　広
講義Ⅳ	「発掘調査と報告書の実際」	愛知県埋蔵文化財センター　課長補佐　佐藤公保
講義Ⅴ	「出土資料の管理と活用」	愛知県埋蔵文化財調査センター　主査　高橋信明

発掘調査技術等研修会（Ⅱ）

11月22日（水）　於：愛知県埋蔵文化財調査センター		
講義	「金属製品の保存処理概論」	講師：元興寺文化財研究所　出土金属製品保存処理室 室長　渡辺智恵美
	「実態報告（アンケート結果の説明）」	
実習Ⅰ	「出土から管理まで」	
実習Ⅱ	「保存処理から展示まで」	

現　地　説　明　会　等

現地説明会

遺跡名	開催日	所在地	内容	参加者
岩崎６号窯遺跡	2000/9/2（土） 2000/9/3（日）	日進市北新町	奈良時代から平安時代の土器生産に関わっていた集落跡。ロクロピットなどの遺構解説と窯道具、須恵器、灰釉陶器など資料を展示。	350名/200名
烏帽子遺跡	2000/9/3（日）	東海市 高横須賀町	弥生時代前期の土坑墓、弥生時代後期～古墳時代初頭の埋葬施設などの遺構解説と、ガラス製勾玉、小玉、緑色凝灰岩製管玉などの遺物展示	500名
石堂野Ｂ遺跡	2000/9/24（日）	宝飯郡御津町	古墳時代から古代の集落跡。竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝など。古式土師器や須恵器円面硯、緑釉陶器など資料を展示。	200名
今町遺跡	2000/10/14（土）	豊田市今町	確認された40棟以上もの古代の竪穴住居や、鎌倉時代、戦国時代の掘立柱建物跡、屋敷地区画溝などの遺構の解説と出土遺物の展示。	238名
木戸城跡	2000/11/25（土）	安城市木戸町	15世紀代にかけて存続した城館の土塁や掘立柱建物跡のほか、飛鳥～奈良時代の竪穴住居などの解説と出土遺物の展示。	450名
下懸遺跡	2001/3/10（土）	安城市小川町	古墳時代初頭の竪穴住居と谷状地形の解説と、出土土器およびここで加工されていた木製品等の展示。	450名
古新田遺跡	2001/3/17（土）	西尾市 志貴野町	飛鳥時代のカマド跡、貯蔵穴をもつ竪穴住居跡等の解説と古代の布目瓦を含む出土遺物の展示。	200名

地元見学会

遺跡名	開催日	所在地	参加者	
寄元３号墳	2000/5/14	豊田市加納町	30名	地元説明会
八王子遺跡	2000/7/23	瀬戸市八王子町	100名	地元説明会
上中・西屋敷遺跡	2000/11/12	稲沢市北島町	30名	地元説明会
上品野蟹川遺跡	2000.11.27	瀬戸市上品野町	40名	瀬戸市立品野台小学校・掛川小学校6年生
上品野蟹川遺跡	2000/11/29	瀬戸市上品野町	100名	瀬戸市立品野台小学校3,4,5年生
惣作・鐘場遺跡	2001/3/6（火）	瀬戸市惣作町	130名	瀬戸市立東明小学校3,4,6年生
上中・西屋敷遺跡	2000/8/23	稲沢市北島町	7名	県立五条高等学校
烏帽子遺跡	2000/5/10	東海市高横須賀町	78名	知多郡東浦町立緒川小学校

施設見学

埋蔵文化財センター	2000/6/14	海部郡弥富町	25名	尾張地区高等学校社会科教員尾張地区社会科教育研究会歴史部会
埋蔵文化財センター	2000/8/7（月）	海部郡弥富町	3名	県立岡崎高等学校
埋蔵文化財センター	2000/11/6	海部郡弥富町	25名	山梨県文化財研究所
埋蔵文化財センター	2001/2/8（木）	海部郡弥富町	35名	弥富町立南部保育所
埋蔵文化財センター	2001/3/2（金）	海部郡弥富町	28名	弥富町立桜町小学校歴史郷土研究クラブ

資料の貸出・提供

写真資料

貸出先	目　的	貸出・提供資料			期間
滋賀県立安土城考古博物館	特別展「楽浪海中に倭人有り」の図録等に掲載	朝日遺跡	石製武器・逆茂木・防御施設・杭列	6X7カラーポジ4点	H12.4.～12.5.17
中日新聞社出版開発局出版部	『遺跡からのメッセージ～発掘調査が語る愛知の歴史～』に掲載	上品野遺跡 朝日遺跡 麻生田大橋遺跡 他	発掘調査風景・現地説明会風景・出土遺物	計71点	H12.4.～12.9.
半田市立博物館	特別展「愛知の中世墓」図録等に掲載	阿弥陀寺遺跡	検出状況(SZ1001)・全景	6X7モノクロネガ1点 モノクロプリント1点 計2点	H12.6.1～12.8.11
愛知県津島土木事務所		清洲城下町遺跡	96年度石垣完掘状況	6X7カラーポジ1点	H12.4.20～12.5.1
仙台市富沢遺跡保存棺	特別企画展「赤彩の考古学」図録等に掲載	朝日遺跡	遠景・器台(972)出土状況	6X7カラーポジ2点	H12.5.23～12.10.3
(株)光文書院	出版物　社会科資料集6年に掲載	朝日遺跡	杭列・逆茂木	6X7カラーポジ2点	H12.5.11～12.5.25
ＪＨ名古屋建設局	「旬刊高速道路」に掲載	水入遺跡	遺物写真	35mmカラーポジ11点	H12.5.11～
(株)ジャパン通信情報センター	「文化財発掘出土情報」2000年7月号に掲載	猫島遺跡 川原遺跡 八王子遺跡	記者発表資料・ 銅鐸の舌・ 銅鐸の舌	計3点	H12.5.12
東京国立博物館　資料部	研究図録「日本の舶載陶磁」に掲載	清洲城下町遺跡 名古屋城三の丸遺跡 朝日西遺跡	朝鮮陶器碗・盤・徳利 雑釉徳利 朝鮮陶器	掲載許可のみ	H12.5.12
一宮市博物館	企画展「八王子遺跡」図録等に掲載	八王子遺跡	遺跡周辺航空写真3点・96J区全景・銅鐸出土状態・銅鐸写真・鈕摩滅状況・95Aa区環濠・95Ba区井泉写真他	35mmカラーポジ3点 6X7カラーポジ19点 デジタルデータ8点　計30点	H12.5.30～12.8.11
静岡市立登呂博物館	特別展「きょうのごはんなぁに？」図録等に掲載	朝日遺跡	ブタ下顎骨・ニワトリの骨・石鏃のささった骨・炭化米	6X7カラーポジ4点	H12.6.14～12.10.19
			貝層・ 植物種子・貝類（一括）・寄生虫卵	6X7カラーポジ1点	H12.7.～12.10.19
大阪府立弥生文化博物館	特別展「卑弥呼の音楽会－まつりのひびき」の図録等に掲載	八王子遺跡 川原遺跡 朝日遺跡	銅鐸・石製舌・銅鐸出土状況・ 石製舌・ 弓弭	6X7カラーポジ5点 35mmカラーポジ1点　計6点	H12.6.9～12.8.11
碧南海浜水族館	特別展「フグ展」図録等に掲載	一色青海遺跡	動物遺体（魚類の骨）	掲載許可のみ	H12.6.16
名古屋市博物館	小企画展「清須城と城下町」解説等に使用	清洲城下町遺跡	91A SB103北から・92B SK02遺物出土状況西より・90CD SE11断ち割り	35mmカラーポジ3点	H12.7.17～12.9.29
(株)新人物往来社	中世都市研究第7号『都市の求心力』に掲載	清洲城下町遺跡 鷺窯跡 水入遺跡	町屋跡（99A･99B全景）・ 工房跡遺物出土状況・ 土坑墓（SK20･SK328･SK241）	6X7カラーポジ7点	H12.6.20～12.9.1
(株)講談社	『日本の歴史』1巻「縄文の生活誌」に掲載	川地遺跡	首飾り	カラープリント1点	H12.7.24～12.10.30
国立歴史民俗博物館 福岡市博物館 兵庫県立歴史博物館 読売新聞社文化事業部	企画展「天下統一と城」の図録等に掲載	名古屋城三の丸遺跡 清洲城下町遺跡	90下面遺構掘削風景・91作業風景・93AB人間スケール・遺物集合写真 89B作業風景・94A根石作業風景・96作業風景	6X7カラーポジ2点 35mmカラーポジ5点 計7点	H12.8.～12.12.1
(株)京都科学	納入実績カタログに掲載	朝日遺跡	銅鐸埋納土坑複製品写真	掲載許可のみ	H12.9.14
(株)日本テレワーク	科学情報番組「おしえて！キュリー夫人」で使用	朝日遺跡	ヒスイ勾玉	使用許可のみ	H12.9.27
(株)中日本航空	遺跡分布図作成		報告書	39冊	H12.9.29～
(株)応用地質	「地球環境調査事典第9編遺跡・古環境」に掲載	海上Ｂ窯跡	発掘調査結果図・出土状況写真 磁気探査結果磁気異常分布図		H12.9.29～
(株)山川出版	『愛知県の歴史』（新版県史シリーズ23）に掲載	大毛池田遺跡 山中遺跡	95F古墳時代水田跡 90F方形周溝墓	6X7カラーポジ2点	H12.10.～12.11.1
春日井市教育委員会	企画展「弥生から古墳へ」の図録等に掲載	朝日遺跡	土器写真・遺構写真	6X7カラーポジ6点 6X7モノクロネガ3点 35mmカラーポジ2点　計11点	H12.10.13～12.11.13
西尾市教育委員会	資料館特別展「西尾の金石工芸品展」ポスターに使用	清洲城下町遺跡	狛犬写真		H12.10.23～12.10.31
安城市歴史博物館	特別展「弥生の絵画　倭人の顔」図録等に掲載	朝日遺跡	絵画土器1・線刻土器1・記号土器片5・絵画土器片4・線刻土器片1	撮影許可のみ	H12.10.24
上田市誌刊行会長	『上田市誌』歴史編第2分冊「上田の弥生古墳時代」に掲載	朝日遺跡	環濠集落想像図・骨角器･骨角製品	掲載許可のみ	H12.11.1
(株)山川出版 NHK大阪放送局　文化部	『愛知県の歴史』（新版県史シリーズ23）に掲載 国宝探訪「よみがえる青銅の響き～銅鐸～」制作	朝日遺跡 室遺跡 八王子遺跡	骨角製品 木樋 銅鐸	6X7カラーポジ2点 6X7カラーポジ1点	H12.11.13～12.12.7 H12.11.17～

貸出先	目　的	貸出・提供資料			期間
幸田町教育委員会	埋蔵文化財展「甦る原始、古代中世の幸田」の資料等に掲載	牛ノ松遺跡 東光寺遺跡	調査地域写真2点・出土状況写真6点 調査地域写真6点・出土状況写真6点	6X7カラーポジ17点 35mmカラーポジ3点　計20点	H12.11.21～ 12.12.15
朝日新聞社出版局雑誌センター	朝日グラフ別冊「古代史総まくり2000」に掲載	猫島遺跡	大型建物と方形周溝墓	6X7カラーポジ1点	H12.11.29～
大阪府立弥生文化博物館 横浜市歴史博物館 佐賀県立博物館	特別展「弥生大集落展」に展示	朝日遺跡 川原遺跡 猫島遺跡 山中遺跡	遺構写真・遺物写真 98ＢＣＤ区 大型建物と墓地・環濠 方形周溝墓	4X5カラーポジ1点 6X7カラーポジ21点 35mmカラーポジ3点 計24点	H12.12.5～ 12.12.18
(財)岐阜県文化財保護センター	「いにしえの美濃と飛騨」展示解説パネルに使用	松崎遺跡	製塩土器実測図1点 「古代の製塩」復元模型1点	掲載許可のみ	H12.12.6
ＪＨ名古屋建設局	「名古屋建設局建設誌」に掲載	水入遺跡	99B・99C作業風景及び遺物出土状況	35mmカラーポジ2点	H12.12.11～ 13.1.26
名古屋市見晴台考古資料館	特別展「はじまりのムラ」の図録等に掲載	月縄手遺跡 平手町遺跡	Ca･Cb区全景・SK116遺物出土状況 99A区SD06断面	6X7カラーポジ3点	H12.12.13～ 13.2.22
(株)表現研究所	「まんが日本史　第1巻」(旧石器～飛鳥時代)に掲載	朝日遺跡	逆茂木・杭列	6X7カラーポジ2点	H12.12.25～ 13.2.19
豊明市教育委員会	「豊明市史資料編補原始･古代･中世」に掲載	大脇城遺跡	遺構写真10点・遺物写真9点	6X7カラーポジ19点	H13.1.9～
(財)元興寺文化財研究所	(財)元興寺文化財研究所要覧に掲載	清洲城下町遺跡	曲物	掲載許可のみ	H13.1.29
東京大学出版会	『日本の地形Ｉ』総説に掲載	猫島遺跡	猫島遺跡における埋積浅谷	掲載許可のみ	H13.2.5
(株)ジャパン通信情報センター	「文化財発掘出土情報」2001年3月号「各地の動向」に掲載	石堂野遺跡	現地説明会資料・遺構写真4点	6X7モノクロプリント4点	H13.1.30～
講談社総合編纂局Ａグループ	『週刊･再現日本史』第8号「邪馬台国の女王卑弥呼」に掲載	朝日遺跡	柵列・乱杭・武器（打製石剣・石鏃・骨鏃・銅鏃）	6X7カラーポジ3点	H13.2.27～

出土遺物

貸出先	目　的	遺　物		期間
滋賀県立安土城考古博物館	特別展「楽浪海中に倭人有り」に展示	朝日遺跡	磨製石剣1点・大型有茎鏃1点・五角形鏃3点・小型五角形鏃1点・無茎鏃1点・小型無茎鏃1点　計8点	H12.4.13～ 12.6.8
仙台市富沢遺跡保存館	特別企画展「赤彩の考古学」に展示	朝日遺跡	壺1点・高杯2点・器台1点 計4点	H12.5.23～ 12.10.3
半田市博物館	特別展「愛知の中世墓」に展示	阿弥陀寺遺跡	常滑壺1点・常滑甕1点 計2点	H12.6.1～ 12.7.30
長浜文化財シンポジウム実行委員会	長浜文化財シンポジウム「近世城下町の諸相」に展示	清洲城下町遺跡	陶磁器・土師器皿 計20点	H12.7.8 12.7.9
名古屋市博物館	小企画展「清須城と城下町－織田信長の時代」に展示	清洲城下町遺跡	天目茶碗他 計39点	H12.7.17～ 12.10.16
一宮市博物館	企画展「八王子遺跡」に展示	八王子遺跡	銅鐸他 計358点	H12.7.17～ 12.9.5
鈴鹿市考古博物館	特別展「石と人のくらし」に展示	朝日遺跡	石鏃10点・磨製石斧5点・ヒスイ勾玉3点・玉砥石2点・施溝具4点・玉錐5点・下呂石原石6点　計35点	H12.9.11～ 12.11.30
国立歴史民俗博物館 福岡市博物館 兵庫県立歴史博物館 読売新聞社文化事業部	企画展「天下統一と城」に展示	清洲城下町遺跡 名古屋城三の丸遺跡	陶磁器他	H12.9.19～
静岡市立登呂博物館	特別展「きょうのごはんなぁに？」に展示	朝日遺跡	植物標本・魚介類標本・動物遺体・昆虫標本 計28点	H12.9.27～ 12.12.4
大阪府立弥生文化博物館	特別展「卑弥呼の音楽会－まつりのひびき」に展示	八王子遺跡 川原遺跡 朝日遺跡 門間沼遺跡	紐擦れのある銅鐸・石製舌・ 琴2点・石製舌・ 弓弭1点・ 琴　計7点	H12.9.29～ 12.12.15
明治大学考古学博物館参考展示場	特別展「壺から埴輪へ」に展示	廻間遺跡 西上免遺跡	SZ01出土壺3点・鉢・高杯・手焙り・器台 SZ01出土壺6点・甕1点 計14点	H12.10.12～ 13.1.24
春日井市教育委員会	企画展「弥生から古墳へ」に展示	朝日遺跡	加飾太頸壺2・短頸壺・直口壺・高杯8・単純口縁甕・受口状口縁甕・Ｓ字状口縁甕・器台6・鉢型短頸壺	H12.11.1～ 12.11.16
幸田町教育委員会	幸田町埋蔵文化財展「甦る 原始、古代、中世の幸田」に展示	牛ノ松遺跡 東光寺遺跡	尖頭器1・石鏃12・灰釉系陶器椀10・宋三彩洗8片 土器1・深鉢3・石棒4・玉3・壺7・甕4 計46点	H12.11.21～ 12.12.15
名古屋市見晴台考古資料館	特別展「はじまりのムラ」に展示	平手町遺跡	壺2点	H12.11.29～
安城市歴史博物館	特別展「弥生の絵画　倭人の顔」に展示	朝日遺跡	絵画土器1・線刻土器1・記号土器片5・絵画土器片4・線刻土器片1 計12点	H13.1.26～

検　討　会

	日付	内　　容
第105回	2000.5.19	平成11年度報告書・研究紀要内容発表 「第88集　下津北山遺跡」　早野浩二調査研究員 「第89集　岩作城跡・能見城跡」　武部真木調査研究員 「研究紀要　愛知県の縄文遺跡(1)」　川添和暁調査研究員 「研究紀要　豊田地区出土の木製品について」　永井邦仁調査研究員 「研究紀要　三河地域の中世集落」　川井啓介調査研究員
第106回	2000.6.16	自然科学分析の基礎と試料採取法講習会 １部「樹種同定」　講師：植田弥生（株式会社パレオ･ラボ） 「種実同定」　講師：新山雅広（株式会社パレオ･ラボ） ２部「試料採取実習とデジタル顕微鏡デモ」 講師：近田勝義（株式会社キーエンス）
第107回	2000.7.21	平成11年度報告書内容発表 「第 83 集　朝日遺跡」　宮腰健司専門員 永井宏幸調査研究員
第108回	2000.9.22	講演「近畿地方からみた東海地方内陸部の墓制」 講師：中村健二（(財)滋賀県文化財保護協会）
第109回	2000.10.20	平成12年度上半期発掘調査成果報告会 1.「猫島遺跡」 2.「上中・西屋敷遺跡」 3.「烏帽子遺跡」 4.「岩崎６号窯遺跡」 5.「寄元古墳群」 6.「石堂野Ｂ遺跡」 7.「ＮＡ311号窯」
第110回	2000.11.17	「愛知県埋蔵文化財センターにおけるデジタルデータの活用とインターネットの利用法」 赤塚次郎主査・武部真木調査研究員
第111回	2000.12.22	平成11年度研究紀要内容発表 「朝日遺跡出土の棒状鹿角製品」　川添和暁調査研究員 「古代「三河型」甕の成立と展開（仮題）」　北村和宏調査研究員 「遺物組成から見る戦国時代の尾張の拠点城館遺跡」　鈴木正貴調査研究員
第112回	2001.1.19	「印刷工程の実際」（株式会社クイックス） 検討課題「報告書DTP、資料デジタル化における問題点について」
第113回	2001.2.16	現場検討会 「古新田遺跡」（西尾市）・「下懸遺跡」（安城市）
第114回	2001.3.16	平成12年度下半期発掘調査成果報告会 1.「清洲城下町遺跡」 2.「島崎遺跡」 3.「志賀公園遺跡」 4.「上品野蟹川遺跡」・「惣作・鐘場遺跡」 5.「城山城遺跡」 6.「木戸城跡」

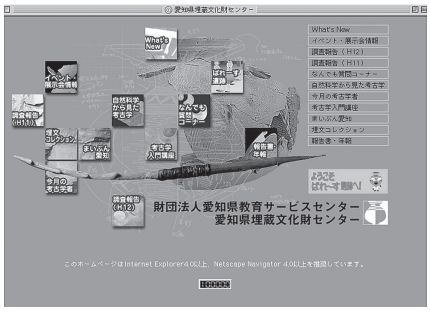
ホームページ

内容の更新

日付	更新内容
2000.5.	考古学関連イベント案内/調査報告（平成12年度調査遺跡地図）/今月の考古学者（佐藤公保）/まいぶん愛知no.60PDF/県内遺構遺物集成（鳥形木製品出土遺跡一覧・銅鐸の舌出土遺跡一覧）
2000.6.	考古学関連イベント案内/調査報告（寄元3号墳）/今月の考古学者（鬼頭　剛）
2000.7.	考古学関連イベント案内/今月の考古学者（中野良法）/まいぶん愛知no.61PDF/季節のコレクション（蚊いぶし）
2000.7.	考古学関連イベント案内（平成12年度埋蔵文化財展情報）
2000.8.	小中学生向けコンテンツ「ようこそ、ぱれ～す遺跡へ」
2000.9.	考古学関連イベント案内（現地説明会案内・石堂野遺跡）
2000.10.	考古学関連イベント案内/今月の考古学者（北村和宏）/まいぶん愛知no.62PDF/県内遺構遺物集成（古鏡集成）
2000.12.	考古学関連イベント案内/調査報告（上中・西屋敷遺跡、石堂野B遺跡、長谷口遺跡、八王子遺跡、今町遺跡）/自然科学からみた考古学（珪藻・花粉化石、昆虫化石、ベンガラ、植物珪酸体の分析）/今月の考古学者（池本正明）
2001.3.	考古学関連イベント案内/まいぶん愛知no.63PDF/県内遺構遺物集成（畿内系土師器）/刊行物案内（平成12年度）

Q＆Aによせられた質問

日付	更新内容
2000.5.	考古学関連イベント案内/調査報告（平成12年度調査遺跡地図）/今月の考古学者（佐藤公保）/まいぶん愛知no.60PDF/県内遺構遺物集成（鳥形木製品出土遺跡一覧・銅鐸の舌出土遺跡一覧）
2000.6.	考古学関連イベント案内/調査報告（寄元3号墳）/今月の考古学者（鬼頭　剛）
2000.7.	考古学関連イベント案内/今月の考古学者（中野良法）/まいぶん愛知no.61PDF/季節のコレクション（蚊いぶし）
2000.7.	考古学関連イベント案内（平成12年度埋蔵文化財展情報）
2000.8.	小中学生向けコンテンツ「ようこそ、ぱれ～す遺跡へ」
2000.9.	考古学関連イベント案内（現地説明会案内・石堂野遺跡）
2000.10.	考古学関連イベント案内/今月の考古学者（北村和宏）/まいぶん愛知no.62PDF/県内遺構遺物集成（古鏡集成）
2000.12.	考古学関連イベント案内/調査報告（上中・西屋敷遺跡、石堂野B遺跡、長谷口遺跡、八王子遺跡、今町遺跡）/自然科学からみた考古学（珪藻・花粉化石、昆虫化石、ベンガラ、植物珪酸体の分析）/今月の考古学者（池本正明
2001.3.	考古学関連イベント案内/まいぶん愛知no.63PDF/県内遺構遺物集成（畿内系土師器）/刊行物案内（平成12年度）





平成 12 年度　愛知県埋蔵文化財センター職員

所長（兼管理課長）	藤澤宣勝	
管理課		
課長補佐	伊藤純一	
主　査	種田享司	
主　事	中野成章	坂 美貴子
	岡田浩志	吉田弘勝
調査課		
課　長	都築暢也	
課長補佐（兼主査）	佐藤公保	北村和宏
主　査	赤塚次郎	石黒立人
	花井　伸	服部信博
	川井啓介	
専門員	小澤一弘	宮腰健司
主　任	酒井俊彦	池本正明
	松田　訓	
調査研究員	中野良法	小嶋廣也
	竹内　睦	宇佐見 守
	鈴木正貴	鈴木　裕
	魚住英史	樋上　昇
	武井繁樹	織部匡久
	木川正夫	堀木真美子
	永井宏幸	鈴木達也
	鬼頭　剛	洲嵜和宏
	成瀬友弘	武部真木
	皆見秀久	蔭山誠一
	川添和暁	永井邦仁
	早野浩二	

（平成 13 年２月１日現在）

本書に掲載した地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の２万５千分の１地形図を複製したものである。（承認番号　平 12 総複、第 431 号）

年報　平成 12 年度

平成 13 年３月

編集・発行　(財) 愛知県教育サービスセンター
　　愛知県埋蔵文化財センター

印　刷　　(株)　　クイックス

本書は再生紙を使用しています。